

大魔王ハルカ

秋月あきら

第一部

第一話 いざ、召喚！

部屋の中は、カビや薬品臭い　そして汚い。

汚いというのを具体的に言うと、部屋の中は魔導書や魔導具の類が床に散乱していて足の踏み場が無いということ。

この汚い部屋（家）に住んでいるのはこの国で超有名な魔導士ルーファスである。有名といっても彼の使う魔術が凄いとかが、そう言ったもので有名なのではない……彼が有名なのはその『へっばこぶり』からであった。

へっばこ魔導士ルーファスの名を大人から子供、お隣さんの猫まで（どこの猫だよ）知らぬ者はこの国にはいない。ルックスはそこそこイケてるのだがそのへっばこぶりから、彼のことをかっこいいと言う人はそうはいなかった。

そんな彼は今、汚名返上のため、あるビックな召喚魔法をしようとして試みていた。

大魔王ルシファアの召喚。未だかつて無い超一流の悪魔の召喚。この大魔王ルシファアを召喚して自分の下部として使うことができれば彼の名は超超天才大魔導士ルーファス様として世界に轟くだろう……。それはあくまで成功した場合なのだが……。

3 大魔王ハルカ（旧）

ルーファスはカビ臭くて薄暗い自宅の地下室（実験室）で大召喚の準備をしていた。

「よし、あとは呪文を唱えるだけだ」

ルーファスは一息付くと手に持っていた分厚い魔導書を開いた。

「えーと、なにになに……闇よりもなお暗きもの……されど汝の輝きは陽よりも明るく……黄金の翼をはためくかせる……我は汝と契約する……出でよ大魔王ルシファー!!!」

呪文の詠唱が終わると同時に建物が大きく揺れ、戸棚に入っていた薬品の入ったピンが次々と地面に落ち激しい音を立てながら割れた。

「成功か……それとも……」

突如床に描かれた魔法陣のちょうど上、約一メートルくらいのところの空間が渦を巻くように歪曲し始めた。そして歪んだ空間の中から何かが飛び出してきた。

「やったー成功だ!」

と思った瞬間。

「いたたたたた、おしり打っちゃった……」

と大魔王らしからぬ声が……?

出てきたのは女の子!? しかも、出てくる時にお尻を打ったらしく、お尻を擦っている。

「(っ、「これが……大魔王なのか!? ……しかし)」

召喚された女の子は薄い栗色の髪に黒い瞳、年は一五・六歳

4 大魔王ハルカ（旧）

といったところか、顔はそこそ可愛い、って普通の女の子みたいな感じ？

「（……普通っぽいぞ、だがしかしこの世界では見たことのセンスの服を着ている……変わり者？）」

女の子の服装は明らかにこの世界のものではなかった。ミニスカートにちょっと変わった上着にあればリボンか？

「よし、ここは直接尋ねるのが確実だ）あ、あなたルシファアさんですか？」

女の子と目が合った。女の子は凄く驚いた表情をしている、何だか今始めて自分の前に人がいることに気づいたようだった。

「ここどこ？」

女の子は辺りを見回して、いきなりルーファスの襟首に掴みかかってきた。

「ここ何処なの!？」

「（この子なんだか凄く怒ってるぞ、いや、メダニか？）あ、あのここは私の家です……」

「だからなんで私がここにいるわけ!？」

「それは私があなを召喚して」

「召喚？ なにそれ？（うゝん、RPGに出てきたあれかな？）」

「別の異世界からモノを呼び出す魔法ですけど……」

「意味わかんない」

「（召喚も知らないなんて……もしかしてやっぱり、失敗）あなたルシファアさんですか？」

「ルシファー、誰それ？（外国の人？）」

「（やっぱり、失敗か）」

案の定ルーファスは召喚の術を失敗していた。それというの
も、

「（やっぱり、人の代わりにマグロの刺身を生贄にしたのがダメ
だったか、ふんばつしたのになあ）」

あたりまえだ、召喚の手順は正確に行わなければ意味が無い。
しかも、人の代わりにマグロの刺身を生贄にする魔導士がどこ
にしようか（ここにいたのだが……）。マグロの値段が高いか
ろうが安かろうが大した差はない、どちらにしろ失敗するの
から。

「何考えてポーンとしてんの」

パン！ と女の子の軽い平手打ちがルーファスのほっぺたに
ヒットした。

「痛いだろ、何すんだ！」

「ねえ、早く家に帰りたいんだけど、ここ何処なの？」

「（ちょっと痛かったが相手が女の子だからここは我慢だ）こ
こはアステアと呼ばれる国にある私の自宅だ」

「アステア……聞いたこと無いけど？」

「たぶん君はことは別に世界から召喚されたのだろう」

「別の世界？（意味不明？）」

女の子は困惑の表情を浮かべた。

「では君の世界の名前を言ってみたまえ」

「世界……世界に名前なんてないけど星の名前はチキユウだけ

ど」

「国の名前は？」

「ニホンっていう国」

「（やはり聞いたことが無い名だ）やはり、君は別の世界から来たらしい」

「まさか!? ……信じられるわけないでしょ、本当だとしても何で私が……?」

ルーファスの表情が突然焦りの色へと変わり、頬に冷たい汗が流れた。

「そ、それはつまり……（まずい）」

「それはつまり?」

ルーファスの顔に女の子の顔がぐぐっと近づいて来た。その顔についている二つの瞳はまさに『疑い』の眼差しをしている。

「ごめん、失敗して呼んじゃった」

「……はっ?（失敗したってどういうこと）」

「つまり、君は間違っただけに呼ばれたわけだ（つつい、本当のことを言ってしまった）」

「じゃあ早く帰してよ」

「それは無理」

ルーファスはあっさりさっぱりきっぱり答えた。

「無理ってどういうこと?」

「生憎だけど、帰り方じゃないんだ、なんせ普通は用事が済んだら勝手に帰ってくれるもんだから、あははは」

「あははは、じゃないでしょ、”方法を”考えて!」

7 大魔王ハルカ（旧）

女の子は方法のところをかなり強調して言った。

「うーん、たぶん用事が済めば帰れると思うけど……（その用事ってというのが……）」

「用事って何？」

「召喚者が召喚したモノを呼び出した理由っていうかなんていうか」

「じゃあその用事を済ませれば私は家に帰れるわけ？」

「まあそういうこと……かなあ」

ルーファスは言葉に明らかにおかしい含みを持たせた。

「（明らかになにかを隠してる表情）言葉が途中で止まったけどどういふこと？」

「（やばいぞ、やばい、しかしこーなったら本当のことを）…

…実は」

「実は？」

「世界征服をするために呼んだりしちやっただよねえ……工へっ」

「はっ！ 世界征服？（なに言ってるんのコイツ）」

「だーかーらー、せ・か・い・せ・い・ふ・く」

ルーファスはフリ付きでちょっと可愛らしく言ってみた。がすんなり交わされた。

「詳しく説明して」

「あのさあ、その前に襟放してくれないかな？」

「あっ（ずっつと掴んだままだった）」

女の子に襟首を放されたルーファスは襟を両手できゅっきゅ

つとやるど、

「まあ、ここで話すのもなんだから、上に上がるう。こっちはよ」

すたすた歩くルーファスの後ろを女の子は付いていき、二人は階段を上り一階に出た。

「足元気をつけて、凄く散らかってるから。私は紅茶でも入れてくるからそのへんに座ってて」

そう言うとルーファスは台所の奥に消えて行ってしまった。
「（足元気をつけてって）」

女の子はポケットから眼鏡ケースを出すと、ささっと眼鏡を取り出しかけた。

「（うっあゝマジで汚い）」
部屋中は魔導書や魔導具の類で埋め尽くされ……まるでここ

は腐海の森のようであった。

そこに紅茶を入れてきたルーファスが台所から帰ってきた。

「なんだゝまだ座ってなかったの」

「だってこの……」

女の子はルーファスの方を振り返った瞬間、言葉を失った。

「（かっくっく）」

そうルーファスのことを見てそう思ったのだが……。確かにルーファスの容姿はなかなかいいケてる、綺麗な顔立ちに銀髪の長いさらさらヘヤー、長身で確にかっこいいが……。この国で彼のことをかっこいいと言う人はあんまりいない、確かに彼のかっこよさ、美しさは隠れファンクラブが存在するほどの

ものではあるが、そんなことよりもドジで間抜けでへっぼこな面が目立ってしまいどこに行ってもへっぼこ魔導士と言われてしまう。そのためファンクラブは永久に『隠れ』のままだったりする。

「どうかした？（私の顔に何かついてるのかな……あつ眼鏡……かわいいかも）」

「さっきまで気づかなかったけど、あなたかつこいいのね」

彼女が今のいままで気づかなかったのには理由がちゃんと存在する。地下室が暗かったから、かなりさつきまで混乱してたから、（メダ ニ？） 彼女はかなり目が悪いから、以上。「いや、かつこいいなんて言われたのひさしぶりだなあ（いいこと言うなこの子）」

「（こんなにかつこいいのに）なんでそんなにかつこいいのに？」

「私のことを知ってる人はそんなこと言ってくれないからなあ
あはは」

「どうして？（実はちょー変態とか）」

「まあ、そこに座って」

ルーファスの指さしたそこは

「（がれきの山？）」

ルーファスの指の先にはがれきの山が……ではなかったよく見ると椅子だった。

「（あまりのも散らかってたから……）」
ルーファスはすぐに女の子の気持ちを察して、

「はい、紅茶」

紅茶を手渡すと、椅子の上にあっただがらくた？ を掃除した

（床に落とした？）。

「どうぞ」

ルーファスはどうぞっていう手のポーズを決めてニッコリ笑った。その笑顔は美しくてうっとりしそうだったけど女の子は思った。

「（かっこいい人ほど不精者 b y フルーツ スケット）」

そんな言葉が頭を過ぎった。

「どうしたの早く座って」

女の子はルーファスに勧められるまま、よいしょって感じで座った。それを見てルーファスもどっこいしょって感じで座った。ちなみに声は出さなかったけど。

「では、私がかっこいいと言ってもらえない理由ですが……それが世界征服しようと私が思った理由にも繋がっていて」

「うんうん、それで」

女の子は食い入るようにルーファスの話を聞いている。興味

津々といった感じだ。

「実は私、この国では『へっばこ魔導士』と言われていて、そいつらを見返してやるうかなとかかって思っ……」

「（私を間違っ……て召喚したぐらいだから……てゆーか、見返すためにっ……）」

「魔導学園に通っていたころから、ドジで間抜けでクラスメイトからはいじめられるし…… あぁ人生最悪」

11 大魔王ハルカ（旧）

ルーファスは軽い回想に浸っていた。

「あ、あのあ〜（ちょっとこの人変かも）」

「あ、これは失礼」

「あのだから、私が家に帰る為には具体的にどうすれば…
…？」

「世界征服だから…：人間たちを支配して、奴隷にして、大量
虐殺とか…：（召喚しようとしたの大魔王だし）」

「それって、魔王みたい」

「ピンゴ！ そう私が召喚しようとしたのは大魔王なんだよ
ね」

「ようするに私に魔王の変わりをしろってこと？」

「う〜ん、頭の回転がすばらしい」

「無理！」

「じゃあ、一生帰れないな」

ルーファスは紅茶を少し口に入れた。

「（ちょっと、濃いな）」

「あ、あんたねえ、誰が呼んだのよ、誰が！」

女の子は怒りのあまり勢いよく立ち上がった。その拍子に手
に持っていたカップから紅茶が放物線を描きながら逃げだした。

「あつちい〜」

逃げ出した紅茶の二分の三がルーファスの顔に、美しい顔に
（美しいというのはあんまり関係ないか）、見事かかった。そ
れは女の子がまるで狙ったかのようにだ、もし狙ってやったなら
かなりの悪女だ。まあこれは不可抗力ってやつだけだ。

「ご、ごめんなさい（ど、どうしよう）」

女の子は慌ててポケットから駅前でもらったポケットティッシュを取り出し、ルーファスの顔をごしごしとやった。

「あ、あの（痛い）」

「はあ……はあ……（これだけ拭けば）」

確かにこれだけ拭けばお茶は一滴も残ってないだろう……しかし、ルーファスの顔はティッシュのカスですごいことになっていたけど。

ルーファスは顔についたティッシュをパツパツと振り払うと、ちよつと真剣な顔付きになった。

「……（そういえば）」

「……どうしたの？（すごい真剣な顔）」

「まだ……」

「まだ……？」

「名前聞いてなかったよね」

「……（……ばかあ）」

「私の名前は（自称）天才魔導士ルーファス」

「あ、私はハルカ（天才ってへっぽこなんでしょ）」

「よろしく」

ルーファスはハルカの手を無理やり掴んで手をぶんぶんと握手をした。

「あのさあ、私が帰れる手段は他にないの？」

「さあ……まあこの世界は広いから、そのうち見つかる（かも）」

ルーファスの頼りない言い方にハルカは、
「はぁ……少し休む」

とため息を突き、椅子にボタンともたれた。

こうして（自称天才）へっぽこ魔導士と異世界から来た女子ハルカの物語、ハルカが元の世界に戻る方法を探す物語、ハルカが魔王になる物語？ が始まった……。

ハルカはルーファスの家のソファ―に座って考え事をしていた。

「（はあ、みんな心配してるんだろうなあ。学校終わって家に帰ってたらいきなり変な渦に飲み込まれて……）」

そんなことをハルカが考えていたら、遠くの方からルーファスの声が聞こえてきた。

「ねえ、昼ごはんまだあ？」

「……（なんで私が？）」

ハルカはここに来て以来なぜか家事全般をやっている。

「昼ごはんは？」

「自分で作ればいいでしょ！！」

ハルカの声が家中に……家の外まで鳴り響いた。さぞかしお隣りさんの夕マも驚いたに違いない。

「だつてさあ？」

ルーファスはそう言いながら、気だるそうなにあくびをしながらハルカの前に姿を現した。

「だつてさあ、じゃないでしょ（この人私に来るまでどんな生活してたんだろ）」

ハルカがここに来て以来家事全般をしているのは見るに堪えなくなつてのことだった。

「ふあ……（眠い）」

ルーファスは頭をぽりぽりと掻きながら大きなあくびをまたしている。そして、一言。

「おなか空いた」

「……………（死）」

正直ハルカはこの時、ルーファスに対して殺意が沸いた。

ハルカはこの世界に来て三日の間、この世界についての知識を学ぶとともに、それ以外のことで膨大な時間を費やした作業があった。……それは掃除、この部屋の掃除である。散乱する魔導具の類が大地を形勢し山をつくり、まさに足の踏み場の無かったこの部屋を彼女は三日間のほとんどの時間を費やして掃除。そして、ついに今日の昼間家中が片付き、疲れた彼女がソファに座っていたところをルーファスにおながが空いたと声をかけられたのだった。

「あゝ、昼ごはん」

「私はもう食べた」

「仕方ないなあ」

「（仕方ないじゃないでしょ）」

ルーファスは両手を広げ大きく深呼吸をして、口に空気をいっぱいたためモグモグと口を動かしてごくんと何かを飲み込んだ。

その光景はかなり変としか言いようがない。

「……………（何やってんのこの人）」

「……………（やっぱり空気じゃおなかいっぱいにならないか）」

そんなことでおなががいっぱいになるはずない。

「（気晴らしに散歩でもしようかな）」

そんなことよりも自分で昼飯作れよとツツコミを入れたくなる。

「私はちょっと散歩に行ってくるけど、ハルカも来る？」

「……うん（外の新鮮な空気が吸いたいかも）」

「じゃあ、行こうか」

そんな訳で二人は心地よい日差しの中を散歩することになったのだが、この散歩があんなことを引き起こすなんてこの時の二人は夢にも思わなかった。

この世界はガイアと呼ばれている。名前の由来はよくわかっていないが、このガイアの地は不思議なエネルギーを持っている。そのエネルギーとは大地から発せられるエネルギーとこの世界に存在する全てのモノが持っているマナと呼ばれる命の源のことで、その二つのエネルギーが共鳴すると魔法が使えるらしいということらしい。ルーファス曰くだが。

この世界に存在する魔導士とは、そのマナのエネルギーを使うことにより魔法を使うことのできる人々のことで、魔法の使い方は自分自身のマナを消費して魔法を使う場合と自分以外の人や物などのマナを借りて魔法を使う二種類の方法がある。この説明もルーファス曰くだが。

ルーファスの住むアステア王国はこの世界でも三本の指に入るほどの魔法国家で（ちなみに一番はこの国なのだが）、街のあちこちには魔導具を売る店が多く存在する。そんなわけ（何が？）二人は散歩がてらに一軒の魔導ショップに立ち寄ることにした。

「あー、ここ、ここ（それにしても、いつも思うけどこのネーミングは）」

ルーファスが指をさした先には店の看板が、

「……美人魔導士のいる店？（こ、これが店の名前!）」

ハルカが店のネーミングに困惑しているところに不意にルーファスから声をかけられた。

「何してんの、入るよ」

「あ、う、うん」

ルーファスが店のドアを開けるとカランコロンというベルの音が。

「（綺麗な音色）」

そんなことを思いながらハルカがふとルーファスの方を見ると、彼は耳を両手で抑え目をぎゅっと瞑っている。ハルカは思わず声をかけてみた。

「何してんの？」

「……………」

返事がない……。

「ねえ」

「……………ぷはっ、苦しかった」

「……………（何してたんたる）」

ハルカが疑問で頭を悩ましてたとき、店の奥からちょっと低く呟く感じの女性の声が、

「耳を塞ぐのはわかるが、目つぶって息止めることないだろ

（さすがはへっぼこ）」

「あははは、そうなの」

暗がりの中に明かりがポツと浮き上がったかと思うと、そこ

に女性の顔が現れた。

「こんばんわ、へつぼこ（……ん、もうひとり誰だ？）」

「やあ、こんちわカーシャ、ちなみにまだ外は昼だよ」

「部屋の中はいつも暗いから、私にはいつでも夜（私は夜に生きる女……ふふ）」

ハルカはこのとき思ったことがある。

「（この人も変わり者だ）」

「だからって、ろうそく一本で客を迎えることないでしょ（だから変な客しか寄り付かないんだ）」

ルーファスもその『変な』ひとりだと断言できると思う。

「で、今日は何をお求め」

「ああそれがだね」

ルーファスは店のカウンターに歩み寄って、自分の顔を店の主カーシャの顔に近づけた。

「実はね（やっぱり、近くで見た方が綺麗だ）」

そのために近づいたのが、ルーファス！

「あの後ろにいる娘のことか？（あ、ああ勝手に店のものに触るな）」

「ビンゴ（さすがカーシャ勘が鋭い）」

ガシャン！！

「だから店の物に触るなど言っただろうが」

「ご、ごめんなさい（高そうなの壊しちゃった）」

ハルカは店の物を物色していたとき、綺麗な置物があったからつい触ってしまったら、床にガシャンと落として壊してしま

つたのだった。ちなみにカーシャは心の中で『触るな』と思っただけで直接口には出していない。

「壊してしまった物は仕様が無い、へっぼこお前が弁償しろ」

「な、なんで私が」

「お前が連れて来たのだろ（へっぼこだから……ふふ）」

二人の会話の間にハルカが割り込んできた。

「あ、私が弁償しますから（でも、私この国のお金持ってないんだよね）」

「……二万ラウル」

カーシャがボソツと呟くように言った。ちなみにラウルとはこの国で使われているお金の単位で日本円でいうと一ラウル一三元といったところで、二万ラウルは円に換算すると二〇〇〇〇×一三三三三三万、一三三万円。もうひとつちなみにラウルっていうのはこの国の初代国王の名前。

「ねえ、ルーファス二万ラウルって高いの？」

「一ラウルチョコが二万個買える（二万個も食べきれないな）」

「例えば悪い（一ラウルチョコって五円チョコみたいなのかな）」

「じゃあ、うめえぼう（二ラウル）が一万一・五〇〇個買えるとか（これも食べきれないな）」

「だから、わかんない（うめえぼう？ ……これも聞いたことがあるような名前）」

そんなやり取りを闇の奥から見つめるひとりの女性が……っ

てカーシャなんだけど。

「二人はどういう関係なのだ？（衝撃スクープ、へっぼこに恋人が！！……なんて……ふふ）」

「ああ、そうそう、そのことでここに来ただけど（話をそらして弁償はパーだ作戦！）」

「さっきの話の続きだな」

ルーファスはこちらはって感じの手のポーズを決めて、ハルカの紹介を始めた。

「大魔王を召喚しようとして間違って召喚してしまった代魔王ハルカちゃんです！」

「……（大魔王を召喚しようとした？……このへっぼこが）」

「こんにちは加護ハルカです」

「私はカーシャだ、よろしく」

「（カゴハルカっていうのがフルネームだったのか、今知った）」

ルーファスはちよつとショック！

「それで、私の店に来た理由は？（かわいそうな娘……かわうそう……かわうそ……カワウソ娘（仮）。……ふふ）」

『（仮）。』って何なんだカーシャ……！

「え〜と、それがだねえ。帰せなくなっただよね」

ハルカは思わず店のカウンターに身を乗り出して、

「そうなんですよ、この人勝手に私のこと呼んどいて、帰せないとか言うんですよ！（あ、この人近くで見ると綺麗）」

「そうか、このへっぽここのせいで元いた場所に帰れなくなつたとそういうわけか（今年のへっぽこ大賞もこいつで決まりだな……ふふ）」

「ほんとへっぽこですよねえ（あつ今この人口元が緩んだ、それにしても綺麗なひと……でもあの店のネーミングは無いと思う）」

カーシャはちよつと真剣モードに切り替えてしゃべりだした。「召喚というのは役目が済む、あるいは召喚者が無理やり戻るか召喚されたモノが自ら戻るのだが……この娘に与えた役目はなんだ？」

ルーファスは口に軽く手を当て、

「え〜とだね、世界征服をしてみらうためだったかなあ〜」

『かなあ〜』じゃないだろルーファス！

「一つ目の条件は無理だな、では二つ目は（世界征服なんて……子供の夢か）」

「知らない」

ルーファスはあつさりさつぱりきつぱり答えた。

「……だろうな（へっぽこ）、この娘に自ら戻るチカラがあるとは思えん。やつぱり世界征服が一番打倒だな（大魔王ハルカか）」

「そ、そんな二つ目の方法、カーシャさんは知らないんですか？」

「召喚者が無理やり戻すというのは可能性の話で実際に戻す方法はあるのかどうかは知らん（適当な思いつきで言ったから

な」

「じゃあ私やっぱり、大魔王になって世界征服するしか……
（サイテー）」

落ち込んでるハルカを見てルーファスが人事のように笑った。

「あはは、大変だねえ」

「って誰のせいよ！！（このへっぽこ）」

愕然といった感じのハルカに追い討ちをかける一言がカーシヤの口から発せられた。

「さて、では弁償してもらうか」

「あつ……（さっきの置物が）」

「二万ラウルなんてあるわけないじゃん（作戦失敗）」

「金はいい、ただ」

「ただ？」

二人の声が揃った。

「新薬の試薬をしてみらう（自分じゃ、恐いからな）」

ハルカはあつさり、きっぱり、断った。

「それはヤダ（ヤナ予感がする）」

「まあ、ぐぐつと飲み干せ」

カーシヤはそう言うと、カウンターから身を乗り出しハルカの口を無理やりこじ開け変な液体を流し込んできた。

「にやににゆるの！（何するの！……しかもマズイ）」

「ハルカに何を飲ませた!？」

「マナのチカラを増幅させる薬だ。まあ効果は一・二倍程度だが」

すぐに薬の効果は現れた。

「……（か、身体が熱い……意識が）」

ハルカの身体が当然まばゆい光を放ち、暗い店を一瞬にして白い世界へと変えた。そして、光はハルカの身体に吸い込まれるように消えていき、少し間を置いてハルカを中心に衝撃波が巻き起こった。

「な、何だ！」

とルーファスが言ったときには彼の体は宙に浮きそのまま衝撃波によって壁に叩きつけられていた。

「予想外の効果が出てしまった、気を付けるルーファス」

「ダメだ、もう背中打った（かなり痛い）」

ハルカの身体がまた、輝き始めた。

「カーシャ、あれどういうこと？」

『どういうこと』とは、『なんで光ってんの？』という意味である。

「マナの暴走だ。ひとまず店の外に走れ！（まずいことになった）」

ハルカの放出した光はまた吸収され第二波が店の出口へと走る二人を襲う。そして、衝撃波に押された二人の身体は自分の意志に反して宙を飛び店の外に投げ出されるよに放り出されてしまった。

その光景を見ていた、通行人が群がって来た。その中の一人の中年男性が二人に声をかけた。

「お二人さんどうかしたか、服がボロボロだぞ」

そのとき、店がすごい轟音とともに大爆発を起こし、店の破片が辺りに飛び交う光景を目の当たりにしたこの場にいた全ての人は口をあんどり開け固まってしまった。そして、ルーファスは首だけをカクカクとロボットののように曲げ、『カーシャさん質問があります』をした。

「マナの暴走って何？」

「そんなことも知らんのか（へっばこ）。マナの暴走とは自らのマナもしくは借りたマナが大きすぎて制御がきかなくなり、大爆発を起こすことだ！」

などとカーシャが説明をしていた最中、またも衝撃波が巻き起こり、辺りの建物を全てなぎ払いハルカの周り半径一〇メートル先までまっさらな大地となってしまうのだった。

それを見た集まって来ていた野次馬が大声を上げながら一斉に逃げ出した。……二人を残して。

「予想以上すぎるマナの持ち主だあの子は（ただの娘だと思っただのが……くっ）」

またも爆風が！ 二人は瓦礫となった家の壁の裏まで走りそこに身を潜めた。

「でもハルカはマナも知らない異世界の人だよ（なんかすごいことになってきた）」

「今はそんなことどうでもいい、あの子を止めるぞ（たぶん、このままいくとこの地区は崩壊だな）」

「どうやって？」

「作戦はこうだ。次の衝撃波を合図に走っ」

カーシャの言葉途中で途切れた。それはなぜならば、凄い爆風とともにそれも今までで一番デカイ衝撃波が巻き起こり、二人の隠れていた壁とともに二人を天空へと巻き上げられたからだ。だが、二人はそんなことお構いなしに空へ舞い上がりながらもなお会話を続けていた。……この二人の神経普通じゃない。

「作戦変更、このままレビテーションで彼女のところまで飛んで行き、マナを大地に逆流させる。いいな？」

「なんとなくわかった」

レビテーションとは空中を自由に飛ぶことのできる魔法で、大気のマナを大量に消費する高等魔法だ。

二人がレビテーションで彼女に近づいたその姿はさながら獲物を狙う鷹のようであった。が狩りは失敗に終わった。衝撃波がまた巻き起こったのだ。カーシャは乱気流によって地面に叩きつけられ重症、ルーファスは奇跡的にハルカの近くに不時着した。

カーシャは声を出すのも精一杯なほどの重症で血反吐を吐きながら最後の力を振り絞ってこう叫んだ。

「ルーファス、マナを大地に逆流させる！！」

ルーファスも着地したときに身体を強く打ちつけられ足をやられたらしく、地面に這いつくばりながらも手だけでハルカの足元までなんとか行ったのだが、ここでルーファスの口からとんでもない一言が、

「マナを逆流させるってどうやるの？（さっきはわかったとか言っちゃったけど、あはは）」

「……………（世界一のへっばこ魔導士が！！）」

カーシャはもう声を出す力すら残っていないかった。

「くそお、こうなったら一か八かだ！」

ルーファスはハルカの足を掴むと、目を瞑り全神経を集中して、

「（ハルカのマナがガイアに逆流……ハルカのマナがガイアに逆流……）」

とまるで呪いを架けるかのように心でなんどもなんども念じてみた。がしかし、マナの波動は治まることはなくハルカの身体が激しく輝き出し、衝撃波が……起こらなかつた？

「治まったのか……？」

いや、間があっただけだった。嫌な予感がしたルーファスはすぐさまカーシャに声をかけようとしたが間に合わない。爆風がルーファスを襲った。しかし、彼は見た、一瞬だったがあるものを見た、カーシャの方を振り向いたとき見た、何を見た？カーシャがいるはずの場所には彼女の変わりに『うさぎの人数』があつた。ルーファスは吹き飛ばされながら大声で思わず叫んだ。

「なんじゃこりゃー！！ byジーンパン」

そして、全てが終わつた。ルーファスが気づいたときには、彼は自宅のソファーで寝ていた（ちなみにハルカがこの世界に来て以来彼はここで寝ている）。

「う、ううん（どこだ……ここは）」

「こんばんわ、ルーファス」

ルーファスの耳に届いた声はカーシャのものだった。

「カーシャ!？」

ルーファスは思わずびしつとしゃきつと立ち上がった。

「ここは、へっぽこの家だ」

「はっ？ 私の家？ ……あの後どうなった？（いや、むしろ

私はあの『うさぎ』の方が気になるが）」

「あの後か？ ……あの後、ハルカは結局マナを大暴走させマナをほどよく消費させ、ばたんと気を失ったが、今じゃもう」

「ルーファス、おはよう」

ハルカが笑顔でルーファスを見ている。

「よかった、無事だったか」

ルーファスは深くため息を突き、ソファーにバタンと倒れこんだ。

突然カーシャの顔が渋い表情になった。

「どうしたのカーシャ？」

「実はな… マナの暴走で出た損害が予想を遥に超えたもので… 私の店から半径一キロメートルが消し飛んだ。まあ、けが

人は多数出たが、奇跡的に死人は出てない（……これは笑えない

い……ふふ）」

「はっ?！」

これを聞いた二人は同時にびくつき仰天してしまった。そんなことなど構いなしにカーシャが話を続ける。

「というわけで。誰がこんなことを起こしたかを国をあげて

探している、すなわちバレるとマズイので今日の出来事は三人だけの秘密にしよう」

「秘密にしようってカーシャのせいだろ！」

「まあ、そうだが、今回のことで一つ大きな成果があった。それはハルカが元の世界に帰る方法だ」

その言葉にハルカが身を乗り出してきた。

「えっ、どういう方法ですか？」

「あのマナの潜在能力は素晴らしいものだ、あのチカラを使えば世界征服も夢ではない（大魔王ハルカ……ふふ）」

「はっ？」

ハルカの動きが思わず止まってしまった。

「それでは、私は店の再建のため帰らせてもらう。さらばだへつぼこ、そして大魔王ハルカ」

カーシャはそんな感じで言いたいことだけ言って勝手に帰ってしまった。

「よかったねハルカ、大魔王になれるってさ（大魔王ハルカ……結構いいかも）」

「私、大魔王なんかじゃない」

ハルカは怒りながらドシドシと足音を立て自分の部屋（元ルファスの部屋）に閉じこもって鍵を掛けてしまった。

「（何か悪いこと言ったかな？）」

これ以降丸二日間、ハルカはルーファスと口を利いてくれなかったという。だがへつぼこなルーファスにはいつまで経ってもその理由は不明なままだったらしい……。

はたして、この先ハルカはどうなるのだろうか、元いた世界には無事帰ることができるのだろうか？

いや、むしろ今はそんなことよりも『うさぎ』とか何であるときルーファスは耳と目を塞いで息を止めていたのだろうか…

…そっちの方が気になる？

そんな疑問を残しながらこの物語はまだまだ続くのであったりする……。

第三話 ライラの写本が

ハルカはふと思ったことがある。

「(なんで言葉が通じるんだろ?)」

ハルカがこっちの世界に来て一週間の月日が流れようとしていたのだが……。今更だがハルカは初めてこの疑問を心に抱いた。今まで普通にこっちの世界の人々としやべっていたのでそんなこと思いつきもしなかったのだ。

「(不思議だ?)」

一生懸命考えるハルカであつたがそんな理由などわかるはずもなく、考えるだけ無駄だと思う。それでもハルカは考えて、考えて、考えているうちにそのことで頭がいっぱいになってしまい彼女を呼ぶ声など耳に届かなかつた。

「ハルカ聞いている?」

ルーファスの呼びかけにハルカ無反応。

「ねえ、ハルカ!」

ちよつと強めに言ったがそれでも無反応。そんなハルカを気付かせたのはこの人だつた。

「……こんばんわ」

と、ちよつと低く呟く感じの声と同時にカーシャが二人の前に忽然と姿を現した。

「わあ!」

突然のことにハルカが声を上げる。

「すまない、驚かしてしまつて（わざとやったのだけど……ふふ）」

カーシャは歩くとき足音を立てない、しかも気配もない、それにプラスして考え事をしていて周りに気付かなかつたからハルカにはカーシャが自分の前に突然現れたように思えたのだ。そりゃービックリだ。

「いきなり現れないくださいよお（あゝビックリした）」

「すまない、急用だつたのでな」

カーシャの急用とはいつたい何なんだろうつか？ でも急用の割には急いだよすもなく、声もいつもどおり淡々とした口調で元気でも元気に聴こえない低く呟く感じの声だつた。

「急用について話する前に……ルーファスお茶！」

ちなみに今の言葉は前半がゆっくりで後半の「ルーファスお茶！」は早口で強めの言い方になっていた。

「はぁ!？（なんだよ、いきなりお茶つて）」

「急いで来たので喉が渴いた」

カーシャの命令でルーファスはしぶしぶ渋茶を台所に入れて向かつて行つた。しかし、なぜルーファスはこうもカーシャの言うことをすぐに聞いてしまうのだろうか……？

でカーシャはここに何しに来たの？ つてことをやっぱりハルカも気になつたらしくつて、

「それで急用つてなんですか？（イマイチこの人のことわからないなあ）」

「ライラの写本がな」

その言葉に強く反応したルーファスはものすごい勢いで走って戻って来てこう言った。

「ライラの写本だつて!？」

ハルカには何のことだかわからなかったけど、何となく気を引かれた。

「あの、ライラの写本って何ですか？」

「ルーファスお茶!」

「今持つてくるよ（人使いが荒い）」

ハルカの質問は完全に無視されていた。ハルカ的に大シヨック! それでもハルカはめげない。

「あの、ライラの……」

ハルカの言葉は見事に遮られた。

「濃い目に入れてくれ!」

と言う声に反応して台所の奥からルーファスの声が、

「わかった」

ハルカ的大々シヨック!! しかし、ハルカはまだめげない。

「あの、ラ……」

「ルーファス! 茶菓子にようかんを持って来たのでお皿とナイフとフォークを頼む!」

「ああわかった!」

ハルカは思った、いじめだ!

「あのカーシャさん、わざとやってませんか？」

「ん、何がだ……?（バレたか）」

カーシャは確信犯だった。しかも、シラを切り通した。

「どうした、ハルカ？ 何かあったのか？」

「何かあったじゃなくて……ライラの」

「そうそう、ルーファス植木屋のゲンさんが倒れたって話は聞いたか？」

「ええ、あのゲンさんが！」

「……………（確信犯だ！）」

とハルカは確信した。

お茶を入れ終えたルーファスが戻って来た。手に持ったおぼんの上にはお茶が三つにお皿が三枚ナイフが一つにフォークが三つしっかりと乗っていた。

「ゲンさんが倒れたって本当？」

「嘘だ（何となく思いつき）」

「カーシャさん私のことからかってるんでしょ（性格の掴めない人……）」

「からかっているのではない、おちよくっているのだ」

「……………（どっちも同じでしょ）」

二人の会話を不思議そうに見つめていたルーファスが一言、

「何の話してるの二人とも？」

「さてとではお茶を飲みながらようかんでも食べるか」

「わー、こつちの世界にもようかんってあるんですね」

「おお、そうかハルカのいた世界にもようかんがあったのか（私の作戦にハルカも乗ってきた……ふふ）」

「ようかんってたまにしか食べないけど結構好きだなあ（なんとなく、ルーファスに八つ当たり）」

「あのさ、だから何の話を……（これってシカト）」

今度はルーファスが遊ばれる番だった、しかも二人に。

いきなりカーシャが話を戻した。……この人気まぐれだ。

「そうだ、ライラの写本の話だったな」

「……………（やつぱり、聞いてたんじゃん）」

この後、ライラについての話を紙芝居や人形劇を交えたり交えなかったりしながら、二時間ほどでカーシャさんが説明してくれた。カーシャさん曰く、ライラとは今この世界で使われている魔法の起源でその効果は絶大であるが使い勝手が悪いため、今ではライラを簡略化した、レイラ（攻撃系）とアイラ（回復・補助系）が主流になっていて、ライラはもうほとんど廃れてしまい今の世に残っているライラはライラの聖典と呼ばれるライラの全てを記したといわれている本の一部を写したライラの写本と呼ばれる本に書いてあるライラのみとのことらしい。この説明を二時間もかけたのか!?

「質問はあるか？」

「あのそのライラの写本がどうしたんですか？（なんで紙芝居と人形劇？ しかも後半のラヴロマンスはいらなかったような……………）」

「そうだよ、なんでカーシャが来たの？」

「やつと話の本題に入りました。」

「ライラの写本が新たに見つかったらしい」

この言葉に一番ビツクリしたのはルーファスだったというより、この意味がわかるのが彼しかいなかったというよりハルカ

にはこの意味がよくわからなかった。

「ええっ！ それって本当？」

「……（なんでそんなに驚いてるんだろ）」

カーシャの顔は真剣だった。でも、何を考えているのかはイマイチ不明。

「先日、この国の闇市でライラの写本が出回ったらしい。しかもだその写本というのが今まで発見されてない魔法について書かれたものらしい」

ここまで話されてもハルカ的にはよくわからなかったが、カーシャの次の言葉には凄い反応を見せた。

「その魔法というのが召喚関係の」

「召喚ですか！！」

「（まだ話が途中……まあいいか）……ルーファスお茶！」

「また飲むの？（なんで私が）」

「カーシャさんにお茶！！」

「なんでハルカまで。いいよ持って来ますよ（パシリか私）」

ルーファスの立場はこのメンバーの中では最も下だった。そんなわけでルーファスはしぶしぶ台所へと向かった。もちろん洪茶を入れに……。

台所に着いたルーファスはお茶を三つ入れて戻ってきた。

「遅いぞ、へっぽこ」

「なんだよ、いつもいつも人のことへっぽこって」

そのとき、ルーファスの身に不幸な出来事が、

「わ……っ！」

と言う声とともにルーファスは見事なダイビングをした。何も無いところで彼はつまずいたのだ。強調してもう一度言う『何も無い所で』。その反動で手に持っていたおぼんが空を舞う、ついでにお茶の入ったグラスも飛んだ、中身のお茶も飛んだ、そして、お茶は引力に引かれ、バシャン！

「……（あつい）」

カーシヤにかかった。しかし、カーシヤの表情は少しも変わらなかった。むしろ、慌てたのはハルカだった。

「カーシヤさん、だいじょうぶですか！」

ハルカは慌てて近くにあつたティッシュ箱を手を取って、ティッシュをガーって何枚も取ると、カーシヤの顔を拭きまくった。

「……（へっほこにあわてものコンビ……ふふ）」

「はあ……はあ……（これだけ拭けば）」

「……（こんなこと前にもあつたような）」

カーシヤの顔からはお茶は一滴たりとも残さず消滅した。…しかし、結果は”あのととき”と同じだった。カーシヤの顔はティッシュのカスですごいことになっていた。それに気付いたハルカは、

「ご、ごめんなさい（前にも同じことしたような気が……）」

「これ、使つて拭いてあげて」

ルーファスはハルカに布を手渡すと、ハルカは、

「ごめんなさい（カーシヤさんの美しい顔が……）」

と言いながらカーシャの顔を拭いた。のだがカーシャは思った。

「……（この布って）ぞうきん」

「はっ!?（ぞうきん）」

ルーファスの顔が凍りついた。

「……（しまった、ぞうきんを手渡してしまった）」

カーシャは突然立ち上がるとスタスタとルーファスに近づき、無言でルーファスの腹にボディーブローをくらわした。

「うっ……（痛い）」

カーシャのボディーブローはアマのものではなくプロのパンチだった。

ルーファスは腹を押さえながらゆっくりと床に倒れこむと、それつきり動かなくなった。ちゅん、御愁傷様でございます。

「そうだ……写本の話の途中だったな（これでも三〇パーセントの力だ……ふふ）」

「……そうでしたね、あはは（カーシャさん怖い）」

「今からその写本を見に行こうと思うのだが二人も来るか？」

「行きます、行かせてもらいます」

即決のハルカに対してルーファスの顔は浮かない表情をしていた。というよりまだ腹が……。だがルーファスはがんばって口を開いた。

「行くってどこにだよ？（少しやな予感がする）」

「国立博物館だ」

この言葉にルーファスはあからさまに嫌な表情をした。それ

を見たハルカは少し不思議そうな顔をする。

「……………（どうしたんだろルーファス？）」

「どうしたルーファス、おまえは行かないのか？」

「見に行くだけだよな？（まさかね？）」

「当たり前だ、私が盗みにでも行くと思っているのか？（……………）」

……………ちっ）」

「やぱり盗みに行くのか（だと思った）」

「本当ですかカーシャさん！！」

「うん！（意外に勘が鋭いなへっぼこ）」

カーシャはお花を自分の周りに飛ばしながら可愛らしく、少女の気持ちで答えたが何の効果もみられなかった。……………ヤリ損。

「ハルカは私と行ってくれるだろ？」

「はい！ もちろんです（帰れる方法が見つかるかもしれないし）」

「私は行かない（泥棒なんてできるわけないだろ）」

そう言っただけで何処かに行こうとしたルーファスの襟首を掴んで

カーシャが引き止めた。

「ハルカの保護者として付いて来い」

その声はいつも以上に低くドスの利いた声だった。脅しだ！

だがルーファスはそんな脅しには屈しなかつた。

「……………ヤダ！（目がイッてる……………怖い）」

だが目は決して合わそうとはしない……………この時点でルーファスはカーシャに負けていた。

「なら、こないだの置物の弁償代二万ラウル（返せねえって言

うんだつたら謝金の片にこいつを貰っていくぜ……きゃあ、おとつあん！……ふふ……ウケる」

やっぱり、カーシャの性格はよくわからない。……話がずれた。

「あれはハルカが壊したんだろ」

「じゃあ、あのときのことをバラすぞ（ルーファスって、ルーファスって……きゃあ……ふふ）」

これは完全な脅迫だった。

「いいんだな、国民全員に言うぞ！（ルーファスって……サイテー……ふふ）」

ルーファスの顔の血行がみるみるうちに悪くなり顔面蒼白に。

「……わかった行くよ（これは脅迫だ！）」

ハルカは思った。

「……（あのときのことって何だろ？）」

そのとおり、あのときのこととはいったい何のことなのだろうか……？ 実のところルーファスにも心当たりが多すぎて、何の事を言われているのかはわかっていなかった。ルーファスへつばこ列伝の一つには違いないだろうけど。

残っていたお茶を飲み干したカーシャは、身体をきびし返して、

「では、今すぐ行くぞ」

「まだ、昼だよ」

ルーファスの指摘は正しい。ちなみにカーシャはここに来たとき『こんばんわ』と言ったが今の時間は午後一時半。

「盗みっていったら夜じゃないんですか？」

「夜の方が警戒が厳重だ。そのぶん昼間は人は多いが警備は手薄になっている！（あくまで思いつきで確証はないが）」

カーシヤはかなり自身満々だが、この発言は彼女お得意の思いつき。

自信満々のカーシヤを見てルーファスの不安は余計に増していく。

「あのさあ、昼間に普通に行くんじゃない顔がバレバレじゃないの？」

「私に考えがある（……ふふ）」

こうしてカーシヤちゃんの『おしゃれ泥棒大作戦』が始まったのだった。ちなみにこのネーミングはカーシヤちゃんの思いつきで特に意味はありませんのでご了承下さい。

カーシヤの思いつきで始まってしまった『おしゃれ泥棒大作戦』だけど、うまくいくのでしょうか……？

そんなわけで次回につづいたりする……。

第四話 おしゃれ泥棒大作戦

ここは国立博物館の近くにある裏路地。ここにある人影は三つ、ハルカ、カーシャ、そしてネコ？ ……ではなくこれはルーファスがネコのきぐるみを着ているのだが、どうしてこんなことになったかというところ……。

裏路地にルーファスの声が響いた。

「なんで私がこんなものを着なきゃいけないの？」

「作戦の一環だ（ネコ……ふふ）」

とまあカーシャちゃんの説明だとこの一言なので読者もルーファス、そして頭の上に『……？』のマークが飛んでしまっているハルカもわからないと思うので、ここは代表としてハルカに作戦の全容についてカーシャちゃんに質問してもらいましょう。

「あ、あの質問いいですか？（なぜネコ！！）」

「なんだ、言ってみる（……ふふ……にゃんこ）」

「どういう作戦なんですか？（ネコがポイントなの!）」

腕を組んだカーシャの瞳が光った。

「説明しよう。まず、私とハルカはここで待機、ルーファスはきぐるみを来て写本を取って逃走！ 完璧な作戦だ」

直ぐにルーファが突っ掛かる。

「……だから、何できぐるみなの！（しかもネコって）」

「おまえが言ったのだろ、顔がバレバレだと（……ネコは私の

趣味だが……うさぎでも良かったのだが……ふふ」

「……………（それでか……）」

二人は心の中でそう叫んだが口には出さなかった。しかも作戦ってほどのものでもないだろ。

カーシャは右手で博物館の方角をピシッと指差し言う。

「それではルーファス行ってこい（さあはばたくのだルーファス）」

「……………」

ルーファスはヤダって言おうとしたが、……あのことごとが頭を過ぎったのでしぶしぶ博物館に向かって歩き出した。つてあのとことって何だ！

博物館まではちょっと歩かなくてはいけない……ネコのきぐるみで。

「（みんな私のことを変な目で見ている）」

ネコ（ルーファス）のことを見ない者はいなかった。……すれ違う人、路地の向こうにいる人、ここにいてる全ての人が不思議そうな顔をして見ている。しかも変な眼差しで……。

そんな中のひとりの男の子がルーファスの背後にこっそりと近づいて来た。こっそりなのでルーファスは気付く余地も無い。男の子は『ニカツ』と子悪魔の微笑みを浮かべると、ルーファスの背中目掛けてドロップキックをかましてきやがった。蹴りをいきなりくらったルーファスはアイザック・ニュートン（リングが地面に落ちるのを見て引力を発見した人）の運動の三法則に従って、地面にバタン！とコケた、じつに呆気ない、何

の変哲もないコケ方だった。

「……………（痛い）」

「あははは、まぬけ!!!」

ガキはそう言って走り去って行った。こついうガキってテーマパークに行くという。きぐるみを見るとキックとかパンチとかしてくるヤツ。

ルーファスは何事もなかったように立ち上がり、何事もないように歩き出しこつ思った。

「（こんなコケた姿知り合いに見られたら、恥ずかしいよね。よかったきぐるみ着てて）」

ルーファスよく考える！ きぐるみを着てなかったら蹴られなかっただろ？

そんなこんなでルーファスは博物館の前まで来た。

「……………（ついに来てしまった）」

博物館の入り口にはいかにも強そうですよ〜って感じのガードマンが二人立っている。しかも、その二人はものすごく不信の眼差しでネコ（ルーファス）を見ている。

「（ヤバイ、怖い目で見てるよ）」

ルーファスは思いついた、自分にクイックの魔法をかけて走れろ・ろ・ろ！ 作戦を。ちなみにクイックとは三分間の間だけ身体能力を上げて通常の二倍近くのスピードで動くことのできる魔法で、かけられた本人のマナを消費する。

ルーファスは自らにクイックをかけると、ヨ〜イ、ドン！

のポーズを決めた。すると、どっかの誰かが『ヨ〜イ、ド

ン！』と言ってくれたので、それを合図にルーファスは全速力で走り出した。

ルーファスはガードマンの間を瞬く間に通り抜け、博物館の中に入った。しかし、中に入ったからといって安心して足を止めてはいけない。

なぜなら、詳しく説明すると、ルーファスの五〇メートル走（追っかけられたとき）のタイムは六・八五秒、そして、先ほどのガードマン（入り口）とルーファスとの距離は三メートル、このことからこのような数式が立てられる、 $50 \div 6 \cdot 85 \times 2$ （距離÷タイム×クイック使用）＝一四・五九八・・・、すなわち、一秒間に約一五メートル走れることになるので、ガードマンを抜けることは余裕だが、時速に換算すると約五三キロメートルといったところなので目で見ることは余裕でできる、ようするに中に侵入したことがバレバレなのだ。

「（はあ、はあ……中に入れれば後は客のフリをして）」

ルーファスの考えはあまい。理由は上で説明してとおりで、不審者が博物館の中に入ったことはもう気付かれている。しかも、致命的な誤算がある。ネコのきぐるみを着ている時点で普通の客のフリはできない。あたりまえですけど。

案の定、ネコ（ルーファス）の周りにガードマンたちが押し寄せて来た。

「（……何でガードマンが!?）」

それはルーファスがあからさまに不審者だからだ。

「（やばい……逃げろぞー）」

ルーファスはガードマンたちの静止の手を掻い潜った。二人のガードマンはルーファスを捕まえようと挟み撃ち作戦を実行したが、ルーファスがスルっと二人の間を抜けたもんだから互いに頭をぶつけて転倒、全治三時間の怪我を負った。

ルーファスはそのなことお構いなしに次々とガードマンたちの制止を振り切って写本を目指す。その姿はさながらプロのフットボール選手のようにだった。

がしかし、ルーファスの快進撃はここまでだった。クイックが切れたのだ。その拍子に、突然切れたクイックにルーファスの身体能力がついていけず、しかもそれが全力で走っている最中だったからさあ大変!? ルーファスは身体のバランスを崩しつつのめって、超高速回転連続でぐり返しを五回転決めた。そのでぐり返しの姿はプロの運動選手並だった。

ルーファスは実は運動神経がそこそ良い、だが彼が魔導学園に通っていたころの体育の成績は最悪だった。それはなぜか……？

ルーファスは華麗なでぐり返しを見事に決め、そのままの勢いで立ち上がろうとした。ここまでは完璧だった、しかもネコのきぐるみを着てここまでやるとはじつにすばらしい……だが、不幸は突然訪れる。

白い壁がルーファスの前に突然現れた。そして、ごん！というリアルな音とともにルーファスは頭を強打し、後ろにバタンと倒れた拍子にまた、ごん！というリアルな音が……これは痛そうだ。

これがルーファスの体育の成績を下げている理由だった。途中までは完璧なのだが、なぜか途中で不幸が訪れる。

「……（痛い、でもよかつたきぐるみ着てて、着てなかったら気絶してたよ）」

と心の中で思ったルーファスはむくりと立ち上がった。そして、後ろを見るとガードマンがすげー形相で追いかけてくるのが見えた。

「（ヤバイ、早く写本を手に入れなくちゃ……?）」

ルーファスはここである重大な作戦ミスに気が付いてしまった。……写本って何処だ！

この博物館はこの国で一番広い、名前の上に国立が付くだけのことがあるだけに広い（なんとなく国立って格式がありそうでしょ……なんとなくだけど）、その広さは……、……? ……とにかく広いったら広いの!!（ルーファス曰く、この国のコロセウム×二（二階建てだから）くらいの広さかなあ、らしい）

写本はどこだと考えていたら、何時の間にかルーファスはガードマンに取り囲まれていた。

「（もう一度、クイックで）」

と思ったが彼にはもうそんな力は残っていなかった。クイックには欠点がある、クイックは一時的に身体能力を二倍に高めてくれるが、疲れも二倍だったりする。ルーファスの息はもうすでに上がっていて二度目のクイックはつらい。しかもきぐるみを着ていると呼吸がしにくい、もうひとつおまけにきぐるみ

は通気性が悪く中は熱い。

「もうダメだ……おとなしく捕まるな」

ネコがゆっくりと両手を上げ終わると、一斉にガードマンたちが押し寄せて来て腕を掴まれ、そのまま引きずられるように事務室に連行された。呆気ない、呆気ない幕切れだった。

小さな小さな心もとない声が事務室に微かに響いた。

「ごめんなさい、もうしません」

ルーファスはガードマンに深々と頭を下げた。するとガードマンは意外にあっさり許してくれた。

「まあ、博物館を走り回っていただけだから、今回は許しますけど、次回からは気をつけるように」

「本当に申し訳ありませんでした」

確かにルーファスはネコのきぐるみを着て博物館内を走り回って、客やガードマンに迷惑をかけただけで、そんなことはこの博物館では同じようなことを”子供”がよくするので厳重注意だけで済ませてもらえた。

「”子供”みたいな真似はもうしないで下さいよ」

ガードマンは子供のところを強調した。

「はい、以後気をつけます（良かったこれだけで済んで）」

「じゃあもう行っていいから」

ルーファスはガードマンに一礼をして部屋を出て行こうとドアノブに手をかけたら、ドアが勝手に開いた。自動ドアではない向こう側から誰かが開けたのだ。

「（あ、ドアが勝手に）」

ゴン！ という音がした。

「いった〜っ」

ルーファスは思わず頭を押さえながら、しゃがみ込んだ。

「た、大変です！！ ライラの写本が何者かによって盗まれました」

ルーファスのことは無視だった。

「何だつて、今行く！」

ルーファスのことはやっぱり無視だった。

ガードマンはルーファスのことなどお構いなしに何処かに行ってしまった。残されたルーファスは少し寂しい気持ちをした。

「ライラの写本が盗まれたのか……（疲れたから家に帰って寝よ）」

博物館内は大騒ぎになっていて、出口では荷物検査が行われていた。

「（大変なことになってるなあ）」

そんなことを思いつつルーファスは出口で荷物検査を受けていた。ルーファスは手ぶらだったのですぐに通してもらえた（ちなみにネコのきぐるみは没収された）。

博物館を出たルーファスはあることを思い出した。

「（そうだ、裏路地で待機して言ってたっけ）」

ルーファスは裏路地に向かった。がしかし、そこには二人の姿はなく、変わりにあったのは『うさぎの人形』と手紙。手紙

にはこう書かれてあった。『お前の家で待ってるぞ』と、筆跡と言葉使いからしてカーシヤに違いない。

「（ひどいよ先に帰るなんて）」

なんてことを考えていたらすぐに家に着いてしまった。で家のドアを開けると、

「おかえりなさい！」

とハルカの元気な声が、ルーファスは内心ちよつとムカツてきたが、たぶん帰ろうと言い出したのはカーシヤなので怒るのであればカーシヤだ。

ルーファスは家の中に入るとすぐさまカーシヤを探した。ですぐに見つかった（そんなデカイ家ではないので）。

「なんだ、無事だったのかへっぼこ」

カーシヤは読んでいた本をパタンと閉じると紅茶の入ったコップを片手に優雅に手を振ってきた。

「……………（死）」

この時、ルーファスは何度目かのカーシヤに対して殺意が沸いた。だがルーファスはそれを心に留めた。なぜって、カーシヤが怖いから。

「ルーファスもそこに座って紅茶でも飲め」

ルーファスはカーシヤに勧められるままにソファーに座ると、すぐにハルカがルーファスのために入れた紅茶を可愛らしい『うさちゃん（うさぎさん）』のティーカップに入れて銀色のトレイに乗せて持って現れた。

「はい、ルーファス紅茶」

微笑みながらハルカはルーファスにティーカップを渡した。

「……ありがとう」

ルーファスはティーカップを受け取る瞬間、ある事を思った。
「（あんなティーカップうちにあつたっけ？ ……しかも、うさぎって……うさぎ？）」

ティーカップを受け取るとルーファスは紅茶を一口飲み『はあ』と深くため息をついた。

カーシャも紅茶をひとくち口に含み、それを飲み込むと話を切り出した。

「ルーファス今日はご苦労だったな」

「ご苦労だったって何にも見てなかったでしょ」

ハルカが首を振った。

「ううん、見たたよ、ルーファスがガードマンに追いかけてたの（あれはなかなかの見ものだったなあ）」

ルーファスは驚いた表情を浮かべた。

「えっ（何でハルカが知ってるの？）」

とのルーファスの疑問についてカーシャちゃんがわかりやすく説明してくれました。

「これを見るルーファス」

カーシャは今まで読んでいた本の表紙をルーファスに見せた。
「（この表紙に書いてある古代文字は……）」

「おまえがガードマンに追いかけられている隙にこれを盗ってきた（悪いなルーファス、困にした）」

「それって、ライラの写本じゃないか!?（なんでここって）」

……ライラの写本を盗んだのってカーシャたちだったのか」

「その通りだ」

「ルーファスのおかげで簡単に盗めたよ（ちょっと悪い気もしたけど）」

ルーファスは啞然としてしまった。そして、微妙にキレた。

「もういい寝る！ はいはい、ソファー空けて」

ルーファスは二人を『しっし』と追い払い、ソファーにバタンと倒れ込んだと同時に静かな寝息が……。

「疲れたのだな（精神的に）」

カーシャは毛布を持ってきてルーファスの身体にそっとかけてあげた。カーシャもいとこあるじゃん。

こうしてルーファスだけの長い一日が終わった……ZZZZZ。

そんな感じで、いろんな謎を残しつつ、この物語はまだまだ続いたりする……。

第五話 なんてこった!?

カーシャちゃん考案の『おしやれ泥棒大作戦』の発行日から二日が経ちました。

あの作戦の後『ライラの写本』はカーシャちゃんが自宅で解読するからと言って持って行ってしまったのですが……どうなつたのでしょうか？ 連絡すらありません。

ハルカは椅子の深く腰を掛けながら、両手を天上に向けていっぱいに伸ばした。

「はあ〜いつになったら家に帰れるのかなあ」

その問いにルーファスはまるで他人事のように答えた。

「さあ、いつだろーねえ〜」

「つてあんたのせいだよ!」

ハルカは床に落ちていゝる魔導書をさつと拾い上げるとルーファス目掛けて投げつけた。ゴン! という音とともにルーファスの首がガクンと曲がり、そのまま床に身体が倒れ落ちた……。

「……（当たっちゃった）」

ルーファスは身動き一つしない。

「ル、ルーファス!!! だいしょぶ!？」

ハルカは凄まじい勢いでルーファスに近づき膝を突いて床に倒れる彼の身体を思いつきり揺さぶつた。

「ル、ルーファス!!!」

返事がない。ハルカはかなり焦って、ルーファスの上半身を

「起こして肩をガシッと掴むとルーファスだけが大地震に見舞われた。ルーファスの首がガクガクと揺れている……骨折れてないか？」

「ねえ、返事してよぉ〜!!」

ハルカは思った。

「（殺したかも……ショックー!!）」

ハルカ的大ショックのあまりハルカの身体からは力がすうーと抜けていき、支えを失ったルーファスの身体がパタンと床に転がった。ゴン！ 床に頭がぶつかった。

「（殺っちゃった……）」

灰色の世界が辺りを包み込む。

ハルカはまばたきをせずに首をゆっくりと直線移動だけで動かし、床に転がるルーファスを見下ろした。

「……るーふあす……生キテル？」

ハルカの呼びかけに対して、返事がない……ただの屍のようだ（byドクエ）。

「あああああつつつ〜〜!! 殺っちゃった!! どうしよう、どうする、何が、いつ（When）今日、どこ（Where）この家で、誰が（Who）私が、何を（What）ルーファスを殺した、なぜ（Why）不可抗力で、どのようにして（How）分厚い魔導書を投げて、なんてこったい!!!（Oh my God……）」

ハルカは完全にパニックっていた。メダ ニー！（byラクエ）
「（ごっつする私……!?!）」

ハルカは思いついた、ハルカ的に完璧な作戦を。

作戦はこうだ。まずハルカちゃんは物置に行きます。そこでスコップを見つけ出し庭に行きます。庭についたら大人がひとりくらいが入れる穴を掘ります。そして、掘った穴に先ほど殺害してしまったルーファスを入れて土をかぶせてあげます。それが終わったら、手を綺麗に洗って、ルーファスを殺害した魔導書を焼き捨てて証拠を隠滅しましょう。全部の過程を終わらしたら、何食わぬ顔をして紅茶でも飲んで一休みしましょう。

「か、完璧だわ」

ハルカはこぶしにぎゅっと力を入れて目を輝かせると、さっそく作戦を実行に移した。まずはスコップを探し出し、次にルーファスを庭まで運ぶ。

スコップを直ぐに手に入れ第一肯定をすんなりとこなしたハルカは次にルーファスの足を掴むと、力いっぱい引きずった。

「（重し）」

そして、そのまま庭まで引きずって行った。途中何度か手に伝わる振動とともにゴン！ という鈍い音が聴こえたが気にしない、だって相手は死んでるんだから、エヘッ。

「あははは、早く穴掘んなきゃねえ」

ハルカ完全にイッてしまっていた。しかし、作業は冷静かつ淡々としていた。……やっぱりしてなかった。

穴を掘るハルカの姿はまるで悪魔にでも取り付かれたようで、
「きゃはは、きゃはは」

と奇声を上げながら一心不乱に掘っていたし、穴を掘るスピードも異常なほど早かった。

穴を掘り始めて、三分ほどで大人ひとりがすっぽり入れる穴が掘れた。……落とし穴を掘ったことのある人ならわかるだろう、三分というスピードが異常な早さだっということが。

「はあ……はあ……（これだけ掘れば）」

ハルカの肩は大きく上下に揺れていた。あつたりまえだ、穴を掘るといっのはかなり重労働なのだから。しかも三分って、あんた凄いや賞を授与してあげたいくらいだ（そんなのないけど）。

一息ついたハルカはルーファスの足を掴んで、ぐるん、ぐるんと遠心力を使ってジャイアントスウィング風に掘り終えた穴にルーファスを投げ込んだ。

「（ひと段落完了）」

ひと過程を終わらしたハルカは先ほどの穴掘りの疲れがどつと押し寄せ、倒れ込むようにバタンと地面にしりもちを付いた。

「はゝ、疲れた……」

空を見上げると青空に太陽が輝いている……日差しが目に沁みる。

「（空って何であんなに青いんだろう?）」

空を眺めるうちにだんだんと落ち着きを取り戻してきたハルカはことの重大さが今になってわかってきた。

「（……ヤバイ。人を殺して埋めちゃおうなんて、私どうかした。もし、こんなところ人に見られたら）」

「こんばんわ」

突然ハルカの耳元で声がした。

ハルカは頭を動かさずに目だけを動かし横を見ると、人の顔が自分の肩の所に後るからニヨキって出てる……。

「こんばんわハルカ、今日は日差しが強いな……」

「カ、カーシャさん!？」

ハルカは思わず声を張り上げた。

「どうしたのだ、そんなに慌てて」

「な、なんでカーシャさんが!？」

「どうしてって魔導書のこと以来ただけど」

「そ、そうですか、じゃあ家の中で話しましょう（ど、どうしよう）」

「そうだな、そうしよう。……ところでルーファスはどこにいるんだ？」

「えっ、ルーファスですか、ルーファスは、えーと、その、……どこ行ったんでしょね、あはは（言い訳が思いつかなかつた）」

「そうか、ではあの穴は何だ」

と言ってカーシャは前方の穴を指差した。

「あ、あの穴は……大モグラがさっき当然現れて……（大モグラって何？ 言い訳苦しすぎ）」

少しの間沈黙があつたがカーシャがその沈黙を破った。

「そうか大モグラが……（大モグラが……ふふ）」

「そうなんですよ大モグラが」

「では、その大モグラがルーファスを殺害して、穴を掘ってジヤイアントスウィングで穴に投げ込んだわけだな」

「うっ……（もしかして、見られてたの）」

「どうした、顔が青いぞ（……ふふ）」

ハルカは完全に観念して自白した。

「ご、ごめんなさい、私がやりました（もう、サイテー）」

「……見てた」

カーシャはルーファスが死んだというのに、しかも殺害したのがハルカだというのに全く驚きもしなかった。冷静なのか冷血なのかどちらなのだろうか？

「いつから見てたんですか？」

「魔導書を投げたところからだ（……シュッ！！……ゴ

ン！！……ボタン！！）」

カーシャは一部始終を見ていたらしい。

「ど、どうしましょうカーシャさん」

ハルカはカーシャに抱きつき泣き崩れ、助けを求めた。涙がまさに滝のように流れている。

「……海に沈めてしまうのがいいのではないか？（コンクリートで固めて……）」

ハルカは涙目でカーシャを見上げている。

「（カーシャさん、そうじゃなくて）……うわーん、もう私の人生終わりだわ」

「そうだ、そんなことより魔導書のことだが」

「そうじゃないですよ、今はそんなことより（ルーファスが死

「んだんですよ……私が殺したんですけど」

「そうじゃあ」

「そう言ってカーシャは庭を見回し、庭の片隅に立てかけてあった大きめのベニヤ板をよいしょと持ち上げて穴の上にパタンとかぶせた。

「これひとまず安心だ（たぶんだが）」

「安心してベニヤ板かぶせただけじゃないですか！」

「細かいことは気にするな」

「決して細かいことではないぞカーシャ。」

「だ、だって、カーシャさん」

「カーシャは急に真剣な顔つきになって、

「さて、外は日差しが強い、中でゆっくり話をしよう」

「と言うとカーシャはさっさと家の中に入って行ってしまった。

「カ、カーシャさん、待ってくださいよ〜」

「ハルカも仕方なく取り合えずカーシャに続いて家の中に入ってしまった。

「家の中に入ったカーシャは至って普段どおりで、勝手に自分で紅茶まで入れて飲んでいる。

「済んだことは仕様がな、ルーファスのことは諦める（……」

「一分間の黙祷を捧げます……Zzzzz……ふふ）」

「カーシャさん、どうしてそんなこと言っんですか！」

「じゃあ生き返らせるか（ザオクー）」

「カーシャはさらっと言い放った。

「えっ……？（生き返らせる？）」

ハルカの中だけで時間が少し止まった。その間ハルカは全頭脳を集結させ、『生き返らせる』という言葉を検索したが出た答えはやはり死者をこの世に呼び戻すという意味だった。

「……（まさか……死んだ人を……生き返らせるなんて）」

「信じていないのか？」

ハルカは首を横にぶんぶん振ってこう言った。

「そ、そんな……でも（でもぉ）」

カーシャは目を細めハルカを見つめ、ふんと鼻で少し笑った。その顔は自信に満ち溢れている。

「この前博物館で借りた、ライラの写本の中に『死者の召喚』についての記述があった」

「（借りたんじゃなくて、盗んだんでしょ）死者の召喚ですか？」

「そうだ、おそらく死者を蘇らせる召喚魔法の類だと思うが（たぶんだが）」

また、たぶんですか？ カーシャさん！

不安はいろいろとあったがハルカの両拳には力が入っている。

「じゃあ、早くやりましょうカーシャさん」

ハルカの目は希望と言う名の輝きに満ち溢れていた。

てことでカーシャとハルカはさっそく『死者の召喚』をルーファス宅の地下室で行うことにしました。

この地下室はルーファスが魔法の実験などをするために特別

に作った地下室で、中は異常なまでに広く壁は頑丈に出来ていて決して外に魔法の影響が漏れないようになっていた。

召喚の方法は意外に簡単で魔方陣を描いて、呪文を唱えるだけだそうです……カーシャさん曰くですが。

さつきから、ず〜と不安でたまらないハルカはカーシャに聞いてみた。

「本当にこれだけでいいんですか？」

ハルカはかなり不安そうな顔をしてカーシャを見つめた。

カーシャは何故かハルカと目線を合わせようとせず、淡々と魔導書（ライラの写本）を広げながら、魔方陣のミスがないかチェックをしていた。

「あのカーシャさん」

ハルカはカーシャの顔を覗き込むように見ようとしたが、ハルカと目線が会いそうになると、不自然なまでに身体をくるって回して方向転換をしたり、突然上を見上げて考え事をするフリをした。

「魔方陣は完璧だ、後は呪文を唱えるだけが、心がまえはいいか？」

やっとこの時カーシャはハルカの方を見て目線を合わせてくれた。

「はい、いつでも（でも何かちょっと不安になってきた……）」

「それでは、呪文の詠唱を始める」

「……（くぐぐ）」

ハルカは緊張のあまり唾をぐくと飲み込んだ。

カーシヤはゆっくりと目を閉じ、魔導書を両手でパタンと閉めて、魔導書の表紙の上に右手をゆっくりと乗せた。どうやらこの魔法を使うためにはこの魔導書の表紙に手を乗せて呪文の詠唱をしなくてはいけないらしい。

「ライラ、ライララ、リリララ……」

カーシヤが歌を詠うように呪文の一節を唱え始めると同時に彼女の立つ地面の下からやわらかい風のようなものが巻き起り、衣服を揺らし髪のを上に舞い上げた。

「……（すごい、これが本物の魔法なんだ）」

ハルカはちゃんとした魔法、これが魔法なんだと思えるものを今まで見たことがなかった。『美人魔導士のいる店（カーシヤの魔導シヨップ）』での事件の際はハルカは気を失っていたし、『おしゃれ泥棒大作戦』のときはルーファスが凄いスピードで走ってるのを見ただけだったし。

カーシヤちゃんの呪文詠唱はまだ続いている。

「ルラ、ルララ……死者の首を狩りし、太古の神よ、我は貴方の名を呼ぶ…… B.B. Azrael」

カーシヤの身体が突然黄金の輝きに包まれた。これは強力なマナがカーシヤの身体に注ぎ込まれている証拠だ。

ハルカは目の前で起きていることに圧倒された。

「（カーシヤさんってすごい人だったんだ）」

ハルカはそう思った。

カーシヤの呪文詠唱にチカラがこもる。

「慈悲を知り、悲しみを知る神よ、私の願いをどうか聞き入れて下さい。闇の中で眠る……」

とその時地下室を駆け下りてくる大勢の足音が！

「……………（何！）」

とハルカが思ったときにはすでに彼女の目の前には大勢の兵士たちが現れ二人を取り囲んでいた。ハルカには何が起こったのか全くわからなかった。

兵士の中から他の兵士とは違うりっぱな鎧を着た威厳のありそうな男が前に出てきてこう言った。

「おまえたちだな、南居住区の大爆発事件を起こしたのは！」

「……………大爆発？」

ハルカには何のことが最初はわからなかったがすぐにあることが頭を過ぎった。

「（私が気を失っていたあのときのこと？）」

そう、大爆発事件とはハルカが巻き起こした、カーシャの魔導シヨップから半径一キロメートルを爆風によって吹き飛ばしてしまったという、あの大事件のことだった。

兵士の手がハルカに伸びる。

「さあ、来てもらおうぞ」

ハルカとカーシャは兵士に腕を掴まれ連行されそうになるがハルカは必死に抵抗しようとする。

「放してください！」

ハルカは兵士の腕を振り払おうとしたが鍛え抜かれた兵士の力に敵う筈もなく、取り押さえられ自由を奪われてしまった。

「カーシャさん！！」

ハルカはカーシャに助けを求めようと彼女の名前を叫び彼女を見ると、カーシャは兵士に腕を掴まれながらも呪文の詠唱を続けていた。

「厚い氷の壁に閉じ込められた魂を……」

「呪文の詠唱を止めないか！！」

そう言っただけの兵士が魔導書に置かれたカーシャの手を放そうとしたが、カーシャは腕に力を込め決して放そうとせず、呪文の詠唱を続けた。

「愛する者の名を呼ぶ……」

「やめろと言っているの聴こえんのか！」

ついに兵士は業を煮やし、カーシャの腹を殴った。

「うっ……（しまった）」

カーシャは腹を押さえ地面に膝を突いた。

「二人を連れて行け！」

兵士はカーシャを取り押さえようとして彼女に近づこうとしたとき、カーシャがこう呟いた。

「お前たち……自分たちがした、ことの重大さがわかっているのか？」

その声は低く、まるで氷の響きを持った呟きでこの場にいた全てのモノを一瞬にして凍りつかせた。

カーシャは腹を押さえながらゆっくりと立ち上がり言葉を続けた。

「魔導書にはこう記してあった、途中で呪文の詠唱を止めては

ならない、もしそのようなことがあれば、大地に大いなる災厄をもたらしたり。」

唾を飲み込む音が地下室に響いた。

ようやく、氷の呪縛から解放された兵士たちの隊長らしき男が力いっぱい腹の底から声を出した。

「そ、そのような戯言を！！」

カーシャはその男を鋭い目で睨みつけた。

「たわけが……この強いマナの波動を感じないか？」

カーシャがそう言った刹那、魔方陣は強い光を放ち爆風を巻き起こしたと同時に白い影が、黄金に輝く白い影がゆらめきながら魔方陣の上に浮かび上がった。

この場にいた者達が一斉にどよめき始めた。

白い影は強い輝きを放つと同時にもの凄いスピードで部屋中を不規則に飛び回り、途中影に触れた兵士達を次々と八つ裂きにしていった。そして、光は急に止まったかと思うと、ハルカ目掛けて飛んできた。

「避けるハルカ！！」

「えっ！！」

ハルカは急に襲ってきた影から逃げることもできず、影の直撃をくらったと同時に不可思議な現象が起きた。光り輝く白い影がハルカの体内に吸収されていくではないか。この場にいた者は今、自分の目の前で何が起こっているのか全く理解できなかった。

ハルカは自分の身体に吸い込まれていく何かを目の当たりに

しながら何もすることができなかった。

「（光が……熱い光が私の中に……意識が薄れて……）」

次の瞬間、ハルカの身体がビクンと鼓動を打つと同時に爆風がハルカを中心として円状に巻き起こった。

カーシャは足に力を込め腕で顔を覆った。そして、爆風が治まったの確認すると腕をゆっくりと下げハルカを見た。

ハルカの姿は前となんら変わらない。しかし、身体から発せられているマナが違う。ハルカの持つマナとは違う波動が感じられる。

ひとりの勇敢な兵士がハルカに斬りかかった。だが、その兵士はハルカに睨みつけられただけで後ろに吹き飛ばされ壁に強く叩きつけられた。

それを見ていた他の兵士の大半がこの場から急いで逃げ出し、残った数人の兵士は恐怖のあまり身動き一つできず、またある者は怪我で負傷して逃げる事ができず、またある者数人はハルカに勇敢にも立ち向かったがあえなく全員壁に叩きつけられ意識を失った。

カーシャはその一部始終を見ていたが何もすることができなかった。彼女はこの場に立っているだけで精一杯だったのだ。

「（ヤバイ……このままじゃ私もやられる）」

カーシャはハルカから少しも目を離さなかった。彼女の頬に冷たい汗が流れ地面に滴り落ちる。

ハルカがゆっくりとカーシャに近づいて来た。その足並みは一步一步がとても重く威厳のある歩き方だった。

「（……………）」

カーシャは汗のかいたこぶしを強くぎゅっと握り締めた。

ハルカはなおもカーシャに近づいてくる。そして、カーシャの二メートルほど前で止まり口を開いた。

「お前が私をこの世に蘇らしてくれたのか？」

ハルカの声はハルカの声であって、いつものハルカの声ではなかった。とても冷たく重い声だった。

カーシャは唾をぐくと飲み込むと、こう答えた。

「……………そうだ」

「そうか、それは礼を言う」

ハルカは邪悪な笑みを浮かべた。あれはハルカの顔であったがハルカの表情ではなかった。まさに悪魔というにふさわしいものであった。

「……………お前は何者だ？」

カーシャはこう言いながらこぶしに一層力を入れて握った。

カーシャのこぶしの間からは鮮血が滲み出していた、彼女はこぶしを強く握ることにより、精神を保っているのだ。

「私は名も無き魔の王だ」

「（あいつの変わりに魔王を蘇らせてしまうとは、とんだ誤算だ……………笑えない……………ふふ）」

「私を蘇らせただけのことはある、お前からは強いマナの波動を感じる。だがこの娘のマナに比べれば取るに足らん」

「そうか、それでハルカの身体を器に使ったのだな」

「そうだ、魂だけでは自由に身動きすることすら困難だから

な」

そのために兵士たちはカラダの制御がうまくできない魔王によつて八つ裂きにされてしまったのだ。

「女、お前は私をこの世に蘇らせてくれた褒美に殺さずにいるやろう」

「それはありがたいが……私はおまえをもとの暗黒の世界に戻さねばならない！」

「せっかく私を与えてやった命だというのにそんなに死を急ぐことはないだろう」

カーシャは手の平に炎の玉を出し魔王に投げつけた。

「許せハルカ！」

炎の玉は見事ハルカの顔面に当たった。……だが、消炎の中から現れたハルカの顔には火傷のあと一つなかった。

「（……まさか）」

「ハルカか……遙かな時の中から蘇りし私に相應しい名前かもしれんな。その名前使わしてもらおう」

「（魔王ハルカか……今回はシャレにもならんな、さっきはハルカの身体だと思つて手加減してしまつたが今度は）」

カーシャは両手に意識を集中し、鋭い氷の刃を作り出しハルカ向かつて撃ち放った。がしかし、魔王ハルカが手を氷に向けかざすと氷は見る見るうちに溶け始め水蒸気と化してしまつた。

「（やはりこのままではマナが足りんか）」

「女、次は容赦しないぞ」

魔王ハルカはそう言うと、腕を大きく横に振り真空波を放ちカーシャを壁に叩きつけた。

壁に叩きつけられた、カーシャの口から鮮血が吐き出される。

「くはっ（ここまでか……ふふ）」

カーシャの全身からは力が一気に抜けていき足から崩れるようにして地面に倒れていった。

魔王ハルカはそんなカーシャには目もくれず、マナを集中させ辺りのモノをなぎ払い天高く天井を突き破って飛び去って行ってしまった。その衝撃は凄まじく魔王が飛び立つ際には地下室諸共ルーファス宅を全壊させてしまうほどのものだった……。

ルーファスが死に魔王が復活しカーシャはその魔王によって倒されてしまった。物語はここに来て急展開を迎える。この世界は、魔王に身体を乗っ取られてしまったハルカの運命は……

……？

第六話 魔王復活

魔法大国アステアは今、一人の少女の身体を持った大魔王によって滅亡の危機にさらされていた……。

突如どこからともなく現れた魔王によって居住区は次々と焼き払われ街は死に業火に包まれ、人々は魔王の脅威に慌てふためき恐怖した。

アステア王国ヴァルハラ宮殿　今ここでは国の要人たちが集められ緊急会議が行われている真つ最中だった。

「君たちをここに集めたのは他でもない、この国は今魔王ハルカと呼ばれる者によって滅亡の危機にさらされている」

こう言ったのは現国王のクラウスだ。

彼は八歳という異例の早さで国王の座に突き、その才を活かしこの国を五年という短い時間の間に世界にその名を轟かす魔法大国とした若き王であった。

クラウスの声は重い……魔王の襲撃、彼は国王就任以来の最大の危機にさらされていた。

「すでに我が国の魔法兵団を戦場に投入したが……すでに全滅してしまつたと聞いている……」

王の言葉にこの席に集められた者たちが一斉にざわめき始めた。

「まさか……世界に無敵と言わしめた魔法兵団が……」

「国王様、私たちはどうしたら？」

国王の表情は尚も重い。

「隣国に応援を頼んだが、応援が到着するのは早くても三日後になるだろう……だがその時にはこの国は……」

……国王の言わんとすることが皆わかり、一同は沈黙した。

もうすでにこの国の最大の戦力は失われ、国の中枢、このヴアルハラ宮が落とさせるのも時間の問題だろう。三日など待っている時間はない。

甲冑の音を大きく響かせながら兵士が会議場に息を切らせながら飛び込んで来た。

「大変です、魔王が宮殿の目の前まで攻め入って来ました！」

人々はどよめき顔を見合わせた。

「静まれ！」

王の声で辺りは一瞬にして静まり返った。

「魔導砲の準備をさせる！！」

魔導砲とはこの国の魔導士たちが古の文献を調べて現世に復元された魔導兵器で、その攻撃力は最大出力では小さな島を破壊させるほどのもので、その脅威の破壊力から実戦では今まで一度も使われたことはなかった。

王の意見に国始まって以来の”女性元帥”エルザが反論した。
「しかし、魔導砲は危険過ぎます。どの位の被害が出ると御思いで？」

ヴェガ將軍はその意見に顎ヒゲを手で触りながらこう言った。
「しかしねえ、この国の非常事態にそんな些細なことを言って

いる場合ではないと思うが？（……ククク）」

「些細なことですよって！（このゲスが！）」

エルザ元帥はテーブルを両手でバン！と叩きながら立ち上がり激怒した。

クラウス王はそんなエルザを見て、

「気を静めたまえエルザ元帥、確かに君の言うことはわからなくもないが我々には他に成す術が無い。君は何もせずに国が滅びるのを見届けるとても言うのかね？」

「しかし……（国の宝である民の命が……）」

「国王の意見は絶対であるぞエルザ元帥（少し黙っているメス犬は）」

エルザ元帥とヴェガ將軍の仲の悪さは王宮内では誰もが知っていることで、ヴェガ將軍がエルザ元帥よりも地位が下ということがエルザがヴェガの嫉妬をかう結果となり二人の仲を必要以上に悪くしているとも言われている。

国王クラウスは静かに淡々と二人に命令を下した。

「エルザ元帥は魔導砲の準備を、ヴェガ將軍は城にいる剣士たちを引き連れ魔王討伐を任せた」

「仰せの通りに」

エルザとヴェガは声を合わせてそう言うと、互いの顔を睨みつけた。

こうして、ついにアステア王国の存亡を賭けた魔王との戦いが本格的に始まったのだ……。

突然の爆発音とともに倒壊したルーファス宅を中心として、魔王の襲撃が始まった。

辺り一帯は瓦礫の山と化しその光景は悲惨なものであった。中には生きながらにして瓦礫の下に生き埋めになった人もいるだろう……。救援隊はまだ来ない……。だから彼女は自ら地上に出た。

瓦礫の山が爆発音とともに吹っ飛んだかと思うと、煙の中から女性が姿を現した。

「（……日差しがまぶしい）」

瓦礫に山の下から見事生還を遂げたのは彼女……。カーシャだった。

カーシャは顔に手をやり空を見上げ瓦礫の山にたたずみ、辺りをぐるりと見渡し考え事をした。

「（凄いことになっているな……。このまま逃げるという手もあるがそうも言っていられないな。さて、どうするか？ ……まずはあれからか？）」

『あれから』とは何のことだろうか？ カーシャの考えることは少し理解不能なことがあるので見当もつかない。

カーシャは何かを探すように地面を見ながら歩き回ると、ふと足を止め、

「この辺り……」

と呟くと、腰を屈めて瓦礫を持ち上げては投げたという作業を繰り返し、どんどん瓦礫を退かしていった。すると、ベニア板が見えてきた……。まさかこれは!?

カーシャがベニア板を退かすと、そこに居たのは言わずと知れたルーファスであった。

カーシャはルーファスの姿を確認すると、ルーファスに足蹴り（かかと蹴り）をくらわしながらこう言った。

「起きろルーファス、いつまで気絶している気だ！」

気絶？ …… ルーファスは死んだのでは？

カーシャは容赦なくルーファスを蹴りまくる、ドゴツ！ ドゴツ！ とマジ蹴りだ……これは死者に対する冒瀆では……なかつたらしい。

ルーファスの死体が行き成り動き出しわめき出した！？

「痛いだろ、そんなに蹴るな！ 一発目で起きてるから（まったく、なんでカーシャに蹴られなきゃいけないんだ）」

「だつたら早く出て来い！」

あれっ？ ルーファスは生きていたらしい……（笑）。

ルーファスは首をきよるきよると動かすと思わずこう叫んだ。
「どこだここ！」

ルーファスは気付くと穴の中にいた……そう言いたくなるのもわかる。

ルーファスは穴の中から這い出すと、辺りの風景がさっぱり、すつきり、ガラ〜ンとしていることに気付いた。

「……………（なんじゃこりゃ〜っ！ ……建物が……町が……そんなことより自宅が無い！」

ルーファスは唾然としてしまった……見覚えのある看板や建物が瓦礫と化している。

ルーファスは辺りを指差し今にも泣きそうな顔をしてカーシヤを見つめた。

「何これ？（何があつたの？）」

「魔王が”何故か”突然現れてな……こうなつた（そんな目で見つめるな……はずかしいだろ）」

「魔王が……!? ハルカは、ハルカはどうした！」

ルーファスは慌てて辺りを見回した。

「ハルカはここにはいない……ハルカは……ハルカはもう……

（……ふふ）」

カーシヤの瞳は涙で濡らされ、地面に泣き崩れた。

「どうしたんだ、ハルカはどうなつた？」

ルーファスはいつに無く真剣な表情でカーシヤの肩を掴んだ。突然立ち上がったカーシヤの瞳には涙一つ無く、口元は笑っていた。

「それがだな、魔王に身体を乗っ取られて大変なことになってしまった、あはは（あれはもう笑うしかないな……ふふ）」

泣き崩れたのはカーシヤちゃんの演出だつたらしい。

「あはは、じゃない！ 魔王にとって、大事だろ！」

「全くだ」

カーシヤの声にはまるで感情がこもってなかつた。……誰がこんな事態を引き起こしたんだ！ しかし、ルーファスはそれを知らない。

カーシヤはルーファに背を向け突然歩き出しこう言った。

「ハルカを助けに行くぞ（……私の責任だからな）」

「当たり前だ……ところで魔王は何処にいるんだ？」

「知らん（とりあえず、こつちに歩いてみたただけ）」

「……（適当だ）」

カーシャは思いつきで生きる女だった。

倒壊した建物の上で今まさに戦いが繰り広げられていた。

「行けい、行け行け行け！ どんどんかかれえーっ！」

ヴェガ將軍はつるぎを前にかざし、その合図とともに兵士たちは次々と魔王に斬りかかって行った。

魔王は『ふん』と鼻を鳴らし手を天空にかざすと、その手が電光を放つと同時につるぎが現れ魔王はそのつるぎをガシッと掴んだ。

そのつるぎは雷をそのままつるぎにしたようなもので、丈が異常に長く普通の人間には使いこなせない魔王ならではの武器と言える。

つるぎを手にした魔王は襲い掛かって来る兵士たちにその刃を向け、いとも簡単に一掃してしまった。その光景は圧巻だった。力の差がありすぎる。そして、ついにはヴェガ將軍のみとなってしまった。

魔王は自分の下に転がる死体を踏みつけこう言った。

「人間とは無力なモノだな……私はこんなものの為に」

「魔王がどうした……そんなもの恐るるに足りんは！！」

ヴェガ將軍は叫び声を上げながら大剣を振りかざし、魔王に突然斬りかかった。

魔王はヴェガに哀れみの瞳を向けた。

「まだ、私に楯突く気か……？」

ヴァガの大剣が魔王を捕らえた……しかし、魔王は微動だにせず避けることすらしなかった。

「死ねえっ魔王！」

ヴェガの大剣が魔王の肩に食い込んだ。

「（魔王など……!?!）」

ヴァガの顔を見る見るうちに蒼ざめていく。……魔王が……剣で斬られたというのに魔王の口元は不敵な笑みを浮かべている。

衝撃のあまりヴェガは身動き一つできなくなり、魔王に首もとを鷲掴みにしてそのまま放り投げられてしまった。

「ゴボツ……ウグ……（声が……出せん）」

ヴェガは首を抑え地面に這いつくばっている。それを見た魔王は静かにヴェガに歩み寄り彼のことを冷たい瞳で見下ろした。「……こんなにも弱く弱々しい者を神はなぜ作ったのか？」

突然魔王は腹に痛みを覚えよろめいた。魔王の腹には鋭い氷の刃が突き刺さっていた。

魔王は後ろを振り向き目を見開いた。

「お前か……女」

魔王の目線の先にはカーシャの姿が、
「待たせたな、魔王ハルカ」

たぶん魔王は待っていないかと思う。

ハルカの身体に突き刺さった氷の刃を見て、ルーファスは取

り乱した。

「な、なんてことするんだ、身体はハルカのものなんだぞ！」
そうルーファスの言うとおり、この身体はハルカのものだ。

傷つけることは望ましくない。が魔王ハルカが自ら氷の刃を引き抜くと傷は見る見るうちに塞がり跡形もなくなってしまった。

「見ただろルーファス遠慮することはない、どンドン殺れ」

「（やれって言われても）」

ルーファスは躊躇した。だが魔王には躊躇などなかった。

魔王はつるぎを横にブン！ と振り回した。カーシャはしゃがんでそれを避け、ルーファスはエビ反りで紙一重で避けたが服が少し焼け焦げた。

ルーファスの頬に冷や汗が流れた。

「（死ぬかと思った）」

と思ったのも束の間、魔王の次の攻撃が二人を襲う。

魔王のつるぎがルーファスの頭上に今まさに振り下ろされようとしていた。それを見たルーファスは両手を前に突き出しこっぴどう唱えた。

「デュラハンの盾！」

すると、ルーファスの前に半透明のシールドが現れ、間一髪ので魔王のつるぎを受け止めた。

一般に使われる魔法、主にレイラ・アイラに関しては魔法を発動させる際にはその魔法の名を言う必要は基本的にはないが、それ以外の魔法、ライラなどに関しては魔法を発動させる際には魔法の名前や詩を口に出す必要がある。

ルーファスの張ったシールドは明らかに魔王のつるぎに押されて
いる。シールドが破られるのも時間の問題だろう。だがその
ときカーシャがルーファスに向かって叫んだ。

「ルーファスその場を離れる！」

と少し間を置いてすぐに言葉を続けるカーシャ、

「アイスニードル！」

とカーシャが唱えると突然、魔王とルーファスの真上に巨大
ないくつもの氷の刃が現れ急落下した。

地面に降り注ぐ氷の刃は容赦なく二人を襲う、そして魔王の
身体を貫いた。ルーファスはシールドを張っていたおかげで助
かったがルーファスの顔は明らかに引きつっていた。

魔王のつるぎに込められた力が少し弱まった隙をつきルーフ
アスはシールドを解き猛ダツシュでその場から逃げると同時に
魔王のつるぎが振り下ろされ地面を粉々に砕き横幅一メートル
程の穴を開けた。

顔を引きつらせたルーファスはカーシャの方を向いてこう怒
鳴った。

「巻き添えにして殺すきか！」

「だから、離れると言っただろうが（それにシールドも張って
いたしな、大丈夫だと思っただがな）」

魔王は地面に突き刺さったつるぎを引き抜くところ言った。

「二人とも神の詩を詠えるとは驚いた」

その声は際して驚いているようには聞こえないが、二人に驚
いたというのは本当だろう。

ライラは別名『神の詩』とも呼ばれ、文献などでは残っているのはその術を実際に使える者はそうはいない、先ほどライラを使った二人が一流の魔導士としての技量を兼ね備えている証しであると言える。

魔王の目つきが変わった。その瞬間この場の空気が一瞬にして重くなった。

ルーファスとカーシャの身動きが止まり、魔王との息をもちかぬ睨み合いが始まった。沈黙が辺りを包み込む。

カーシャは天に手をかかげたままの体制で止まっている、次の攻撃の準備はいつでもできているというわけだ。一方ルーファスはこんな最中にこんなことを考えていた。

「先に仕掛けるべきか否か……そうだった……お湯を沸かしたまま家を出てしまった」

ルーファス今はそんなことを考えている場合ではないだろ。

それに家はすでに全壊しているのでお湯の心配はいらない。

辺りの沈黙を破ったのは馬のひづめの音だった。

「止まれー！！」

という女性の声とともに馬に乗って現れたのはエルザ元帥率いる城に残って待機をしていた魔法兵団の残りだった。

魔王の視線が今運ばれてきた大きな荷物に注がれた。

「（……魔導砲!? ……人間がこのような兵器を持っていようとは）」

魔導砲は普通の大砲の三倍近くの大きさがあり、その表面には魔導文字がびっしりと刻まれている。

エルザは馬から飛び降りると魔導士たちにこう指示をした。

「魔王は私が少しの間引き付ける（魔王……見た目はたの少女ではないか）、その間に魔導砲の準備をしる……！」

その言葉を聞いた魔王は鼻で笑いこう言った。

「私を引き付けるか……面白い」

魔王はつるぎを構え直し、エルザを迎え撃つ体制を整えた。

エルザは地面を強く蹴り上げ魔王に向かって走り出した。そして、走りながら魔法で作り出した光り輝くライトソードと呼ばれるつるぎを出し魔王の近くにいた二人を見てこう言った。

「ルーファスとカーシャ先生、戦意がまだあるのなら援護を頼む！」

へっばこ魔導士の名をこの国で知らない者はいないだろう。

それと、エルザとルーファスは古くからの知り合いであった。

それに加えて以前カーシャはルーファスとエルザが通っていた魔導学院の教師であった。

エルザは魔王に向けて刃を叩きつける。魔王はつるぎでそれを受け止め、ぶつかり合った剣から火花が散った。その間にルーファスとカーシャは魔王の背後に回って魔法を放った。

「サンダーボール！」（ルーファス）&「ライトクロス！」（カーシャ）

二つの魔法は魔王に直撃したが、魔王の身体には傷一つ付かず、ただハルカの着ている服がボロボロになっていくだけでもう上半身の服は着ていないも同然だった。それを見たルーファスは、

「（幼児体型だと思ってたけどそうでもなかった）」

と戦いには関係ないことを考えていた。ルーファスのえっちな。

魔王はエルザの剣を受け止めながら、片手をエルザの腹の位置に持っていき魔弾と呼ばれる魔法の弾のようなものを撃ち放った。それを受けたエルザの身体は後方に一〇メートルも飛ばされ、エルザの落ちた地面は大きな砂埃を上げた。

魔王はつるぎを消すと、腕を横に振るいながら呪文を唱えた。
「ウインドカッター」

魔王の振るった手からは緑色に光る三日月状の刃が次々と砂煙を上げながらカーシャに向かって凄いスピードで飛んで行き、カーシャはそれを避けるためにレビテーションで上空に舞い上がったが、刃は方向を突如変えカーシャに尚も襲い掛かる。

魔王は意識を集中させ、ウインドカッターを操っている。そのためカーシャがいくら逃げても刃は襲い掛かって来る。

次から次へと飛んでくる刃に逃げることにできないカーシャはルーファスに助けを求めた。

「ルーファスなんとかしろ！（こんなに空を飛び回っていたらスカートの中身が丸見えだ）」

カーシャは刃に当たることより、自分の穿いているスカートの中を人に見られることを気にしているらしい。カッワイィ〜。
ルーファスは少し考えた。

「（魔法で魔王を攻撃してもシカトされそうだから、刃本体を相殺した方がいいか）」

そう思った彼は刃に直接魔法を放った。

ルーファスは横投げの要領で手の平に魔弾を作り出し投げた……が魔弾は見事的から外れた。

「標的が遠すぎる」

ルーファスはボソツとそう呟いた。

「ちゃんと狙えへっぼこ！」

そう言われたルーファスは作戦変更、空を飛んで標的の近くまで行くことにしたのだが、空を飛んだまではよかった……が作戦は失敗だった。空を飛んだために魔王の視界に入ることになり、刃がルーファスまでも襲うことになったのだ。それを見たカーシャは本気でこう思った。

「（役立たずのへっぼこ）」

「わゝ助けてえー誰かー」

ルーファスは必死で刃を交わしている。役立たずだ。

上空で刃から必死に逃げるその姿は遠めから見るとまるでうるさいハ工飛び交っているようだった。

一方魔導砲の準備はというと　魔導士たちが魔導砲に向けてマナを注ぎ込んでいる真っ最中だった。そうここに集まった魔導士たちは目の前で戦いが繰り広げられていたのをただ見ていたわけではない、魔導士たちは自然界にあるマナを自らの身体を通して魔導砲に注ぎ込んでいたのだ。そして、ついに魔導砲を最大出力で打てるまでのマナを注ぎ込み終わった。

「撃てー！っ！！」

エルザ元帥の声とともに魔導砲が轟音を立てる。魔王はその

音を聴いてはつとした表情を浮かべた。この攻撃はまさに上空を飛びかう目障りな八工に気を取られ過ぎた魔王にとっての誤算が生み出した不意打ちであった。

魔導砲はもの凄い音と光を放ちながら地面をなぎ払い魔王に向けて進んで行く。次の瞬間、辺りは耳の鼓膜が破れんばかりの衝撃音とともに爆風が巻き起こり世界は白一色になった。

徐々に世界に色が戻つて来る……魔王はどうなったのか？

魔王はまだ生きていた。魔王は両手を自分の前に突き出しシールドを張り魔導砲を受け止めてはいるものの、魔王の身体は地面を削りながら徐々に後ろに押されている。

それを見た魔導士たち、そしてエルザ元帥は愕然とした。小島を一つ消滅させてしまうほどの攻撃力を持つ魔導砲がシールドで防がれている。しかし、彼女たちにはそれを見ていることしかできない、すでに自らの身体を媒体として大量のmanaを魔導砲に注ぎ込んでしまったため身体に過度の負担をかけ立っていることすら困難な状況なのだ。

そうとなればこの場でまだ戦えるのは、あの二人しかいないハズなのだが、二人の姿は何処にも見当たらない……。二人は魔導砲が巻き起こした爆風とともに何処かに飛ばされてしまっていたのだった。

魔王のシールドがミシミシという音を立てながらヒビが入り始めた。このまま行けばシールドは壊され魔王は魔導砲の直撃をくらうと誰もが思ったとき、魔王の身体に変化が現れた。

ハルカの背中から突如漆黒の悪魔の翼が生え、肌にはヒビが

入り皮がどんどん肉とともに剥がれ落ち地面にポトポトと落ち始めた。脱皮っぼい!?

魔王の身体が徐々に魔導砲を押しながら前に前進して行く。そしてついには魔王は一気にマナを増幅させて、魔導砲の軌道をずらし空の彼方に弾き飛ばしてしまったと同時にハルカの身体が膨張し肉が全て剥げ落ち、中から別の生き物が姿を現した。脱皮完了!?

漆黒の引き締まった身体と紅い翼と鋭い手の爪を兼ね備え、燃えるような瞳でエルザたちを睨みつけていた。

この姿こそが魔王ハルカの真の姿であり、魔王復活の瞬間でもあった……。

「真の復活を遂げた魔王。ハルカはどうなってしまったのか……。そして、あの二人は今どこに……?」

第七話 永久に眠れ……

「どこだここ!？」

それがルーファスの第一声だった。

そして彼はすぐに身体のあいこちに激痛を感じた。

「(いたたた、かなり、飛ばされたみたいだけど……)」

ルーファスは目を見開き辺りをぐるっと見渡すと、そこは……

…。

「噴水広場か……(どつりで身体が濡れてると思った)」

ルーファスの身体は噴水の池にどっぷり浸かっただけでびしょ濡れだ。

人々の姿も気配も無い……どうやらもう非難した後らしい。

人々の姿も見当たらないが……カーシャの姿もどこにも見当たらない。どうやらカーシャはルーファスとは別の場所に飛ばされてしまったらしい。

「(カーシャは自分でなんとかするだろうから……)」

ルーファスが大気のマナを身体に取り入れると、彼の身体だけがそよ風に包まれたように衣服かゆらゆらと揺れ、その力を増幅させてレビティションを使い空を飛んで再び戦場へとルーファスは独り向かって行った。

魔導士たちは皆、地面に横になり身動き一つしていない。そんな中ただ一人遠く彼方を見つめていたのは大魔王ハルカその

者であった。

大魔王の視線はある一点に注がれている。遠く空彼方からこちらに向かつてくる人影を……。

「あの男か……」

魔王は右手を目線の先に突き出し、魔弾を連続して撃ち放った。魔弾は人影に向かつて風を切りながら飛んで行く。

「ぎゃあっ！」

魔弾がルーファスの頭ギリギリをかすめ、思わず彼はあられもない奇声を発してしまった。

「（遠くから撃ってくるなんて反則だー！）」

ルーファスも負けじと魔王に向かつて、魔法を放った。

「メガフレア！」

ルーファスの手から紅蓮の炎が渦を巻きながら、全てのモノを焼き尽くす勢いで魔王目掛けて飛んで行く。

それを見た魔王の表情が少し変わり、小さくこう呟いた。

「メガフレアか……大神の詩を詠えるとは何者なのだ？」

紅蓮の炎が『ごうお』と音を立て、渦を巻きながら魔王の身体に当たる刹那、魔王は瞬時に漆黒の翼で自らの身体を包み込んだ。

魔王の身体が紅蓮の業火に包まれる、……が魔王が翼を勢いを付けて大きく広げると、炎はシューーという音を立て、煙を上げながら消えてしまった。

それを見たルーファスは思った。

「（反則だ、絶対勝てないよ）」

などと考えているとルーファスの横から不意に声が、

「こんばんわ」

「わっ！（……カーシャか）」

ルーファスの横には何時の間にかカーシャが飛んでいた。

「いつから居たの？」

「今から」

カーシャはいつでも神出鬼没だったりした。

魔王の眼前に二人の魔導士が降り立った。

「人間風情がいくら増えようが変わらんがな」

カーシャが鼻で笑う。

「考えが甘いな魔王、だからお前は滅びたのだ」

「カーシャ、そんなこと言っているの？（ケンカ売っているの！）」

「!?」

カーシャの発言に魔王は怒りをあらわにして翼を大きく動かし突風を起こす。

「私を滅したのは太古の神々であって人間ではない」

「そうか、ならば魔王、私の魔法を受け止めてみるがいい」

カーシャはピシツと魔王を指差し『予告倒すぞ宣言』をした。

「よかるう、私は逃げも隠れもしない、撃つてみよ」

魔王には相당한自信があるのか、それとも人間の放つ魔法など取るに足らないものなのか。確かにあの魔導砲ですら倒すことのできなかつた強敵だ、カーシャひとりの力ではどうにも成らない相手だ……だがしかしカーシャには作戦があった。

「ルーファス、魔王は逃げも隠れもしないそうだ（じつに紳士

的だ)。そこで作戦だ」

カーシャの顔が不敵な笑みを浮かべた。続いてルーファスは不安の笑みを浮かべた。

「作戦って？（カーシャの作戦はろくな事が無い）」

確かにカーシャの作戦及び思いつきの被害者は数知れない。もうすぐ『被害の会』ができるという噂さえある。

「名づけて、『ハンソクマホウヒヨウエンバツカサン反則魔法氷炎爆華散』で魔王なんて恐くない作戦……ルーファス、メガフレアだ！！」

「オーケー！」

ルーファスはカーシャの作戦を瞬時に理解したらしく、目を瞑り両手を魔王に向けた。……しかし、メガフレアは先ほど魔王によって防がれてしまっている筈では……？

「メガフレア！！」

「ホワイトプレス！！」

ルーファスが魔法を放つと同時にカーシャも続けざまに魔法を放った。がしかし、メガフレアは炎系の高位魔法であり、ホワイトプレスは氷系の高位魔法であり、互いは相反する魔法で相殺してしまうのが普通の筈なのだが……。

魔王の顔が驚愕の色へと見る見るうちに変化していく。

「太古の神々でさえ成しえなかった魔法を人間が何故？」

二人の放った魔法は互いに轟音と共にとぐるを巻きながら魔王に襲い掛かる。それを見たカーシャが不敵な笑みを浮かべた。

魔王は魔法でシールドを張ったものの二人の放った、（カーシャちゃんネーミング）氷炎爆華散に当たった刹那シールドは

ガラスの割れるような音を立てて粉々に砕け、炎と氷が魔王の身体を包み込んだ。

「人間は神々の失敗作ではないらしい」

魔王は膝を突き、そのまま地面に平伏した。それを見たカーシヤの瞳は氷のように冷たい。

「所詮は過去の亡霊だ」

この時言葉を発したカーシヤはいつになくシリアスモードで、ちよつとカツコよかった。だがすぐにカーシヤの表情は驚愕の色に変わり、ルーファスも開いた口が閉まらなくなった。

「神々が守ろうとした人間は……今や神も恐れる存在になりつつあるな」

ゆつくりと立ち上がった魔王の身体はポロポロに傷つき、漆黒の翼の片方は身体から離れ地面に落ちている。しかし、魔王の表情からは余裕と自信が感じられる。

「マスタードラゴンですら、一発で消滅させた合体魔法が破れるなんて……（もう笑うしかないわ……ふふ）」

「マスタードラゴンを……私に重症を負わしたことはある……だが堕ちた神であるマスタードラゴンごと私と一緒にしてもらっては困る」

魔王が全身に力を込めるとすぐさま身体の傷が癒え新たな翼が生え現れた。

カーシヤは思った。

「（反則だ、絶対勝てない）」

そう、今の二人には勝てる見込みは無いと言える。

魔王がさらに力を込めると、魔王の肉体が徐々に変化し始めた。手足が伸び、異型な顔つきに飛び出した牙と二本のツノ。

ルーファスのアゴががぼーんと外れた。

「（変身し過ぎだ、ドラ エのラスボスか!）」

カーシャの顔が引きつる。

「（グロイな……ハルカの見る影も無い）」

魔王は大口を開け鋭い牙を見せながら笑った。

「グハハ、これが俺の真の姿だ」

声の質も変わっている。なんていうか下卑ている。そして口も臭そうだ（ややウケ）。

すでにこの時カーシャはとても遠い目をしていた。

「（見た目と共に品性までも落ちたか……ふふ、青い鳥が見える）」

魔王は姿、人格ともにもまるで別人に変身を遂げ、その力も……。

魔王の腕が大きく横に振られ、ルーファスの身体をかすめただけだというのにルーファスの身体は五メートル後方まで吹き飛ばされた。

「（当たってたら、全身打撲だ、笑えない）」

「（品性は無いが……強いな）」

カーシャの言葉どおり大魔王ハルカの力はハンパなく、すつげえと言える。

「ククク、人間など全て消し去ってくれる」

そう言った魔王が両手を天高く上げると、魔王の身体が激しく

輝き出した。マナが魔王の全身に凄い勢いで吸収されていくの
が見て取れる。

カーシャは明らかにイヤな顔をした。

「（不吉な予感……ふふ）」

それに続いてルーファスの背筋に寒気が走った。

「（魔導砲と同じ位のマナの波動!?!）」

魔王の手の上に紅蓮の業火が渦を巻きどんどん大きくなって
いく。

「グハハ、これで終わりだ……ギガフレア!!」

カーシャは悟った。

「（死んだな……ふふ……儂い）」

魔王が魔法を放とうとした刹那、それを止める声が……。

「やめてえーっ！っ！！！」

その言葉に魔王の放ったギガフレアの軌道が狙いから反れ、エ
ビ反りをしたルーファスの上を飛んで行き、空の彼方へ飛んで
行った。

魔王は自らの身体を抱きかかえ、地面を転げ周り暴れ始めた。

「ルーファス、魔王の様子がおかしいぞ」

「（今度こそは死んだと思った）えっ何?」

魔王は苦しそうだった。しかし、その身体から発せられた声
には苦しみの微塵も……いや、別人の声が！

「早く、今のうちにコイツを倒して！」

「ハルカ！」

ルーファスは思わず叫んだ。そして、カーシャの顔つきも変わ

る。

「ハルカの声だな（幽霊か？）」

二人の耳には確かにハルカの声が……そして、

「早く、私の意識があるうちに……邪魔をするな女……早く殺して……」

二つの声が交互に発せられていく。これを聞いたカーシャは、

「（腹話術!）」

と思った。

「グググ……邪魔をするな女!!」

魔王は尚も地面の上でもがき苦しんでいる。

カーシャの怒号がルーファスに浴びせられる。

「何をしているルーファス！ 身体を持つ限り魔王を打て！」
カーシャは魔法を身体を持つ限り打ちまくった。ルーファスもそれに続いて魔法を打ちまくる。

「ホワイトプレス（カーシャ）&メガフレア（ルーファス）」
（カーシャちゃんネーミング）氷炎爆華散が魔王の身体に何発も何発も打ち込まれ、辺りを砂煙が覆い隠す。

「はあ……はあ……」

肩を大きく揺らすルーファスの息は上がり、彼は地面に倒れるように座り込んだ。

「ルーファス、生きてるか？」

ルーファスがカーシャの方を見ると、彼女もまた地面に座り込み息を切らしていた。

カーシャは極度の疲れで血走った目で魔王を見て言った。

「あれだけやれば……魔王も……!?」

カーシャの顔色が蒼ざめて行った。

「ゲゲゲ……その程度で死ぬものか!」

魔王の身体は無傷とは言えないもののその足で立ち上がり、狂気の目で二人を睨みつけていた。

「あははは……」(ルーファス&カーシャ)

二人の乾いた笑いが辺りに鳴り響く……。

魔王の身体の各部分は失われており、蒼い血が地面に滴り落ちる。

それを見ているルーファスとカーシャは以前、不気味な笑いを発していた。

「ゲゲゲ……俺は体内の核ごと消し飛ばさない限り死ぬことは無い」

そう言つて、魔王は手を大きく振り上げ、その鋭い爪をルーファスに振り下ろそうとする。

「逃げてルーファス!!」

ハルカの声が辺りに鳴り響くが魔王の手は無常にもルーファスに振り下ろされた。

極度の疲労によつてルーファスは逃げることが出来ない! そして……地面を血しぶきが紅く彩る。……世界から音が消えた。

ルーファスの身体がボタンと地面に転がった。生命を持たない人形のように……。

「ルーファス!!」

カーシャの叫びで世界に音が戻った。

「ククク……次はおまえだ」

カーシャが不敵な笑みを浮かべ魔王を見上げる。

「これだけはしたくなかったが……」

カーシャはそう言っただけで自分の両耳にしていたイヤリングを外した、その途端カーシャの身体が蒼白く輝きはじめた。その輝きは冷たく辺りを包み込んだ。

そして、カーシャの身体に変化が起きた。彼女の瞳は黒から蒼に変わり、唇は赤から紫に変わり、髪は漆黒から白銀に……。

魔王の瞳が見開かれ、驚愕の表情を浮かべこう言った。

「おまえ……まさか氷の女王か!? ……しかし、あいつは……?」

「ほう……私のことを知っているのか？」

カーシャの声は冷たく澄んでいるが重たく威圧感が矛盾に満ちた声であった。

「なぜだ？ 氷の女王は……!？」

「そうだ……だから、このチカラを使えば私の命は無いだろう……ふふ」

立ち上がることもすらできないほど疲労困憊していた筈のカーシャはゆっくり立ち上がり、魔王にジリジリと近づいていく。

魔王は近づいてくるカーシャに鋭い爪を振り下ろそうとしたがハルカがそれを止めた。

「カーシャさん……今のうちに……」

「ふっ……ありがとうハルカ……」

「グググ……身体が動かせなくとも……おまえの魔法などでは

俺は……」

「これならどうだ？」

カーシヤは魔王の口の中に手を突っ込む同時に魔法を唱えた。

「ギガブリザード！」

カーシヤは魔王のさっき言った言葉『体内の核ごと消し飛ばさない限り死ぬことは無い』という言葉をヒントを得て、魔王の体内に直接魔法を打ち込んでやったのだ。

魔王の身体は一瞬のうちに氷つき、鋭い音を立てて砕け散った。そのときハルカの声が……。

「みんな……さよなら……」

そして、全てのチカラを使ったカーシヤの身体は水と化し大地に染み込まれていった。

魔王との戦いは終わりを迎え、そして……。

数日の時が経った。魔王によって破壊された街は国民全員の協力により、元どおりに再建されつつあった。

ルーファスは再建された自宅の裏庭にいた。

「（あれから、どの位たったのか……昨日のことのようだな）」

ルーファスは裏庭に立てられた墓に綺麗な花を捧げると、その場で泣き崩れた。

墓石には『ルーファス』と刻み込まれている……あれ？ ……

…ルーファス？

ルーファスは後ろから女性に声をかけられた。

「まだ、恨んでるの？」

ルーファスが後ろを振り向くと、そこには何とハルカの姿が!?

……あれ？ ……ハルカ？

「あたりまえだろ！」

そう言つてルーファスは墓に書かれてる文字を指差した。そこにはやつぱり『ルーファス』の文字が？

ハルカは惚けた顔しながら上を見上げた。

「いや、だから……それは（あはは）」

「私が死んだと思つて埋めようとしたつて、どういうこと!？」

「（だからつて、そんなお墓立てなくても、それつて当てつけでしょ）でも、いいじゃないルーファスはそれだけど、私の身体はこれなんだから」

ハルカはルーファスの身体を指して、そして自分を指さした。

ハルカの身体はルーファスとは明らかに違った。どう見てもハルカの身体は半透明だった……しかし、足はある……だから言つて幽霊ではないと言ひ切れないが、彼女はとりあえず幽霊ではない。

「家には帰れないし、こんな身体になっちゃうし、どうしてくれるのよ！」

「確かに家に帰れないのは謝るけど……その身体になつたのはカーシャのせいでしょ？」

「そのカーシャさんは今どこに居るの？」

「ここだ」

「わっ！ ……ビックリさせないでくださいよ（なんでいつもこの人幽霊みたいならわれかたするんだろ？）」

あれ？ ……なんで？ ……どうやら全員とりあえず生きていたらしい？

どうして全員生きていたのだろうか……？

それを順番にルーファスから説明していくと。まず彼は出血多量ではあったが戦闘終了後に駆けつけたアステア兵によって一命を取りとめ、その他その場に倒れていた多くの兵士やエルザ元帥、ついでにヴァガ將軍も救われたらしい。

次にカーシャだが、彼女はある日突然ルーファスが入院していた病院に姿を現し、ルーファスが『なんで生きてたの』と聞くところ……冬だからな……ふふ』と言って不敵な笑みを浮かべるとそれ以上何も語らなかつたらしい。

そして最後にハルカだが、彼女は魔王が滅びた後自由の身になったのだが、身体が滅びてしまったためにハルカのマナだけがこの世界に残ってしまったらしい。つまり今の彼女は幽霊と同じようなものらしい（カーシャちゃん曰くだが）。

「あの、カーシャさん」
ハルカはちよつと不満たらたらな顔をしてカーシャを見つめている。

「何だ？」

「カーシャさんが『死者の召喚』なんてしなかつたらこんなことにならなかつたんじゃ不是吗？」

「……終わつたことだ気にするな（……ふっ………真実は言えな

い）」

真実って何だカーシャ！ 隠し事か！！

ハルカは自ら堪忍袋の緒を切った。

「『気にするな』って、この身体どうしてくれるんですか！

（無責任）」

「みんな生きていたんだ細かいことは気にするな」

ルーファスもそれに腕組みながら、うんうんと同意する。

「そうそう」

”バツシーン！！”という音が辺りに鳴り響いた。ルーファスの頬が真っ赤に染まった。

でもまあ、カーシャの言うとおりみんな生きていたのだからいいじゃないの？ これで大団円といきましょう

「よくなーい！！」

ハルカの声だけが虚しく辺りに響き渡った……。

魔王は滅び国は徐々に平和を取り戻し、全てが終わった……のだろうか？

ハルカの運命は、身体は、家にはいつ帰れるのか、それとももう帰れないのか？

数多くの謎はどうなった、あまりにも物語の終わり方が安直過ぎるのでは、物語は続くのか？

それは誰にもわからない……？

Fin……？

第一・五話 メガネシヨキング！

せつかく掃除したばかりの部屋を引つ掻き回すハルカ。

「ないないないない〜い！」

なにが無いのかというと、

「わたしの眼鏡がない」

だそうだ。

そこへ髪の毛を片手でボサボサ掻きながらルーファスが現れた。

「ふう、やっとゴミ捨て終わったよ」

「ルーファス、わたしの眼鏡知らない？」

「知らないけど？」

「うっそーん、ないと困るー」

異界から召喚された女子高生ハルカは、右も左もわからぬ世界で強制的に生活をしなくてはいけなくなったのだが、住居になった魔導士ルーファスの家が汚いのなんの。

出したら出しっぱなしで、腐海の森化してしまった部屋。足の踏み場は本や服の上。小銭を落としたら絶対に見つからない。そんな状況の部屋だった。

どうにか自分の生活スペースを確保するため、ハルカは掃除に精を出したのだが、その最中に眼鏡が失踪してしまっただけだ。い。

「わたしの眼鏡、眼鏡、眼鏡！（呼んで出てきたら苦労しない

「んだけど」

「他の物と一緒に片付けたんじゃないの？」

「わたしがそんなドジなことするわけ……」

掃除の最中を脳内リプレイ。

「いらぬ物といふ物をわけて、洗濯物はカゴへ、種類別に分けられるものは一塊に、自分の眼鏡は適当に手の届く場所に置いた。」

それからルーファスが『ここにあるもの全部捨てて来ていいの？』と聞いた。

そして、ハルカは顔も向けずに『うん』と言って頷いたのだ。

「あー！ー！ー！ー！！」

ハルカ痛恨のミス！

眼鏡も一緒に捨てられたつばい！

慌てふためいて、あつち向いて、こつち向いて、くるつと回ってハルカはルーファスの胸倉に掴みかかった。

「ゴミ捨て場に案内して！」

「えっ、どうしたの？」

「あたしの眼鏡！」

「ん？」

「間違えて捨てたの！」

「ええーっ！」

二人は急いで家を飛び出した。

地区ごとに分けられたゴミ捨て場はルーファス宅から眼と鼻の先だった。にも関わらずルーファスはあまり利用したことが

ない。

ゴミ捨て場に着いた二人。
ない!?

ゴミがない!

ルーファスが遠くを走り去る馬車を指差した。

「ゴミの回収車!」

「どこ!？」

馬車を目視したハルカが走る!

全速力で走る、走る、コケる!!

「ひゃっ!？」

ドテッ。

地面の上にへばり付くハルカ。

「いったーい!」

地面に座り込み片膝を立てたハルカのその膝には、赤く剥けた擦り傷が痛々しくついていた。

痛がるハルカの横で、ルーファスはいたわりの言葉をかけると思いきや、

「ハルカってドジ?」

「違うからーっ!」

怒って立ち上がったハルカの服の裾が地面についている。

この服はルーファスに借りた法衣だった。

突然こつちの世界に強制召喚されたハルカは着替えを持っているはずもなく、ルーファスの服を借りているのだ。

すでにゴミ収集馬車の陰形はない。

さらば眼鏡、さらば青春、さらば視界。

ハルカは辺りをグルリンと見回した。

「とーくが見えない」

ヤベツ!?

「近くもあんま見えない」

もつとヤベツ！

その場に立ち尽くすこと数秒。ハルカの次の行動は！

「ルーファス！ 眼鏡屋さん連れてって！」

「いいけど、一回家に帰って支度してからね」

「ルーファスがお金出してね」

「なんで？」

「あたしお金もってない」

「あー（今月の仕送りまだなんだけど）」

そんなこんなで二人は眼鏡屋さんに行くことになったのだった。

乗合馬車で数分。

大聖堂の見下ろす中央広場までやって来た。

都市でのお祭りなどの催しはここで開かれ、それ以外るときは広場にはいっぱい露天が並んでいる。

自分の店を持たない者の中には、ここで靴屋や理髪店を開く職人もいる。

その広場を囲うように建てられた二階から三階建てくらい建物。石造りのこの建物の多くは商店で、工房を備えた見せも

数多くある。

そんな中にある一軒が眼鏡屋だった。

眼鏡っ子ではないルーファスはもちろん来店は初体験。ドキドキのワクワクだ。

だが、たかが眼鏡屋にファンタジーでミラクルな出来事が待っているはずもない。

店員がいらっしやいませと声をかけて寄ってくるだけで、特別な演出はなかった。のだが、そんなことなんて吹き飛ばしてしまうほどのインパクト！

店員の眼鏡が変だ。

眼鏡じゃなくて、仮面舞踏会で見る鳥さんの羽がいつぱいついた目を隠す仮面！

よく見ると、目の穴が開いている部分にレンズがはめ込んでいる……列記とした眼鏡だ！

「いらっしやいませ、コケコッコー」

しかもこの店員、語尾が変だ。

ツッコミどころ満載なのに、ツツコンでいいものなのか困りものだ。愛のないツッコミは相手を傷つける結果になってしまふ。

もしかしたら、語尾に『コケコッコー』と付けるのがコンプレックスかもしれない。

それをネタに幼い頃にイジメにあっていたかもしれない。

てゆーか、仮面の奥の素顔が気になる。

ルーファスと思う。

「（眼鏡屋さんってこんな場所だったのかー）」

ルーファスの脳内に悪い固定概念がついてしまった。

仮面店員はさすがは眼鏡屋の店員だ。ルーファスではなく、ハルカが眼鏡を必要としていることを察したようだ。さつとハルカの傍らに移動した。

「本日はどのような眼鏡をお探でしょうか、コケコッコー？」

「あ、えーと、そのお（ど、どうしょ）」

変な店員に押されてハルカは口ごもってしまった。

詰め寄ってくる変な店員の見方を変えれば、どう見たって変質者だ。しかも、甘ったるい香水をつけているせいか、あまり近くに寄って欲しくない。てゆーか、近づかないで！

他の従業員はいないのかと見回すが、この変質者しかいないようだ。

ササツとハルカはルーファスの背中に隠れて、ルーファスの背中を小突く。

「ルーファスお願い」

「え、あ、そのですね（いきなりバトンタッチされても困るよ）。この子に似合う眼鏡を探してるんですけど……できれば安いやつ」

今月の仕送りがまだなルーファスの財布は軽い。

仮面店員は素早い身のこなしで一つ目の眼鏡を手に取った。

「これなんかどうでしょう、コケコッコー？」

おすすめ商品その一は、外見的にふっの眼鏡だ。黒ぶちで

ダサイということ以外。

仮面店員はルーファスの後ろに隠れていたハルカの腕を引っ張り、強引に眼鏡をかけさせた。その瞬間力チツという音がハルカの耳元でした。

「な、なにをしたの!？」

慌てるハルカに仮面店員が説明する。

「それは自動ロック付き眼鏡です、コケコッコー」
自動ロック？

ハルカは焦って眼鏡を外そうとしたが外れない。耳ごと引っ張られてイタイ。

「早く外してよ！」

「声紋登録で外すことができる、コケコッコー。無理に外そうとすると爆発する、コケコッコー」

「……死ね」

思わず本音を吐いてしまったハルカ。

無理に外すと爆発する用途の意味がわからない。どんな状況でその効果が発揮されるのか未知だ。

「早く外してよ！（こんな商品、誰が買うの?）」

ハルカに怒鳴られた仮面店員はしょんぼりと肩を落とした。

「当売れ筋の商品なのに……コケコッコー」

だから誰が買うんだ？

「いいから早く外してよ」

「裏庭に二羽二ワトリがいる、コケコッコー」

早口に唱えると、ハルカに掛けられていた眼鏡はすんなり外

れた。

「もつと普通の眼鏡はないの？　ねえルーファスもそう思うでしょよ？」

ハルカはルーファスを探して見回すと、ルーファスは商品の眼鏡を手にとって眺めていた。その眼鏡というのが、眼鏡というより、サイバースコープ？

仮面店員の瞳の奥がキラリんと輝く。

「お客様はお目が高い、それは当店売れ筋ナンバーワンの商品です、コケコッコー」

これも売れ筋らしい。

このサイバースコープ風眼鏡っていうか、サイバースコープにはどんなギミックがあるのだろうか？

「お客様、これはなんと水鉄砲が備え付けられた眼鏡なのです、コケコッコー」

それを遠くで聞いていたハルカが咳く。

「……あつそ（このお店にはまともな眼鏡ないわけ？）」

ハルカは普通の眼鏡を探すべく、陳列してある眼鏡をじつと観察した。ここにある眼鏡は見た目的にふっりの眼鏡だ。しかし、どんな不必要な機能が備わっているかはわからない。

ハルカは眼鏡をひとつ手に取った。

「この銀色の下しかフレームのないやつ（……これは普通の眼鏡かなあ）」

すると仮面店員がすっ飛んできた。

「お客様はお目が高い、それは当店売れ筋ナンバーワンの商品

です、コケコッコー」

これもナンバーワンらしい。ここに突っ込むことに意味があるのだろうか？

この店の全てが怪しい。

仮面店員はまたもやハルカに眼鏡を強引に掛け、今度はハルカの身体をクルツと一八〇度開回転。

ハルカの視線の先は店の出入り口だった。

この行動にどんな意味があるのだろうか？

仮面店員は言う。

「向こうを向いたまま『発射！』と言って欲しい、コケコッ

ー」

「は、発射？」

ズゴーン！

ハルカの掛けていた眼鏡からレーザービームが発射され、店の外まで飛んでいった。通行人を丸焼けにしていないことを願うしかない。

「な、なにこの眼鏡!？」

「目から怪光線眼鏡です、コケコッコー」

需要がないわけではないだろうが、誰がこんな物を買っているのだろうか？

ハルカは横を振り向くと、ルーファスが眼を輝かせてこっちを見ている。

「すごい、それ欲しいなあ！」

ここにいた。こんな物を買うやつが。

普通の眼鏡が置いていないかもしれない。

でも、こうなったら意地でも普通の眼鏡を見つけてみせる！
ハルカはこれだっと思つた眼鏡を手にとつた。

見た目的にはフレームがない普通の眼鏡だ。

仮面店員の仮面がハルカの顔に近づいた。

「本当にそれで宜しいんですか、コケコッコー？」

「……な、なにかあるの？」

「本当にそれで宜しいんですね、コケコッコー？」

思わせぶりの店員のこの態度。脅迫だ。

ハルカはどんな恐ろしい機能がこの平凡な眼鏡にあるのか想像した。

思いつかない。

どんな機能があるのか思いつかなかった。

「この眼鏡にはどんな機能があるの？」

恐る恐るハルカが尋ねると、仮面店員は生唾をゴクンと呑み込んで言つたのだ。

「それにはなにも特殊機能がついておりませんがいいのですか、

コケコッコー！」

「これください！」

即答でハルカは答えた。

普通の眼鏡がこの店にもあつたのだ！

あとはレンズ度数が合えばオツケーだ。

「フレームはこれでいいので、レンズを換えて度数を合わせてもらえますか？」

ハルカが言うと、仮面店員は『チツチツチツ』と指を横に振った。

「当店の眼鏡は全てマジカルレンズを使用しておりますので、どんな視力のお客様にも快適な2・0の視力を提供させていただいております、コケコツコー」

あとは財布係りのルーファスが会計を済ませるだけだ。財布の中身と相談しながらルーファスが尋ねる。

「いくらですか？」

「五〇〇〇ラウルになります、コケコツコー」

「高っ！（ピンクボムが五玉も買えるよ）」

財布の中からお金さんさようなら。

名残惜しそうにルーファスが財布からお金を出そうとしたとき、急に目の前の仮面店員が腹を押さえてしゃがみ込んでしまった。

「コ、コケ、コケツコ。ちょ、ちょっとお待ちください、コケコツコー」

痛みに耐えるように仮面店員は歯を食いしばり、ヨロヨロと店の奥の扉に歩いて行ってしまった。

「いったい仮面店員の身になにが起こったのだろうか？」

仮面店員は奥の部屋に行くとき、こんなことを言ってハルカとルーファスに念を押した。

「なにがあっても覗かないで……コケコツコー」

ボタンと扉が閉められ店員は姿を消した。

残されたハルカとルーファスはなにが起きたのかと、顔を見

合わせて仮面店員のことを心配した。

のだが、突然、扉の向こう側から奇声が!?

「コケーツ、コケーツ、コケツコー!」

扉の向こうでヤバイことが起きてるっぽい雰囲気だ。

「コケーツ、ココココケーツ!」

扉の向こうから聴こえてくる謎の奇声は鳴り止まない。

いったい扉の向こうでなにが起こっているのだろうか?

ハルカがルーファスのわき腹を肘で小突く。

「ねえ、ちょっと見てきて」

「ヤダよお、絶対に覗かないでくださいって言われたじゃん
(そう言われると見たくなくなるけど)」

「いいから早く見てきて!」

ドンとハルカに押されてルーファスは扉を押し破ってしまっ
た。

そこでルーファスの見たものは!?

こつちを向いて驚いた顔をするニワトリ!

ニワトリのお尻から生みたての卵が一個落ちた。どうやらニ
ワトリは出産中だったらしい。

じゃなくて、なんで店の奥にニワトリが!?

ニワトリは世にも恐ろしい顔をしてハルカとルーファスを睨
みつけた。

「み〜た〜な〜!」

鶏冠に来たニワトリがルーファスに襲い掛かる。

「コケーツ、コケコケコケコケ!」

抜け落ちる白い羽が散乱し、ニワトリに突付かれたルーファスは慌ててハルカを連れて逃げ出した。

店の外に出てだいぶ走ったところで、後ろから追っ手が来ていないことを確認して、ハルカをルーファスは互いに顔を見合わせた。

「なんだったのあれ？」

「ニワトリ」

当たり前のことを返すルーファスにハルカはため息をついた。次の日、あの眼鏡ショップが突然の店じまいしたことを、数日立ってからルーファスは噂で聞いたのだった。

結局、眼鏡を買えないままハルカはルーファスの家に戻ってきてしまった。

「眼鏡ないと見えなーい」

「そんなこと言っても、またあの店に行くわけにはいかないでしょ？」

「他の店探してよ」

ルーファスに文句を言うハルカは残っていた部屋の掃除を続けていた。

こつちの世界に来てしまったときに一緒に持ってきた通学鞆を漁るハルカ。

そんなハルカの手がふと止まる。

「……あつ（コンタクトレンズ）」

ハルカの眼に入ったのは、コンタクトレンズのケース。洗淨

液も一緒にある。

ルーファスに見られる前にハルカは通字鞆を隠して、何事もなかったように笑ってルーファスに話しかける。

「もしかしたら眼鏡いらなかもお。なんだか急に視力が回復してきたかもお」

「そんなことあるの？」

「あはは、あるかもお（……ないけど）」

こうしてハルカの眼鏡騒動はルーファスの知らないところで決着したのだった。

メガネショック!? おしまい

第二部

第一話 私は黒猫

ここは病院。病院と言つても仮設病院。大魔王ハルカが大暴れしてせいで、ちゃんとした病院はパンク状態。そして、ルーファスはある仮設病院に担ぎ込まれていた。

ベッドの上ですやすや眠るルーファスに何者かが忍び寄る。まさに音も立てずに忍び寄る。忍者か暗殺者か？

「……ルーファス……起きろ……」

謎の人物が声をかけるが、ルーファスはすやすやと眠っている。が、

「うっ！（痛い）」

腹を殴られた。受け身全く無しのクリティカルヒットだ。

目を開けるとそこにいたのは、音を立てずに忍び寄る達人ルーファスだった。

「あつ、カーシャ、おはよ（殴って起こすの止めて欲しいんだけど）」

「こんばんわ、元気そうだな」

と言われルーファスは辺りを見回した。

「……ここは？」

「病院だ。では、行くぞ」

「えっ!?（行くってどこに?）」

カーシャはいつでも思いつき&唐突で生きる女だった。それが彼女の生きる道!

「ハルカのところを決まっているだろう」

起きたばかりで、ぼーっとしていたルーファスは、今の言葉を聞いて目を大きく開けてベッドからバシッとピシッと飛び起きた。

「ハ、ハルカ!? そうだよハルカはどうなったんだ?」

「おまえがぶっ倒れたあと、いろいろあってな（あゝんなことや、こゝんなことが……ふふ）、私の“チカラ”を使って大魔王は倒した」

「チカラを使ったの? でも、どうして、なんで生きてたの? あのチカラを使ったらカーシャの身体が持たないんじゃない?」

「……冬だからな……ふふ（形勢逆転）」

と言つて不敵な笑みを浮かべるとそれ以上カーシャは何も語らなかつた。

「冬だから?（意味がわからない）」

「それよりもルーファス、ハルカが待っている帰るぞ」

「ハルカが待ってるって……だって、大魔王はカーシャに倒されて……ハルカは生きているの?」

「微妙だ（あれを生きていると言っているのか?）」

「微妙ってつどうということだよ!」

「会えばわかる（ハンカチの用意だ……ふふ）」

魔導士たちのチカラによって三日という驚異的な早さで、大魔王によって壊された住宅はすでにそのほとんどが再建されつつあった。

ルーファスは再建された家々を見てびっくり仰天している。

「もうこんなに元通りになってるなんて……私はどれくらい寝ていたの？（まさか一年なんてことないよね）」

「三日だ」

「ホントに!?（三日でこんなに……アステア王国って建築技術もすごいんだ）」

「だが、中身はからっぽだ。家具などは、数日後に損害を受けた人に支給されるお金でどうにかしろと言っていたな（なんでも金で解決なんて、汚い世の中になったもんだ……私も金貰えるのか？ ふふ……楽しみ）」

汚いと言いつつ、お金を貰えることを楽しみにしているカーシャ。どうやらカーシャはお金が好きらしい。

自宅は建っている場所は同じだったが、概観は全く別の建物になっていた。ようするに新築だったりする。アステア王国太っ腹！

ルーファスが自宅のドアを開けると、すぐさま誰かが飛び出して来て二人を迎えた。

「おかえりルーファス!!」

飛び出して来た何かを見たルーファスは、それを指差し、首だけを動かしてカーシャの方を振り向くと、無表情のまま聞いた。

「何あれ？」

「ハルカだ」

「それは見ればわかるけど……（半透明じゃん、もしかして幽霊）」

そう、ルーファスを出迎えたのは確かにハルカだった。でも一つだけいつもと違うところがあった。半透明なのだ。

「ルーファス、まあ座れ、説明してやる」

「座れつてどこに？」

家の中には家具一つなかった。

「床にだ。ハルカもこつちに来い」

「は〜い」

ハルカはカーシヤに言われるままに飛んで来た。本当にふあふあ飛んで来た。それを見たルーファスは得体の知れ無い物を見る表情だった。

「だから何あれ？（幽霊にしか見えないけど）」

「床に座れ、わかりやすく説明してやる」

この後、ハルカについての話を紙芝居や人形劇を交えたり交えなかつたりしながら、二時間ほどでカーシヤさんが説明してくれた。カーシヤさん曰く、大魔王の肉体が滅びたあと、ハルカは自由の身になったのだけど、身体が滅びてしまっていたのでマナだけの状態になってしまったらしい。つまり、わかりやすく言うと幽霊の親戚のようなものにハルカはなってしまったらしい。

「質問はあるか？」

ハルカが元氣よく手を上げた。

「は〜い！」

「なんだ？」

「私はこれからどうしたらいいんですか？　せ〜んぶカーシャさんの責任ですよ。カーシャさんが死者の召喚なんてしなかったら、魔王なんて呼ばなくても済んだわけですし……（もう、家に帰るところじゃなくなっちゃた）」

「ハルカがルーファスを気絶させたのがいけないのだから？（……シュツ！！……ゴン！！……ボタン！！）」

「うっ……（確かにあれは私がいけないんだけど）。でも、ルーファス生きてたじゃないですか!？」

「それはあとで気付いたことだ、死者の召喚をしたのは私の責任ではない！（本当は生きているのを知っていたのだが……真実は言えない……言えない……ふふ）」

カーシャは確信犯だった。しかも、重大な秘密を隠してるみたいだ。だが、それを知るものは誰もいない。

この場で一人会話に付いて行けない者がいた。もちろんルーファスだ。

「あのさ、死者の召喚って何？」

この言葉を聞いて二人はいきなり口を閉じて沈黙した。ハルカは内心かなり焦っている、カーシャは平常心。

まったくしゃべろうとしない二人に不信感を抱くルーファスは、こちらも沈黙してハルカをじ〜っと見つめている。カーシャは口を割らないのでハルカに集中攻撃だ。

「……（お願いだから見つめないで）」

「……（絶対何か隠してる）」

ハルカは下を向いて視線を反らす。だが、ルーファスの無言の圧力は続く。で、ハルカはあっさり負けた。

「……ごめん、ルーファス本当にごめんね。だって、だってね、死んじゃったと思って、それで生き返らせようと思って（不可抗力だよねぇ）。えへっ」

ハルカは笑顔を浮かべてみたが、口元は明らかに引きつっていた。

「……生き返らせようと思ってねぇ」

そう呟くと、ルーファスはカーシャを疑いの眼差しで見た。

「……（なぜ、私を見る）」

心の中で動揺がダツシユしているカーシャだが、表情はいつも通り無表情で何を考えているのかわからない。だが、ルーファスにはカーシャが動揺しているのがわかった。二人の仲は長いので、テレパシーみたいな感じでルーファスはカーシャの動揺を見抜いたので。

「カーシャさあ……私が生きてること知ってたような気がするのは、気のせいだよな？」

「……（へっぼこのクセして、鋭い）。私もルーファスが本当に死んだと思ってな。ハルカがおまえに本をぶつけて、殺したと思って土に埋めようとしたのを私が止めなければどうなっていたことか……それで、生き返らせよう……（だが、あんな騒ぎになるとはな……笑えない……ふふ）」

ルーファスの目がハルカに再び向けられた。

「ふうん、土に埋めようとねえ」

このときばかりはハルカも言い訳はできない。しかも、ここでカーシャの一言が、

「しかも穴に放り込む時、ジャイアントスイングだったな……」

（大モグラ……ふふ）

「……………（なんで、カーシャさん余計なこと言わなくても）」

一瞬失笑したルーファスは、無言で立ち上がり裏庭へ向かった。

裏庭に着いたルーファスは、二本の材木をしばって十字を作って簡単な墓標を作って、土にぶつ刺すとどこかに行ってしまった。

ルーファスのことを追いかけてきて一部始終を見ているハルカは、ルーファスが何をやるうとしているのかさっぱりわからなかった。

「……………（誰のお墓作ってるんだろ？）」

ハルカが疑問に思い、ぼーっと空を見てみると、ルーファスが花束とペンキを持って帰って来た。

帰って来たルーファスが何をするのかとハルカは見てみると、ルーファスは建てた墓に何かを書いて花束を手向けると、その場で泣き崩れた。

ハルカがそつとルーファスの後ろに移動して、墓に書かれている文字を見るとそこには、

「（……ルーファスって書いてある？）まだ、恨んでるの？」
ハルカの声に反応して涙を浮かべながらルーファスが勢いよく振り向いた。

「あたりまえだろ！」

そう言つてルーファスは墓に書かれてる文字を指差した。

「いや、だから……それは（あはは）」

「私が死んだと思つて埋めようとしたつて、どういうこと!?」

「（だからつて、そんなお墓立てなくても、それつて当てつけでしょ）でも、いいじゃないルーファスはそれだけど、私の身体はこれなんだから」

ハルカはルーファスの身体を指して、そして自分を指さして言葉を続けた。

「家には帰れないし、こんな身体になっちゃうし、どうしてくれるのよ！」

「確かに家に帰れないのは謝るけど……その身体になつたのはカーシャのせいでしょ？」

「そのカーシャさんは今どこに居るの？」

「ここだ」

「わっ！ ……ビックリさせないでくださいよ（なんでいつもこの人幽霊みたいならわれかたするんだろ？）。あの、カーシャさん」

ハルカはちよつと不満たらたらな顔をしてカーシャを見つめている。

「一つ、さっきの説明でしていなかった重大なことがある。…このままだとハルカは消えてしまう（これはマナの還元理論の応用なのだが、二人に説明してもわからんだろうな。特にへつぼこには。）」

「ええーっ」

カーシャの言葉を聞いて二人は声を合わせて驚いた。これは緊急事態だ。ハルカが消えてしまうなんて…なぜそれを早く言わない!?

ハルカはカーシャの襟首を掴むとぶんぶんと揺らした。局地的大地震、マグニチュード7・0くらいか？

「どういうことですか!? 私が消えるってどういうことなんですか!?!」

ぶんぶん振られるカーシャはハルカと顔を合わせようとしな

い。
「さくで、どうしたもののかな？」

カーシャは無表情のまま他人事のように言った。だが、この事態を引き起こしたのはカーシャだ、責任逃れは出来ない。

「どうしたもんかなじゃないですよ!! ルーファスも考えてもよ、あんたも魔導士なんですよ（へつぼこだけど）」

「考えてって言われても…（魔導学院のときの成績悪かったからなあゝあはは）」

ルーファスは役立たずだった。

まだまだ局地的地震がカーシャを襲っていた。

「カーシャさん、どうにかしてくださいよ!!」

「……方法が無い事も無い。だが、一時的な応急手段だがな」

そんなわけで一時的な応急手段を取る為にハルカはカーシャに連れられてカーシャちゃん宅に行くことになった。ちなみにルーファスは生活に必要な最低限の物を買出しに出かけるので別行動。

カーシャの家の中は暗かった。まだ昼間だというのにロウソクの光が室内を照らしている。

「（よく、こんなところで生活できるなあ〜）」

ゴン！ 案の定、お約束でハルカは何かに頭をぶつけた。

「いた〜い……（何にぶつかったの?）」

「気をつける、散らかっているからな」

ゴン！ ハルカは今度は足をぶつけた。

「いた〜い、カーシャさん掃除とかしてるんですか?」

「してない（掃除なんて生まれてから一度もしたことがない）」

掃除をしたことがないってどういことですか？ 汚いよカーシャ！

物にぶつかること数十回、ハルカようやくカーシャに連れられて、ある部屋に着いた。

この部屋は先程よりは明るい。ロウソクの光ではなく、部屋全体がぼわあ〜と光っている。

ハルカは部屋中を見回した。部屋には二本の大きな円筒形の硝子でできているような入れ物があり、管の中は液体のような

物で満たされ、下から小さな気泡が上へ上がっている。そして、その中には片方に出目金、もう片方には黒猫が入っていた。

「なんですか、あれ？」

「ごもつとも質問に対して、カーシャも質問で返す。」

「どつちがいい？」

カーシャは出目金と黒猫の方を指差している。つまり、どつちが好きかということなのか？

「どつちつて？ 何がですか？」

「あれは私のペットの出目金と黒猫だ（ちなみに、ジェファーソンとマリリンという名前だった）。もう既に死んでいるものを腐らないように保管してある」

「だから、どういうことですか？」

「どつちが好きかと聞いているのだ（私のおすすめは出目金だ）」

「……黒猫（ちょっとやな予感）」

「では、黒猫の身体を使おう（出目金がおすすめだったのだがな……しかたない）」

「使うつてどういうことですか？」

「あの身体の中に入れてもらう（本来はいつか生き返らせてあげるために保管しておいたのだが、死者の召喚が失敗したのにな……ふふ、衝撃の告白）」

な、なんと、カーシャは黒猫と出目金を生き返られるために死者の召喚をしようとしたのだ。

ハルカしばしの沈黙。

「……………（私にネコになれってこと？）」

「では、始めるか（ひさしぶりの実験だ……ふふ、魔導学院をクビになってから、おもしろい実験はしていなかったからな……ふふ）」

カーシャの口の端が少し上がった。カーシャがこの不敵な笑みをやると本当に恐い。だって何が起こるかわからないもん。

「カ、カーシャさん、始めるって何をですか？（な、なんで不敵に笑ってるの!?)」

ハルカ大ピンチ!!

恐怖に苛まれてハルカは猛ダツシユで逃げようとした。が、カーシャは床を滑るように移動して、ハルカの腕を掴んだ。

「逃げるのか？（ふふ、逃げても無駄）」

「逃げるなんて……ちょっとトイレ（カーシャさん、恐い）」

「マナの状態でトイレに行きたくなるわけないだろう？」

ぐぐつとハルカの身体が引つ張られた。

「あ、あの、カーシャさん、ちょ、ちょっと心の準備が……

（殺される!!）」

殺されはしなないと思うが、いい実験台にはされるだろう。ハルカ危うし!

カーシャに腕を引つ張られて部屋の奥に引きずられていくハルカ。彼女の運命はどうなってしまうのか!?

数時間後、ルーファスの家にカーシャが訪ねてきた。

「こんばんわ、ルーファス」

「あれ？ ハルカはどうしたの？」

ハルカの姿が見当たらない。ハルカは一緒ではないのか……まさか、実験に失敗したとか!?

「ここにいる」

ルーファスの視線はカーシャの持っている、携帯用ペットハウスに注がれた。

「ここにいるって、その中に？（まさか、そんなところに入るわけないじゃん）」

カーシャは膝を突き携帯用ペットハウスのドアを開けた。中から出てきたのはネコ、でも普通のネコじゃなかった。人間の言葉をしゃべるネコだった。

「……ルーファスただいま」

聞き覚えのある声だった。そして、ルーファス驚愕！

「は、ハルカくっ!？」

ネコ「ハルカは小さく頷いた。

「ネコになっちゃった（出目金よりはマシでしょ?）」

しばし沈黙のルーファス。彼が次に取った行動は、カーシャの胸倉を掴むことだった。

「ど、どうということだよ？（ネコってなんで？ カーシャがネコ好きなのは知ってるけど）」

「しかたないだろ、ハルカが消えてしまうよりはマシだろうに……（本当は出目金よかった）」

ハルカはワザとらしく、ネコっぽく、ルーファスに擦り寄ると、

「にゃん　　そういうことだからよろしくね！」

「はあ？（なんで、こうなるの!?)」

ルーファスは頭を抱えて悩んだ。そんな彼を頭痛が襲う……
可哀想なのはいつたい誰なのか？

ネコになってしまったハルカとルーファスの生活が始まって
しまった。

果たしてハルカは人間に戻ることができるのか!?　むしろ家
に帰ることはできるのか？

ハルカの運命はどうなってしまうのか!?

第二話 我輩は猫である

ハルカがこつちの世界に来て、二週間以上の月日が流れようとしていた。もう二週間と言うべきか、まだ二週間と言うべきなのは微妙だ。

二週間の間にハルカはいろいろなことを経験した。居住区を半径一キロメートルに渡って吹っ飛ばしてみたり、国立博物館で写本を盗んだり、ルーファスを殺人未遂してみたり、大魔王に身体を奪われたり、ろくなことがなかった。こう考えると、まだ二週間ほどしか経っていないと思えるかもしれない。

そして、今ハルカはネコである。

ネコになって二日が過ぎたが、この身体にも少しずつ慣れてきた。

「（でも、早く人間に戻りたい）」

そんなことを思いながらハルカはルーファス宅の縁側でひなたぼっこをしていた。

「ハルカ餌だよ」

遠くでしたルーファスの声が出た。その声に誘われるままにルーファスの元へ四本の足で走って行く。

ルーファスの足元まで来ると、ルーファスは手に持っていたお皿を床に置いた。お皿にはサラダとパンが少し乗っている。

「ハルカ、餌だよ」

「ネコ扱いしないでくれる？（餌って言い方ムカつく）」

「だってネコじゃん」

「身体はネコでも、中身は人間なんだから」

これでも最初のルーファスの態度よりはマシになった。ネコになつての初めての食事でルーファスは、なんと、ハルカにベツトフードを出したのだ。当然ハルカは激怒して引ッ掻いてやったが、ルーファスは素でそれをやったらしいので、すぐにハルカは怒りを押さえた。　　そんな今に至る。

出された朝食を食べながらハルカは思う。

「（ネコじゃなくって、人間の身体に入れてくれればよかったのに……でも死んだ人間の身体に入るのはちよつと気が引けるかなあゝ、出目金よりはマシだけど）」

ハルカと同じく朝食を食べているルーファスがハルカに声を掛けて来た。

「たまには外出かけてきたら？　ネコになってから外出でないでしょ？（健康に悪いからね）」

「ネコだから外出たたくないの（ネコじゃ、なにもできないもん）」

出たくないとは言つたものの、ハルカはやっぱり外に出かけることにした。少しは気分転換になるかもしれない。そう考えたからだ。

外は冬の冷たい風が吹いていて少し肌寒かった。

石畳の上をどこに行くでもなく歩くハルカ。横を人や馬車が通り過ぎて行く、ハルカに気を止めてくれる人は誰もいない。

前方から灰色の毛を持ったネコがこちらに向かつてくる。明

らかにハルカに向かって歩いてきていた。

灰色のネコはハルカの前まで来て、『にゃ〜ん』と鳴いた。もちろんハルカにはネコ語はわからない。

「（私に話し掛けるみたいだけど……何言ってるんだろ？）」

灰色のネコは、また『にゃ〜ん』と鳴いた。

「（だから、何言ってるんだかわかんないんだって……とにかく、にゃ〜んって鳴いてみようかな）……にゃ〜ん」

灰色のネコ沈黙。人間の『にゃ〜ん』は所詮人間の声のようだ。

灰色のネコしっぽ立てる。怒っているらしい。

灰色のネコ『ふーっ』と鳴く。かなり怒っているらしい。

灰色のネコ、ハルカに飛び掛かる！

「（ま、マジで!?!）」

ハルカ逃げる。

「（なんで!?! 何か悪いことした私!?!）」

ドリフトしながら人の間を抜けて、急カーブを見事に曲がり裏路地に逃げ込む。後ろを見ると灰色のネコがまだ追いかけて来ている。

「（しっしー!?!）」

迷路のような裏路地を逃げ回るハルカ。そして、裏路地のお約束　行き止まりみたいだな。

「（なんで、行き止まりなのぉ〜!?!）」

ハルカのシヨック!

後ろは壁、前からは灰色のネコがジリジリとハルカに詰め寄

ってくる。

「（コッってピンチ!）」

確認するまでも無い。ピンチである。

後ずするハルカと壁との距離がほとんど無くなった。それに加えて灰色のネコとの距離も狭まっている。

「誰か助けてえ〜!」

悲痛の叫びをついつい上げてしまったハルカの横で、木でできたドアがギィイと鳴って中から人の顔が現れた。

「誰かいるの？」

柔らかな声。ドアから覗いているのは小さな女の子だった。たぶん五歳から七歳くらいだと思われる。

ハルカは女の子を見つめる。まさに仔猫の瞳で助けを請う。

女の子は状況を理解したらしく、灰色のネコを追いやってハルカを助けてくれた。

「（はぁ……助かった……えっ!）」

ホッと胸を撫で下ろしていたハルカの身体が持ち上げられた。上を見ると女の子の顔が直ぐそこに迫っている。

「あなたどこから来たの？」

「（どうしよう？ 人間の言葉でしゃべったらマズイよね。でも、ネコみたいにうまく『にゃ〜ん』って鳴けないし）」

女の子はあることに気付いた。ネコの首には首輪が付けられていて、それに付いているコインに何か文字が刻まれていた。

「ハルカ？ ハルカって名前なんだね」

首輪はカーシャがプレゼントしてくれた物だ。つまりカーシ

ヤもハルカのことをネコ扱いしているということになる。

ニコニコが顔の女の子はハルカを抱きかかえたまま、家の中に入ってしまった。ハルカある意味軟禁？

ハルカどうする？ ハルカ頭猛スピード回転！

「（どうしたらいいの？ 逃げなきゃ！ 逃げた方がいいの？ てゆーか逃げるべきなの!?!）」

ハルカ大混乱!?

女の子はハルカをソファアの上に下ろすと、

「ミルク持ってきてあげるから待っていてね」

と言つて姿を消した。逃げるチャンス到来！

「（逃げなきゃー）」

ソファアから飛び降りて玄関に向かう。廊下を走りぬけすぐに玄関まで来たが、そこである重大なことに気付いた。

「（ドア開けられない）」

そう、ネコに玄関のドアを開けることはできない。しかも、玄関から律儀に出ようと思うなんてハルカらしい。

引き返そうと後ろを振り返った時、手にミルクの入ったお皿を持った女の子と目が合った。

「（ヤバイ）」

「どうしたの？ 待っててねって言ったでしょ？」

ミルクを溢さないように女の子はゆっくりとハルカに近づいて来る。

「（11め2）」

ハルカはそう思いながら、女の子の横を猛ダツシユで擦り抜

けて階段を駆け上がった。

二階になぜ逃げたのかはハルカもわからない。だが、これだけは断言できる二階に逃げたのは失敗だった。

「自ら逃げ場を無くしてどうするの!？」

ハルカの混乱は増していた。混乱が増してたついでにドアの開いていた部屋に逃げ込む。

「(どうしよう……そもそも、なんで私逃げてるの?)」

そう、ハルカはなぜ逃げているのだろうか？ ハルカもわかっていないことを他人はもつとわからない。

階段を上ってくる音が聞こえる。ハルカにとってこの音は、死のカウントダウンに等しいくらいドキドキするものだった。

「どこ行っちゃったの？」

「(私のこと探してるよあ〜)」

女の子の足音が近づいて来る。そして、止まった。

「こんなところにいたあ」

「(……見つけた)」

辺りを見回してハルカは逃げ場を探してみるが……窓が開いているくらい。言うまでもないがここは二階である。落ちたら大変なことになる。

逃げ場を失ったハルカは軽やかなネコの動きで窓枠に飛び乗った。

「(つわあ〜、高いなあ〜)」

下を見てしまったハルカは背筋が冷たくなった。ネコであるハルカにとっては人間以上に高く感じられる。

ハルカの乗っている窓枠と隣りの家の屋根は一メートルほど、ジャンプして飛べない距離じゃない。

「（けど、落ちたらヤバイよね）」

そう、落ちたらヤバイ。だが、ハルカは飛んだ。窓枠にしっかりと足を掛けて高く飛んだ。

空を飛翔するハルカ。この日ハルカは鳥になった。
。屋根にうまく着地して、ほっとしたハルカは、息をゆっくりと吐き出し肩を下げた。

「（よかった……落ちなくて……落ちなくて?）」

ハルカ的大シヨック!!

「（どうやって降りたらしいの!?)」

とにかく下に降りる方法を見つけようと道路沿いの屋根に移動して、下を見てみる。

「（誰か気付いてくれないかなあ〜）」

この辺りは商店が多く建ち並ぶ道で、この先をずーつと行くとお城の前に出る。そのため人通りは多い、だが誰もハルカに気付いてくれない。

「（誰か気付いて……気付いて……気付いて……）」

念じてみる。

道路を歩いていた剣士風の女の人が見上げた。その先には黒猫が自分を見ている。ハルカの念が通じたのか？ エスパ
ーハルカ!?

「（なんだあの猫は……降りれなくなったのか?）」

「（あの人私のこと見てる……助けてくれないかなあ?）」

剣士は屋根の下まで近づいて来て何かを抱きかかえるような腕の形をした。

「（降りて来いってことなのかな？）」

「気をつけて降りてくるのだぞ」

「（降りて来いって言われても、ちょっと恐いな）」

「しっかりと受けて止めてやるから、安心して降りてくるといい」

ハルカは女剣士の言葉を信じて、屋根から飛び降りた。小さなネコの身体はやさしく抱きかかえられ、怪我をしないで済んだ。

「（よかった）」

ほっとした表情をしているネコの顔を女剣士は不思議そうな顔して覗き込んでいる。

「おまえ、本当に猫か？」

「（ヒクッ……す、鋭い）」

「マナの波動がおまえのことを猫ではないと言っている（人間の波動が感じられる……しかもこの波動はどこかで感じたことがあるぞ）」

「（逃げなきゃー）」

危険を察知したハルカは女剣士の間を突いて逃げ出した。だが、女剣士は女剣士に在らず、女魔法剣士だった。

「逃がしはしないよ」

魔法剣士の指から光のチェーンが放たれハルカの首輪に巻き付いた。

「うぐっ！」

魔法剣士の指とハルカの首輪が繋がれ、そのままハルカは魔法剣士の足元まで引きずられてしまった。

「仔猫ちゃん、あなたが誰なのかわかったよ。でもここで話すのはまずいね。ルーファスの家に行こう」

「（えっ？ ルーファスの家？）」

この魔法剣士はどうやらネコの正体を見破ったらしい。しかも、ルーファスのことまで知っているらしい。この女性はいつたい何者なのか？

数分後、ルーファス宅に黒猫を抱きかかえた一人の魔法剣士が尋ねてきた。

「ルーファス、届け物だ」

この声を聞いたルーファスは血相を変えてすっ飛んでドアを開けた。

「な、なんで？（なんで、なんで、何しに来たの？）」

「怪我の調子はどうだ？」

「何しに来たの？」

「これを届けに来た」

魔法剣士の腕には黒猫が抱きかかえていた。

「……ハルカ!？」

名前を呼ばれたハルカは無言でルーファスを見つめた。

「（ルーファス、この人誰なの？）」

「や、やあ、よく来たねエルザ……この間は大変だったよね」

魔法剣士エルザ。ハルカをここまで連れてきたのはこの国始まって以来の女性元帥エルザであった。

エルザはハルカの首輪に付けていたチェーンを解呪して、床に下ろした。

「大魔王の次は猫か……この娘も大変だな」

「ハルカ、しゃべってもいいよ。この人知り合いだから」

「ルーファスこの人誰なの？（私のことも知ってるみたいだけど？）」

「この人はエルザ元帥、ハルカが大魔王になつてたときにいろいろお世話になつた人。ハルカがこの世界に来た経緯からネコになつた経緯まで、私の知ってることは洗いざらししゃべらされた（この人のお陰で、いろいろと事件のこともみ消してもらつてるんだよね）」

ルーファスとエルザは魔導学院時代の後輩と先輩の中で、昔からルーファスが騒ぎを起こすたびにエルザがそのあと処理に当たってくれている。

「あのエルザ、お茶でも飲んでいく？」

「いや、結構。仕事があるので今日はこれで失礼する」

エルザは帰ろうとドアノブに手を掛けようとした瞬間、ドアは後ろに引かれた。開かれたドアの先を見た彼女はある人物と目が合った。

「……………（カーシャ先生）」

「こんばんわ、ひさしぶりだな（なんで、こいつがいる？）」「エルザとカーシャは互いに視線を逸らそうとせず相手の目を

じつと無言で見ている。微妙な緊迫感がこの辺り一帯に充満していく。

黒猫であるハルカの毛が逆立った。

「（なんか、身体がビリビリする……もしかしてこの二人のせい？）」

もしかしてではなかった。カーシャは以前魔導学院で教師をやっていたのだが、その時の生徒がエルザだったのだが、その頃から何故かこの二人は馬が合わない。つまり犬猿の仲というやつだ。

いつの間にかこの場から二人を残して、ルーファスとハルカは後ず去っていた。本能がそうさせているのだ。

カーシャとエルザはしゃべろうとしなければ、目を逸らそうともしない。この勝負、目を逸らした方が負けなのだ。まるで野生動物の戦い。

「カーシャ先生から大魔王の件について詳しい話をまだ聞いておりませんが、今日は話してもらえるのでしょうか？（絶対あの騒ぎの元凶は、この女にあると思うのだが……確かな証拠が掴めてない）」

「大魔王の件はルーファスに聞いただろうか？ それが全てだ（……出目金のことバレたら、国を追われるだけでは済まんからな……ふふ）」

「ルーファスが知っているのは、ハルカが既に魔王になってあとからです。それ以前の話をお聞かせ願いたい（あの時、学校を辞めさせるだけじゃなくて、国を追放してやればよかつ

た」

「儀式の最中におまえのところの、へっぽこ兵士が乗り込んで来て儀式をめちやくちやにした挙げ句、魔王を呼び出してしまったのだ（この女だけは許さん、学校を辞めるハメになったのも、店を営業停止にさせられたのも、この女のせいだ）」

カーシャは以前魔導学院で問題を起こした際、エルザの学生運動によって学院を首になっており、数日前に起こったハルカ居住区を半径一キロメートルに渡って吹っ飛ばす事件でも重要参考人として、取り調べを今も受けている最中で、カーシャの店は営業停止にさせられている。

「確かに儀式の邪魔をしたのは、こちらの不手際でした（あの部下はヴェガ將軍の部下で私には関係ないが）。ですが、あなたには数多くの疑惑があります。国立博物館でライラの写本が盗まれた時も現場にいたそうですが、それは本当ですか？（これだけ多くの疑惑がありながら、なぜいつもしつぽを掴めないんだこの女は……？）」

「一週間以上も前のことだから記憶にないな（……そんなことまで調査の手が及んでいるのか……ふふ、逃げるか？）」

「そうですか……記憶にないですか、仕方ありませんね。今度お会いするときは証拠を山のように持ってきますから、では（絶対しつぽを掴んでやる）」

エルザは家を出て行く時、口元を少し歪めてボタンとドアを閉めて行ってしまった。

エルザの出て行った室内は未だ緊迫した空気が流れていた。

元凶はもちろんカーシャ。そのカーシャは、ゆっくりとルーファスとハルカの方を鋭い目つきで振り向いた。

「言うなよ絶対。私が捕まった時は、どうなるかわかるな？（あゝんなことやこゝんなことに加えて、そゝんなこともするぞ……ふふ）」

ルーファスは首を横に振っているんだか、ぶるぶる震えているんだかわからないような動きをして、首をコクコクと何度も立てに振った。もう声すら出ないほどに怯えきっている。

「ハルカもだぞ！（もし何か言ったら、ミミズの中にマナを移してやるからな……ふふ、楽しみ）」

ハルカの毛は全て逆立ち、身体がブルッと大きく震えた。

「わ、私はネコだから……人間の言葉しゃべれないから……に、にやゝん（触らぬ鬼神に祟りなし……逃げるにやゝん）」

ネコになったハルカは、猫を被ってこの場から逃げ出した。

第三話 魔導学院

ソファアの上で昼寝を楽しむルーファスの腹にネコパンチが喰らわされた。

「うっ！（最近よく殴られる）」

「ルーファス起きて！！」

目を擦りながらルーファスが自分の腹のところを見ると、そこには黒猫ハルカが乗っていた。

「起きた？」

「起きたよ（ネコのクセして、なんであんなにパンチ力があるの？）」

少し怒った様子のハルカは、軽やかにルーファスのお腹からフローリングの床に飛び降り、ルーファスの顔を睨んだ。

「私が人間に戻る方法探してくれてたんじゃないの？（昼寝してるなんてヒドイ！！）」

「あ、うん（そうだったんだけど……いつの間にか寝てた）」

だらんとソファアからはみ出たルーファスの片方の手の先には、床に開いた状態で落ちている魔導書が落ちていた。読んでいる途中で寝てしまったに違いない、決定的な証拠だった。

白い目でルーファスはハルカに見られている。

「だから、さっきまでは一生懸命だったんだけど……（寝てた）」

「寝てたんでしょ？」

「だつて……（眠かつたんだもん）」

「ルーファスはいいよ、私の身になって考えてみてよ！ 家には帰れないし、ネコにはなるし、私の人生返して！！」

「私だつて、ハルカが家に帰る方法と人間に戻る方法を考えるよ！！（でも見つからないんだからしょうがないだろ……）」

「ふん！（へっばこ魔導士！！）」

機嫌サイターのハルカはさつさとどこかに行つてしまった。もちろんしつぽは立つていた。

「しつぽ立てるなんて……わかりやすいな」

「ホントにわかりやすいなああの娘は……」

「わっ！！（……カーシャか）」

ソファーに腰を掛けている、ルーファスが横を見るとそこには、カーシャもソファーに何時の間にか腰を掛けて落ち着いていた。しかも、手にはティーカップが……落ち着き過ぎ。

「こんばんわ、この頃寒い日が続くな（ついでに私の心も猛吹雪……ふふ、寒い）」

「いつも思うんだけど、不法侵入だよな？」

「安心しろ、玄関から入っている（ノックはしてないがな）」

玄関から入つても不法侵入は不法侵入だ。カーシャが一日で犯している罪は数知れず。

「玄関から入つても不法侵入は不法侵入でしょ？」

「不法滞在よりはマシだろ？」

「意味わかんないよ」

カーシヤの言い訳は意味がわからなかった。

「ところでルーファス暇か？（暇でなくとも強制だが）」

「まあ、暇って言ったら暇だけど……（それより、なんでカーシヤは毎日毎日うちに来るの？ 私より暇なんじゃないの？）」

ホントにカーシヤは毎日毎日何をしてるのでしょうか？ 答えは簡単、店が営業停止にされてしまったのでルーファスをいびりに来てるのです。駄目じゃん。

なんとも言いがたい悪魔の微笑を浮かべてルーファスを見つめるカーシヤの瞳は凄く濁っていた。よからぬことを考えているのは明白だった。

「……………（嫌な予感がする）」

「戦争しに行くぞ」

「はっ！！ どこに!？（戦争して何!）」

カーシヤのビクリドッキリ仰天発言にルーファスは度肝を抜かれた。

「魔導学院に乗り込むぞ！！（ふふ……おもしろいことになるぞ）」

「乗り込むってどういうこと？（戦争して!）」

「実際全面戦争になるかはわからないが、おまえと”私”があの学院に乗り込めば追い出されるの必然。最悪戦争だな」

「戦争っていうのは言い過ぎでしょ？（確かにカーシヤが学院に戻ったら、追い返されるだろうけど）」

「わからんぞ、ファウストなら私に喧嘩を吹っかけてくると思

うが？」

「確かに（ファスト先生ならありえるな、あの人そういうの好きだからな）」

ファウストとは、以前ルーファスが通っていた魔導学院の教員で、悪魔系の術を得意としていた人物だ。学院ではカーシヤに次ぐトンデモ系の狂師で、危ない実験や魔術が好きな先生だった。カーシヤが学院をクビになった今は学院一のトンデモ狂師はファウストに違いなかった。

「ねえ、二人ともなんの話してるの？（ルーファスやけに顔蒼いけど？）」

いつの間にかハルカが二人の前まで来ていた。ネコになったハルカはカーシヤに次ぐ忍び足を手に入れたらしい。

「こんばんわハルカ。おまえも一緒に来い、元の世界に帰る方法と人間に戻る方法両方の手がかりが見つかるかもしれん」

「ほ、ホントですか!？（……カーシヤさんの言うことは信用できないけど）」

カーシヤの信用はガタ落ちだった。当たり前と言ったらそれまでだが……。

「本当だ。優秀な魔導士たちがこの国で一番集まる所に行く（学院時代のルーファスはへっぴょこだったがな……ふふ）」

「そんなところがあるんですか？（じゃあ、今まで何で連れて行ってくれなかったんだろ？）」

ハルカがふとルーファスの顔を見ると、彼は今までハルカが見た中で一番うかない表情をしていた。魔導学院はルーファス

にとつてあまり行きたくないところだった。なぜならば、恥ずかしい思い出しかないからだ。

「ではさっそく魔導学院に行くとしよう。ハルカはこの中に入れ」

カーシャはそう言うのと、どこからか携帯用ペットハウスを出してドアを開けた。

「丁寧に運んで下さいね（前にカーシャさんに運んでもらった時は酷かったからなあ〜）」

ペットハウスに入る寸前ハルカはルーファスの顔を見た。ルーファスは以前うかない表情をしていた。

「なんでうかない表情してるの？ ルーファスも早く準備してよ」

ハルカに言われ、ルーファスは重たそうに腰を上げると、空気よりも重そうなため息を落とした。

「はあ〜……行くのヤダな」

これは心からの本音、まさに心の叫び。ただでさえ行くの嫌なのにカーシャは殺る気満々。ルーファスはだんだん頭が痛くなってきた。

誰が頭が痛くなるかとカーシャには関係ないことらしく、ハルカをペットハウスに入れたカーシャはルーファスに足蹴りを喰らわせて、ペットハウスを差し出した。

「これ」

「私が持つのか？」

と聞きながらもすでにルーファスはペットハウスを受け取っ

ていた。ここにあるのは女王様と下僕の構図、長年カーシャに尻を敷かれているルーファスの悲しい習性だった。

「行くぞ」

すでにカーシャは玄関を出る寸前だった。カーシャの移動速度は異様に速い。だが、カーシャが素早く動いているのを見た者はこの世に誰も居ない。まさにミス터리、カーシャは謎多き女性だった。

ガイアと呼ばれるこの世界には魔法を使える者が普通に存在している。

そして、このアステア王国には魔法を教える学校が存在する。この国には普通教育を九年間受けることが義務付けられているが、普通教育にプラスして魔法を学ぶこともできる。魔法教育を受けるかどうかは個人の自由だが、ほとんどの者はこの教育を受けている。

九年間の義務教育を終えると、その上に専門各種の学校があり、試験などを受け授業料等を払い入ることができる。その中に魔導士と呼ばれる魔法を使い仕事をこなす職業に就く為の学校がある。人々の病気を治す魔導士もいれば、天候を自在に操る魔導士、中には工事現場で石畳みの道路を作っている魔導士もいる。魔導士が生活に根付いているだ。

ルーファスも魔導学園で九年間勉強したのちに、滑り込みでクラウス魔導学院と呼ばれるエリート学校に進学することができた。恐らくルーファスは人生の運を全てここに注ぎ込んでし

まったく違うない。

ルーファスは今そのクラウド魔導学院の事務室にいた。

「あのぉ、この卒業生のルーファスというものですが、ちよつと用事があつて来たんですけど？（なんか意味も無くドキドキするなあ）」

ルーファスの応対に当たったのは二〇代後半くらいの綺麗な女性だった。ルーファス曰くだが。

「（ルーファス？ …… ルーファスつてもしかして、へっぽこ魔導士ルーファス？）ルーファス様ですね。学園内に入るには腕に腕章を付けて頂く決まりになっておりますがよろしいですか？」

この腕章は、来客を識別する以外にも騒ぎを起こそうとした者に罰を与えるための秘密が隠されている。

「あ、はい（この腕章知ってるよぉ、あんまり付けて欲しくないな）」

「では、腕を出して頂けますか？」

ルーファスが腕を出すと、女性はルーファスの腕に魔法を掛けて紅い腕章を作り出した。

「学院を出る際はここで腕章を解呪しますので、必ずここに戻つてきてください」

「は、はい、わかりました。それから、ペットのネコも学院内に入れても平気ですか？」

「構いませんよ、ペットはそのままお入りください」

学院内に入って行くルーファスにお辞儀をする女性の後ろで

静かな声がした。

「私にも腕章をしてもらおう」

女性は思わずびくつきとして後ろを振り向くとそこにいたのはカーシヤが立っていた。

「カ、カーシヤ先生!?（な、なんでこの人が!?)」

カーシヤは腕をさつと突き出した。

「早く」

「あ、あのカーシヤ先生は学院内に入れると言われておりまして……（ブラックリストのトップに名前が載ってる人がわざわざ正面から尋ねてくるなんて）」

「…… 宣戦布告…… 宣戦布告だ。表向きにはクビではなくて依頼退職となっているハズだが?（せっかく教員どもに私が来たことを教えてやろうという心遣いだったのだがな…… しかたない）」

カーシヤの手のひらがさやしく女性の目を多く隠した。ふつと女性の意識が飛び、床にゆっくりと倒れてしまった。

「勝手に上がらせてもらうぞ（ふふ…… 教員ども待ってるよ……」

…特にヨハン・ファウスト!）」

魔導学院は今授業時間で廊下は静けさに満ち、時折教室から生徒の音が聞こえる程度だった。

廊下を歩くルーファスは辺りをキョロキョロ見回しながら過去の思い出に浸っていた。

「懐かしいな……（そう言えばここでローゼンクロイツの毒電

波攻撃を受けて、腹痛を起こしたんだ……いい思い出少ないな」

「悠長なことをいつている暇は無い……私の不法侵入は既にバレている」

「!?（……いつの間にか横にいるよ）」

ルーファスがビクつとして横を振り向くとカーシャがルーファスの歩調に合わせて歩いていた。

「事務の融通が利かなくてな、腕章を付けていない」

「……てことは?（教職員が侵入者を探してるってことか……侵入者がカーシャだって知ったら大変なことになるなあ）」

腕章を付けずに学院内に入ると、すぐさま学院内全体に張り巡らされているセンサーの役割をしている魔法に引っかかり侵入者がバレてしまう。

廊下が急に騒がしくなった。怒号怒号怒号の足音。大勢が侵入者を探して走り回っているのだ。その足音を聞いた二人は近くにあった教室のドアを開けて乗り込んだ。

急に扉を開けられた教師及び生徒一同は視線を一気にカーシャとその配下? に注がれた。

カーシャは生徒たちに片手の手のひらを向けて魔力を貯めているのを見せ付けた。

「動くな!!!」

教室ジャックだった。生徒たちは動きを止め言葉を失う。だがこの場で一番唾然としてしまったのはルーファスだった。

「……な、なんてことするの!? 人質取ってどうするの、私た

「ちはただハルカを元に戻すために来たんでしょ、騒ぎを起こしてどうすんの!？」

「ふふ……ハルカのこととは二の次だ（まずは私の復讐からだ）」

この会話を携帯用ベットハウスの中から聞いていたハルカの表情が曇る。中からは外の様子が見えないので余計に不安が募る。

「（……もしかして、外はすごいことになってるの?）」

『もしかして』ではなかった。すごいことになっていた。

この教室にいた女教師は新米らしく、カーシャとの直接の面識はなかった。だが、この学院ではカーシャとそのオプシヨンのことは有名で、この新米教師にも二人の侵入者が誰なのかわかった。

「カーシャさん……あの物騒な真似はよしていただけませんか？

（な、なんでよりによってこの教室に……（泣）」

新米教師就任以来最大の危機だった。

カーシャが新米教師に視線をふと向け、生徒から気をそらした瞬間、生徒の一人がカーシャに向けて魔法で作ったエネルギー弾を発射した。だが、この場においての勇氣ある行動は全体の命を危険にさらす。

エネルギー弾はカーシャの手の甲によって軽く弾かれ教室の天井に穴を開けた。穴の空いた天井から見える青い空を見上げるカーシャの口元は歪んでいる。

「ふふ、私に撃つたのはおまえか?（ピンクのブタの刑だな……

…ふふ」

氷のように冷たい目をしたカーシャは、彼女に魔法を放った生徒の瞳を見つめてあることを念じた。すると見つめられた生徒の身体は見る見るうちに縮んでいき、その身体はピンクの短い毛で覆われて、周りの者たちが声を上げた時には、ピンクのブタに変身してしまっていた。

「他にブタにしてほしいものはいるか？」

生徒たちは一斉に横に首を振った。そして、なぜかルーファスもおびえた表情で首を横に振っていた。

ちなみにネコになったハルカに人間になる魔法をかけることも可能だが、それは根本的な解決にはならない。カーシャのこの魔法は時間制限があり、時間が経てば元の姿に戻ってしまうのだ。それに見た目はピンクのブタでも中身は人間であって、ハルカに魔法をかけた場合は、中身が猫で見た目が人間となる。着ぐるみを着ているのと変わらない。

壁の碎ける爆発音を聞きつけた男の教師が教室に乗り込んできた。この男全身黒尽くめである。

「うるさい！ 私の授業を妨害するのは誰だ！！（……カーシャ？）」

教室に怒鳴り込んだのは隣りの教室で悪魔召喚の実習授業を行っていた、ヨハン・ファウストだった。

カーシャとファウストの間でピリピリした空気が流れている。しかも運の悪いことにルーファスは二人のちょうど真ん中に立っていた。

「（……ついてない）」

そうルーファスはついてない。

ファウストの身体からは目でもわかる黒いオーラが悶々と出ている。カーシャからも目には見えないが肌で感じられる冷たいオーラが出ていた。まさに只今一色触発中だった。

本能で今までに無いほどの危険を察知した新米教師及び生徒たちは、そーっと、できる限りにそーっと、音を立てずに教室を出て行った。だが、この場に取り残された人物がいる。言うまでも無いルーファスだ。

「（……な、なんで私を置いてみんな逃げるのぉ〜!?）」

可哀想なことに二人のトンデモさんに挟まれたルーファスは身動き一つ許されなかった。

不幸なことにルーファスが動けないということは、ペットハウスの中にいるハルカも動くことができない。しかもハルカには外の状況がわからない。

「（な、なに、この嵐の前の静けさみたいなのは!? やな雰囲気気がするんだけど……）」

不安でいっぱいになるハルカ。だが彼女は無力だった……ネコだからね。

ネコでなくとも、この場では誰もが無力だった。

沈黙が続いていたファウストが口を開いた。

「ひさしぶりですね（まさか、ここで再びこの人に出会うとは）」

「ファウスト先生も相変わらず黒でシックに決め込んでいるな

……
……（腹の中身も真っ黒だ）
再び沈黙が始まる。

第四話 大暴れしちゃいました

緊迫、そして沈黙。

カーシャVSファウストの構図がわかりやすく出来上がっている。

その二人に挟まれてしまったルーファス+ネコー匹。彼らの方が明らかに焦っている。特に冷や汗をかいているルーファス、焦りすぎ。

「カ、カーシャもファウスト先生も仲良くしてください（巻き添えで殺される！）」

空気がキン！と冷えた。カーシャの瞳は妖々と冷たく輝いていた。

「ふふ、まだ……（まだ、何にもしてない）」

ファウストの周りの空気が圧縮され、一気に解放たれることにより風が巻き起こった。教室に吹き荒れる強風にルーファスは反射的に顔を腕で覆った。

強風で筆記用具が空を飛び、椅子がガタガタ揺れ動き、備え付けの机までが軋む中、カーシャとファウストだけは平然と立っていた。しかも、ファウストは不敵な笑みを浮かべている。

「私たちはまだ何もしていませんよルーファス。ねえ、カーシャ先生？」

その場で身動きできないルーファスは思った。

「（思いつきりしてんじゃんー）」

ルーファスのそんな思いなんてどうでもよく、新たな波が押し寄せようとしていた。そっちの方が大事だ。

無表情でファウストを見ていたカーシャの眉がピクツと動いた。

「ファウスト先生。私はもう”先生”ではない（……ワザとだな……ふふ、おもしろい）」

「なるほど、そうか今は先生ではなくて、”ただの”一般人だった、これは失礼。カーシャはここを”クビ”になってから非法の魔導シヨップをやっていたらしいですが、今は営業停止らしいですね。困ったことがあるならいつでも相談に乗りますよ」

そう言いながらファウストは鼻で笑った。完全のカーシャを見下していた。

だが、ルーファスにしてみれば、二人は同じ穴のムジナ。どつちもどつちだった。

今ここにいるムジナは互いのことを見下している。自分の方が格が上だと思っている、そーゆー人種だった。

部屋の空気が一層冷たくなつたような気がする。　気のせいではないようだ。ここにいる巻き込まれちゃったルーファスはそれに気付いた。

「あ、あの……教室に霜が……（気温が〇度切ってるってことでしょ？）」

ガタガタと寒さと”何か”で振るえ始めたルーファスの言うとおり、教室の壁や床には霜が発生していた。その発生源は言

うまでも無いカーシャを中心にしてだ。

カーシャの眉がぴくつと動いた。その瞬間、床、壁、そして天井から巨大な氷針が幾本も突き出した。

「はぶっ！！（な、なに!?!）」

ルーファスはあられもない声を上げて、紙一重で氷の刃を『つ』や『大』の字になったりして避ける。そして、氷に挟まれて『と』の字になって動けなくなってしまった。冷や汗も凍ってしまっている。

カーシャとファウストは氷の刃が顔すれすれ数ミリのところを通るが、顔色ひとつ変えず身動きも全くしていなかった。

氷が少しずつ溶け始めた。この現象の中心はファウストだ。彼の身体から漆黒の炎がオーラとして放たれているのだ。

嫌な戦い方だ。微妙でネチネチしているし、直接攻撃は微妙だがまだない。だが、ファウストがついに仕掛けた。

「そうだ、カーシャに貸した一〇〇〇ラウル返して貰ってないのですが、返済期限が切れているのはご存知でしたか？（契約の名のもとにカーシャを冥府に送ってさしあげますよ……クク）」

ちなみにラウルとはこの国で使われているお金の単位で、一〇〇〇ラウルを日本円に換算すると一万三〇〇〇円になる。

「一〇〇〇ラウル、知らんな（……ちっ、覚えていたのか）」
カーシャは確信犯だった。確実に借りたお金を踏み倒す気だつたらしい。

「シラを切っても意味はありませんよ。ここにちゃんと契約書

があります（シラを切るのは予想済みだ）」

そう言つてファウストは、どこからともなく契約書を出し、カーシャに見せ付けた。その一節にはこう書かれている、『契約を破つた場合は魂を持つて償う』と。つまり、契約を破つたカーシャは殺されるということだった。

契約書を見たカーシャはしばし沈黙。

「……………（焼くか）」

沈黙して考えた結論はわかりやすかった。『焼く』、つまり、契約をなかつたことにする気だった。

カーシャの右手がスゴイスピードで動いた。

「ルーファス避ける！」

「えっ!？」

行き成り避けろと言われても、そう避けられるものでもない。カーシャは声と同時に炎の玉を放っていた。それは契約書の向かつて放たれたものだったが、途中の障害物に見事ヒツト!

「あちいっ!！」

ルーファスが炎上。炎の玉はルーファスの服に引火してしまつた。すぐさま彼は床にへばりついた。それはなぜか？ 床は氷が溶けて水浸しになつていたからだ。

シュっつという音を服から立てながら立ち上がるルーファスを見てカーシャが小さく呟いた。

「ちっ……外したか（契約書を燃やしてしまおうと思つたのだ）」

言うまでもないが、カーシャは自己中である。

「契約書を燃やそうとしましたねカーシャ？　そういうことをする子はお仕置きですね（クク……悪魔でも呼び出しましよっ）」

悪魔の笑みを浮かべるファストの持つ契約書が風も無いのに揺れた。それも激しく、激しく揺れ、中から巨大な影がこの世界に召喚された。

契約書の中から現れた悪魔は、赤黒い身体を持ち、丸まった背中から漆黒の翼を生やし、金色の目でカーシャをギロギロと見ていた。

危険を察知したルーファスはしゃがんだ。彼の判断は正しかった。カーシャの口元が歪んだ。

「ホワイトプレス！！」

氷系の高位魔法をぶつ放した。カーシャは教室内で強力呪文をぶつ放したのだ。

ブオオオツツ！！　濃縮された吹雪が悪魔に直撃！　悪魔凍る。おまけにルーファスの心も凍る。

「カ、カーシャ……なにすんだよ……（死ぬかと思ったあゝ！！）」

だが、ルーファスに言葉にはカーシャは何の反応も示さず、その場から消えた。次にカーシャが現れたのは凍ってしまった身動き一つしない悪魔の目の前だった。

「ふふ、儂く散れ！」

カーシャの回し蹴りが悪魔に炸裂！　粉々に砕け散る悪魔。

砕け散った氷が煌くその先でファウストは微笑していた。

「なかなかやりますね。ですが、カーシャが死ぬまで悪魔はいくらでもですよ。早く一〇〇〇ラウル返したほうが身のためですよ（私としては、このほうがおもしろいですがね……クク）」

「一〇〇〇ラウルなんて借りた覚えは無い！！」

カーシャはきつぱりはつきり断言した。『嘘は認めたが最後』これがカーシャの信条だ。

契約書が激しく揺れ、中からたくさんの影が召喚された。

「覚悟なさいカーシャ！！」

「ヤダ」

室内は只今、ホラーハウス状態。悪魔で満員だった。

カーシャ逃げる準備OK。

「逃げるぞルーファス！！（流れ解散っ！！）」

カーシャは自らに運動能力を一時的に二倍にするクイックという呪文をかけて走り出した。ルーファスも逃げる必要はないように思えるが、クイックで逃走。

廊下を走り抜けるカーシャとルーファス。

ルーファスが走ると、持っているペットハウスが激しく揺れる。中にいるハルカは当然ご立腹。

「ルーファス！！ もっと丁寧に運んでよ！！（………つたく、何が起きてるのよ？）」

「ハルカごめん、追われてるから」

「（追われてるっ？）」

廊下を走る二人の後方からは大勢の悪魔が追いかけてきていた。

カーシャは後ろの悪魔に向けて魔法を連発。廊下の壁や床は大変なことになるが、悪魔の数はいつこつに減らない。

外の大騒ぎに気付いて教室にいる生徒たちは廊下の外を見るが、皆直ぐに見なかつたことにする。なぜなら、悪魔たちを従え先頭を走っているのがファウスト先生だったからだ。この先生がすることに関わってはいけない。これがこの学校を”無事”に卒業するための暗黙のルールだった。

ルーファスたちを捕まえようとしているのはファウストだけではなかつた。彼らの名は風紀委員、学校の風紀を乱す者を罰するのが役目である、生徒たちの集まりだ。

風紀委員がルーファスたちの前に立ちはだかる。その数一人ほど。

「止まりなさい！！」

風紀委員が叫ぶが、当然カーシャの性格を考えればわかるが、止まるわけが無い。しかも、今日のカーシャはご機嫌だった。

「ふふ、おもしろい……今度はピンクのうさぎしゃんだ！！」
カーシャは風紀委員たちを”視た”。魔力のこもった瞳で見つめられた風紀委員は次々にうさぎしゃんのぬいぐるみにその姿を変えていった。しかも、このうさぎしゃんのお人形、動いてしゃべることもできるらしい。

「うわあ、にげるおー！！」

プリティなピンクうさぎしゃん人形は、ピョコピョコ歩いて

いるのだが走っているのだがわからないような動きで逃げた。

「ふふ、可愛い」

カーシャはうさぎしゃん好きである。自分より魔力の弱い者であれば簡単にくさぎしゃんに変えられてしまうのだ。

後ろからはファウストが引き連れる悪魔たちが追いかけて来ている。その数は明らかに増えていた。

カーシャが突然立ち止まり後ろを振り向いた。ルーファスもちよつと先で立ち止まりカーシャを見つめた。

「どうしたの？（聞くまでもないような気がするけど……）」

「逃げていてもラチがあかない……ふふ、殺るぞ（力を使う時が来たな）」

「やるって、手荒なマネは止めたほうがいいと思うけどなあ」（って言っても無理だよな）」

「ふふ……（滅却）」

滅却ってカーシャちゃん、何する気ですか！！

カーシャは自分の両耳にしていたイヤリングを外した、刹那、カーシャの身体が蒼白き光を発し始めた。その輝きは冷たく辺りを包み込み気温をぐつと下げた。

そして、カーシャの瞳は黒から蒼に変わり、唇は赤から紫に変わり、髪は漆黒から白銀に……。ルーファスは驚愕した。

「なんで、その力を使えるの!？（だって、その力を使ったら、カーシャは……）」

「ふふ、魔王のmanaを喰らってやったのだ。私はチカラを取り

戻した！！」

カーシヤは大魔王ハルカとの戦いにおいて、魔王のmanaを吸収し自らのチカラとしていたのだ。そのためカーシヤは、“以前”のチカラを取り戻すとともに水と化してもなお生き残ることができたのだった。

走るようにして廊下が凍り付いていった。カーシヤを追いかけてきていた悪魔たちも次々と凍り付いていく。その中でファウストだけが漆黒の炎を身にまとい平然と立っている。

「ほう、カーシヤの真のチカラですか、それは？（……少々厄介だ）」

カーシヤ 砲撃準備OK！

manaがカーシヤの身体に集められていく。もう誰も止められないのか？

「カーシヤいい加減にしてよ！！」

ドゴ！

「あうっ！！」

「ぐっ！！」

ゴオオオツツツー！！

説明しよう。まず、カーシヤは学院ごとぶっ飛ばすぐらいのmanaを貯めて撃とうとした。それをルーファスが止めた。その止め方というのが、持っていた物でカーシヤをぶん殴ったわけなのだが……持っていた”物”、そうペットハウス。ルーファス ペットハウスでカーシヤ殴る。その時の効果音が『ドゴ！』、そして、ペットハウスの中にいたハルカが『あうっ！！』と叫ん

で気絶。殴られたカーシャは『ぐっ！』と言ってバランスを崩しボタンと床に倒れた。撃とうとしていた魔法を中途半端なまま、天井を突き破り上空に放たれた。以上説明でした。

床に大の字で倒れたカーシャの髪の毛の色は元に戻っていた。打ち震えるカーシャは何かを小声で言っている。

「……ル……ファス……（死！）」

気迫とともに立ちがるカーシャ。その目はキラっていた。

氷ついた廊下に残されたファウスト&ルーファス&一匹。緊張が張り巡らされる。

無言でお得意の不敵な笑みを浮かべるカーシャの手が動いた。動いた！ 動いた！ そしてまた動いた！！

カーシャの手から放たれる氷の刃がそこら中に突き刺さる。ルーファスは紙一重で避けるが、明らかに刃はルーファスに向けて放たれている。

「カ、カーシャ、落ち着いて！！（殺されるう〜）」

「ふふ……（死！！）」

キラちゃったカーシャの容赦ない攻撃は続く。狙われているのはルーファス。ファウストはただ見ているだけで何もしようがない。

「（クク……おもしろい光景だ）」

この人は心の中で楽しんでるようだ。

氷の刃に追われ逃げるルーファスは、凍りついた廊下をツツと滑りファウストの前まで来て助けを請う。

「ファウスト先生助けて！！」

「私に助けを請うか……契約を交わすならよからう」

「ええ、助けてくれるならなんでも（……いや、何でもはマズイ、この先生と契約を交わすのはマズイかも）」

「よからう、私がおまえを助ける代わりに、ハーピーの羽を代償とする。これが契約書だ」

ファストはどこからともなく契約書と羽ペンを出し、ルーファスに突きつけた。

「（ハーピーの羽か……）」

ハーピーとは海に棲む鳥人で、その美しい歌声で船乗りたちを惑わす怪物だ。この羽を取って来るのはなかなかの至難の業である。だが、カーシャから身を守ると考えると安い物だった。

ルーファスは羽ペンを受け取り、契約書にサインをした。

「クク……契約成立だ。契約を破った場合は命を代償とするから覚えておけよ」

実際はルーファスの寿命は少し延びただけかもしれない。だがルーファスには選択の余地はなかった。

カーシャが口元だけ笑っていて、あとは無表情というカーシャスマイルを浮かべながら、ゆっくりとルーファスの元へ歩み寄ってくる。

「ルーファス、私を殴った罪は重いぞ（……ふふ、こゝんなことや、あゝんなこと、そゝんなことをした拳げ匂にピンクのクマしゃんに変えてやる！）」

善からぬことを考えるカーシャの口元はいつも以上に歪んでいた。だが、ルーファスがあの時カーシャをぶん殴っていなけ

れば、死傷者が多数出たことは明白な事実だった。

ルーファスをさつと押しつけファウストが前に出た。

「契約の名の下にカーシャ、あなたを冥府に送って差し上げますよ（THE END）」

「ふふ、なかなか言うなファウスト。おもしろい……私に勝てる気なのか？（こいつはピンクのチンパンジーの刑だ）」

「勝てない勝負はしませんよ（歳を誤魔化しているような、おばさんには負けはしない）」

「それは奇遇だ。私も勝てない勝負はしない主義だ（黒尽くめの服から心の中まで真っ白に凍らせてやる）」

先手必勝、いつでもカーシャは最初に仕掛ける。彼女の身体から、レイビームと呼ばれる魔法が放たれた。

レイビームは白く長い帯のように幾本も発射され、蛇が身体をくねらせるようにしてファウストに喰らいつくが如く襲い掛かる。

ファウストは魔法で防護壁を作りそれを難なく防ぐ。この時点では互いに本気を出していない。レイラとアイラと呼ばれる簡単な魔法しか使っていない。

だが、今度はファウストが仕掛けた。しかも、ライラと呼ばれる強力魔法で。

「ダークフレイム！（魂をも焼き尽くせ）」

漆黒の炎が渦を巻きカーシャに襲い掛かる！カーシャはそれを魔法を放って打ち返そうとする。

「ライトクロス！（小癩な！）」

雷光が漆黒の炎を突き抜けかき消し、そのままファウストに襲い掛かる！　だが、ファウストは臆すること無く呪文を唱える。

「デュラハンの盾！（甘いですよ）」

雷光は魔法壁に弾かれ廊下の壁を突き抜けどこかに飛んでいってしまった。きつと、どこかで被害者が出たに違いない。

二人の戦いは終わりそうになかった。　だからルーファスはそーつと逃げることにした。この時ばかりはカーシャ以上の忍び足で……。

後ろから爆発音が聴こえ、爆風が背中を押すがルーファスは決して振り返らなかつた。何が起ころうとルーファスはもう他人のフリ、巻き込まれるのはごめんだつた。

ルーファスがいなくなつたことにも気付かず二人の戦いは加熱し続く。だが、ルーファスには関係ないことだ。彼はもう自由と言う世界に羽ばたいたのだから。

第五話 人間になりたあゝい！

戦場（カーシャVSファウストの現場）から、そーっと逃げ出したルーファスはある先生の研究室のドアの前に立っていた。その横には携帯用ベツトハウスから出たハルカがいる。

ルーファスが魔導学院に着た理由はハルカを元の姿に戻すことと、元の世界に戻すための手がかりを見つけるためである。

カーシャは暴れに来るのがメインだったみたいだが……。

今ルーファスの前にあるドアに思いを馳せるルーファス。ドアフエチなのではなく、思い出があるからだ。

「学生時代このドアを壊して、パラケルスス先生のホムンクルス盗みに来たんだよ（あの時は大変だった）」

「器物破損に窃盗、ルーファス昔はワルだったの？（意外だなあ）」

「ち、違うよ！ ドア壊した（蹴破った）のはローゼンクロイツっていう私の友達だし、ホムンクルスを盗んだのも理由があつて……カーシャに盗むように言われたから……」

昔からルーファスはカーシャにいいように使われていたらしい。つまり学生時代から、ルーファス<カーシャの構図ができていたということだ。ルーファスかんばれ！

「ところで、そのホムンクルスって何？」

「ハルカを元の身体に戻すことができるかもしれない魔導具、詳しくは中で話すよ」

コンコンとノックをしてルーファスは部屋の中に入った。

「失礼します」

とお辞儀をして、ルーファスが顔を上げるとそこには初老の男が立っていた。

「おお、ルーファスか、久しぶりじゃな」

笑みを浮かべる老人にルーファスは近づき握手をした。

「お久しぶりです、パラケルスス先生」

「魔導の勉強は今もちゃんとしているのかね？（実力ならば、学院でもローゼンクロイツの次じゃったからな）」

「もちろんです、でもまだまだ力不足で苦労してますけど…

…」

そう言つてルーファスはドアのところにもちよこんと座つているハルカを見た。

「あの猫がどうかしたのかね？」

「それがですね……。ハルカちよつと来てくれるかな？」

しなやかな足の運びでパラケルススの前まで来たハルカは頭をちよこんと下げて挨拶をした。

「こんにちわ、ハルカつていいます」

パラケルススはハルカをじーっと”視て”それがなんであるのかを言い当てた。

「ふむ、今は猫の姿をしているようじゃが、マナは人間のものじゃな？ どういうことが説明してくれないかね？」

ということからルーファスは、ハルカを異世界から召喚してしまったことから、大魔王になって大暴れ、終いにネコにな

ってしまつた経緯を全部一通り話して説明した。

初老のパラケルススは深くうなずくと、

「それでわしはなにをすればよいのじゃ？（察しはついておるがの）」

「先生にはハルカのホムンクルスを作つて貰えないかなと……？」

ハルカも熱い眼差しでパラケルススを見ている。だが、ハルカはホムンクルスがなんだかわかつていない。

期待は裏切られるとシヨックを受ける。

「この子のホムンクルスを作る材料が一つだけ手に入らなでな。ホムンクルスは作れんのじゃ」

「ああ、やつぱり（肉体が減びてるもんね）」

「ええ〜っ！！」

ハルカだけシヨック！！

シヨックは受けたが、まだハルカはホムンクルスがなんだかわかつていない。

「ところでホムンクルスって何？（なんとなく話し合わせてたけど）」

「え〜と、ホムンクルスっていうのは……先生、説明お願いします」

ルーファスは困るとすぐに近くにいた人を見つめて助けを請う習性がある。助けを求められたパラケルススは大きなガラスの筒を指差した。

部屋に幾本もあるガラス管の中は液体のような物で満たされ、

下から小さな気泡が上へ上がっている。そして、時折大きな泡が人の形をした物の口から吐き出される。

ホームンクルスを見たハルカは至極もつともな見たまんまの質問をした。

「人間？（人体実験!?）」

「あれがホームンクルスじゃ。簡単に説明すると人間の形をした入れ物じゃな」

人間の入れ物と説明されて、ハルカようやく納得。

「ああ、なるほど。そのホームンクルスで私の身体を作って入るのか……でも、私のホームンクルスを作れないってどういうこと？」

ルーファスは最初からわかっていたらしく、簡単な説明を始めた。

「ハルカのホームンクルスを作るには、ハルカの肉体の一部が必要なんだよ、でも、肉体もないからね（パラケルスス先生ならどうにかなると、思ったけど無理か、やつぱり）」

ハルカシヨック！

「やつぱり、人間に戻れないの？ あのださあ、今思ったんだけど、ネコじゃなくてそっちのホームンクルスに移してくれるかな？（人間のほうが動きやすいし）」

「それは止めておいたほうがよいな」

ハルカの意見はパラケルススに即答で弾かれた。ちょっと納得のいかないハルカはパラケルススに詰め寄った。

「どうしてなの？」

「マナ移しの儀は大変難しい魔術でな、移された本人のマナに過度の負担を与え、それに加え君を猫の身体に移せたのは奇跡に近い。つまり、何度もマナ移しの儀をすることはお勧めできないのじゃ」

「そうなの？（つてカーシャさんは簡単にやってのけたけど、もしかしたら失敗してかかもしれないってこと……つてことよりも、だったら最初から人間の身体に入れてくれればよかったのに！」）

人間の身体ではなくネコの身体に入れたのはカーシャの趣味と言えばそれで終わってしまうが、本当の理由は急を要していて、完全な状態で保存してある肉体がネコと出目金しか手元になかったからだ。完璧な保存状態でない肉体を使うと儀式に失敗する可能性が高くなる。

もうハルカは大ショックだった。人間には戻れないし、元の世界にも帰れないし……。

「もう、一生この世界でネコとして暮らすのか……（お母さんとお父さん、友達……みんな心配してるよね）」

目に涙をにじませるハルカを見てルーファスは何も言えず、パラケルススは何か言い方法がないかと一生懸命頭を悩ましている。

「髪の毛一本でもあればよいのじゃが……」

パラケルススの言葉を受けてルーファスが意識せずにハルカに止めを刺した。

「私の家の周辺は全部一度倒壊してしまったから、髪の毛すら

残ってないな……」

ハルカ的大シヨック!! ルーファスの発言、それは絶対人間に戻れませぬ宣言をハルカに突きつけたのと同じだった。

「（どうせ、私は一生ネコのまま……）でも、せめて元の世界に戻りたいな……元の世界に……元の世界の私の部屋だったら私の髪の毛一本くらい落ちてくるかも?（望みは薄いけど）」

ワラをも掴むような発言だった。たしかに髪の毛一本くらいなら落ちてくるかもしれない。

元の身体に戻る手立てが絶たれてしまった以上、今は元の世界に帰ることだけでも……ネコのみまで?

ルーファス&ハルカはいいアイデアをもらうべく、パラケルススのほうを同時に振り向いた。

「ハルカを元の世界に戻す方法ありませんか?」

「お願いします!」

お願いされてもパラケルススは困ってしまった。パラケルススは今学院の教頭をやっているほどの魔導の使い手だ。しかし、それでもできないことは山とある。魔法は万能ではない。

「わしにもこの子を元の世界に送り返す手立てはわからない。普通の召喚だったらできるだろうが、どこの世界との知れない住人となれば話は別じゃ」

「ルーファス帰る。パラケルススさんがとうございまして」

ガツクリと肩を落としたハルカは重い足取りで部屋を出て行ってしまった。

「待つてよハルカ！」

「力になれんで悪いな」

「いえ、ありがとうございます」

ルーファスはパラケルススに頭を下げて急いでハルカを追った。

騒がしい廊下を一匹とぼとぼと暗い影を背負いながら歩いているハルカ。その後ろからペットハウスを持ったルーファスが追いかけてきた。

「ハルカ待つてよ！」

「お腹空いちやつたよねえ」（はあ、私にはどうしょーもないもんね、考えるだけ無駄、無駄）

「お腹空いた？ まだ夕飯には時間あるけど？」

「わかつてないな、まあルーファスは鈍感だから」

「私が鈍感？」

「いいの、気にしない気にしない。人生もつと明るくいかなきやね！（周りに励ましてもらおうなんて駄目だよ。自分が明るくならなきゃ）」

とそのとき突然、ドカ〜ンという轟音が響き天井が崩れ落ちて、青空とそこを飛ぶなにかが見えた。

「あっ」

二人の声が重なり、二人の視線は同じ方向に向けられていた。青空を飛び交う二つの物体。よく目を凝らして見るとそれがなんだかわかってくる。カーシャとファスト。

口をポカンと開けながらルーファスは他人事のように呟いた。
「まだ、戦ってたんだ（そうだ、ハーピーの羽取りに行かなきゃ）」

「ペットハウスの中にいてイマイチ状況がわからなかったけど……あんなことになってたんだ」

息をひと吐きしてルーファスは上空で起きていることを見なかったことにした。

「さてと帰ろうか（他人のフリ）」

「そうだね（他人のフリ）」

ここでまたカーシャに関わるとロクなことがないと判断した二人は足早に学院をあとにすることにした。

学院を出る前に事務室に行つて腕にした腕章を取つてもらわなくてはいけない。

「あの、腕章取つてもらえませんか？」

ルーファスの呼びかけで出てきた事務のお姉さんは最初に会つた人とは違った。最初の事務員はまだ意識を失つて倒れている。

「騒ぎが治まるまで、誰も学院から出さないようにと言われていました……」

「でも私は無関係だし、早く家に帰りたいなあ……なんて……（無関係……じゃないけど）」

無関係とは言いがたい、ルーファスは先ほどまで事件の中心にいたのだから。

できる限り早くここから逃げたいルーファスは事務員になん

ども詰め寄るが、事務員は決して首を縦には振ってくれなかった。そこにある人物が姿を現した。

空色の生地白いレースをあしらったドレスを着た美しい女性がルーファスを無表情で見つめた。お嬢様オーラが全身からでていた。

「へっぽこルーファス久しぶり（ふにふに）」

ゆったりとした口調で、透き通るような、そこに無いような声色だった。

この空色のドレスを着ている人物はルーファスの昔からの知り合いのクリスチャン・ローゼンクロット（ ）。そう、見た目と声質はお嬢様だが男である。

ローゼンクロイツは事務員に近づくと身分証明書を提示した。そこには国務執行官、それも執行官長と書かれていた。

国務執行官とはこの国のエリート中のエリートがなれるという職業で、犯罪の取り締まりから他国との外交などなど、国務の中でも現場に赴く仕事を中心にするエリート集団である。

事務員は慌てた様子で背筋をピンと伸ばした。

「存じております。未成年で国務執行官長になられたローゼンクロイツ様ですね（本学在校中は手におえない問題児の天才魔導士だったって聞いたけど……）」

「そこにいるルーファスは、ボクの方で身柄を拘束することになったから、連れていくよ？（ふに？）」

「あ、はい、どうぞ」

機会のような正確な歩調でローゼンクロイツはルーファスの

前まで来ると、ルーファスの腕に付いていた腕章を手でなぞるようにして簡単に取ってしまい、

「行くよ（ふあふあ）」

と言つてルーファスの腕を掴んだ。

「え、なに？ 捕まったの？（犯罪者なの？）」

「……拘束（ふっ）」

この言葉を発した一瞬だけ、冷めたような目をしての口元だけが少し歪んだ。ルーファスを少しバカにしているような態度だった。そして、すぐに無表情に戻る。

ペットハウスの中にいるハルカはやはり外の状況はイマイチわからない。

「（ルーファスが身柄拘束!? えっ、もしかして私も連れて行かれるの!?)」

ローゼンクロイツに腕を捕まれてルーファスは啞然とした表情を受けべてしまっている。たしかに連れて行かれる心当たりは沢山ある。が、どれが理由で連れて行かれるのかわからない。

「あ、あのさ、何で私がローゼンクロイツに連れて行かれなさいいけないの？ いや、心当たりは山とあるけど……（これとか、これとか……ホントに数え切れない）」

「学院を出てからゆっくり話そう（ふっ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。これは彼のクセのようだ。

「拘束って？ 私は犯罪者扱いなの？（たしかに……否定はできないけど）」

「……それはどうか？（ふっ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。
「な、なんなのその意味あり気な表情は!?（いつに捕まるのか……ライラの写本盗んだこと、大魔王のこと、住宅街吹っ飛ばしたこともあったな……）」

「行くよ、ある意味力づくでね（ふにふに）」

ローゼンクロイツの腕が何かを振り払うような動き　正確には何かを飛ばすような動きをした。その手から光のチェーンが放たれルーファスの首に巻きついた。

「……捕獲完了（ふにふに）」

ぐぐつと首輪のひもを引つ張られてルーファスは強引にローゼンクロイツに連れて行かれる。

「あ、待って、なんで、なんで連れて行かれるの?」

「……どうしだらうね?（ふに?）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。
ズルズルと引きずられていくルーファスとローゼンクロイツに事務員は深くお辞儀をして見送った。

第六話 性格悪いでしょ？

心当たりはあるものの結局のところわけのわからないまま、ルーファスはローゼンクロイツに首輪を引つ張られて学院の外にある噴水広場まで連れてこられてしまった。

学院から離れるとどっかの誰かさんたちの戦いが手に取るようにわかったりする。バ〜ン！ ど〜ん！ ドオオオツ！！
ぴゆるる〜っ！！ 上空では激しい戦いが繰り広げられている。勇敢な人々が二人を捕まえようとしているみたいだが、ピンクのうさぎしゃんのお人形が上空から落下している。もう二人は誰にも止められないのか？

目を凝らしてルーファスが学院上空で繰り広げられている激闘を見ていると、突然グツと首輪が引つ張られた。

「はぶっ！！（苦しい）」

「よそ見していると引つ張るよ（ふーっ）」

言うことを聞かない飼い犬の鎖を引つ張るような態度のローゼンクロイツ。しかし、言い方はゆつたりとした口調で、ふあふあ〜とされていて、しかも無表情だった。

首元を摩りながらルーファスはローゼンクロイツのことを横目でチラッと見た。

「引つ張る前に言おうよ、そういうことは（ホントに首絞まるかと思っただ）」

「えっ、ウソ!? 言う前に引つ張ったつもりだったのに、手の

ほうが早く動いたらしい……自分の身体能力に驚き（ふにふに）」

「そういう原理なの？（今、自分でもよくわからない発言しちやったよ）」

ペットハウスがガタガタと揺れた。ハルカの外に出してよコールだ。ルーファスはしかたなくペットハウスを石畳の上に降ろして扉を開けた。

ペットハウスの中から出てきたハルカは前足を伸ばして伸びをしながら欠伸をした。このポーズはいわゆるヨガとかでいう猫のポーズってやつ？

ぶるぶると身体を震わせ姿勢を正したハルカとローゼンクロイツの視線が重なった。

「（思いつきり見てるよこのお嬢さん風の人）」

ハルカはローゼンクロイツが男だということを知らない。

全てを見透かしてしまいそうなエメラルドグリーンの瞳がハルカを見つめる。見つめられるハルカはあることに気づいた。

ペンタグラム（五芒星）の形　ローゼンクロイツの瞳にはペンタグラムが映っていた。

「（変わった瞳……？）」

「君、ボクの瞳のこと変わった瞳だなんて思ってる顔しているよ（ふあふあ）」

「（げっ、なんでわかったの？）」

なぜわかったかという以前にローゼンクロイツが猫に普通に話し掛けている光景の方が問題あると思うが……？　もしかし

て、ローゼンクロイツはハルカが本当は人間だということをそのペンタグラムの瞳で見透かしているのか!?

ローゼンクロイツは異常なまでに鋭い、もしかしたら人の心が読めるのではないかとルーファスは考えている。でルーファスはすばやく行動に出た。

「あのさ、ところでなんで私が連行されなきゃいけないかったの？（話を反らせよう作戦！！）」

これ以上ハルカに興味をもたれるのはマズイと思いルーファスはローゼンクロイツの気を反らせることにしたのだ。

「そうだ、忘れてた（ふにゃ）」

「そうだよ、私が連れて行かれる理由を話してくれなきゃ（…）
…どうやら、話がコツちに）」

「これ人間（ふあふあ）」

衝撃の一言にルーファスショック！　ローゼンクロイツの指差した方向には百歩、いや千歩譲つてもハルカがいた。

話をうまく反らせたと思っただけにルーファスのショックはひとしおだ。

「え、なにが？（なんでわかるの？）」

なんでわかるのと聞くまでも無い。高位の魔導士であればハルカが人間であることをマナを感じて、もしくは《視る》ことによつて簡単にわかつてしまう。現に魔法剣士エルザやクラウス魔導学院教頭パラケルススもすぐにハルカが人間だとわかつたではないか。

「…：…これでも国務執行官長だから（ふん）」

「……（そうだよね）」

そうです。ローゼンクロイツは学院生時代はルーファスとは違つて自他ともに認める学院でも一・二を争う魔導の使い手、そんな人がハルカが人間であることを言い当てないはずがなかった。

「それはさておき、なんでボクがここに来たのか、そしてなぜルーファスを捕まえたのか聞きたいよね？（ふあふあ）」

「（さておいちゃうの？）だから、ず〜つとなんでか聞いているでしょ？」

「えっ、ウソ!? そうだったの!？（ふにふに）」

今まで見せなかつた驚いた表情というものをしてすぐに無表情に戻る。これで彼の表情パターンは三パターン披露された。

「ずつと言つてたでしょ？（人の話聞いてないなあ〜）」

「……冗談（ふっ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。この発言にルーファスは思わずまぬけな表情をしてしまった。

「はい？」

「ず〜つと言つてたの知ってるよ（ふっ）」

二人の会話を近くて見て聞いているハルカは思った。

「（この人もしかして、性格悪い？ てゆーか電波系って感じ?）」

とハルカが心で思った瞬間ローゼンクロイツがハルカを一瞬見て、無表情な顔についた口が一瞬だけ歪め、すぐに無表情に戻した。

「そんな不思議な知的生命体を見るような目でボクを見ないでよ（ふにふに）。あ、そんなことより、ボクがルーファスを連行した理由だったね。うん、二割引きバージョンで手短に話してあげるよ。あれ（ふにふに）」

ローゼンクロイツの指の先　上空では今もどつかの誰かさ
んたちが激しい戦いを繰り広げていて、時折、黒き炎や氷柱が
地面に飛来していた。下にいる人々は大惨事、とんだとばっち
りだ。

「本当はあれらを連行するように言われたんだけど……こつち
のほうが気になってね（ふにふに）」

そう言っつてローゼンクロイツはハルカを見た。見られたハル
カは一瞬ビクッとして後退り、身を縮めた。

「（あの瞳ちょっと不思議で恐い感じがする）」

「えっ？　私を連行したかったわけじゃないの？（……会っつ
てすぐにハルカのことバレてたのかな？）」

てつきり捕まるのだと思っつていたルーファスはちよつと拍子
抜けしてしまつた。

「学院で暴れてる奴を連行するように言われたけど、このネコ
の方がおもしろそうだったからね（ふあふあ）」

そう言っつてローゼンクロイツは普段は絶対見せることの無い
笑顔を浮かべてハルカに手を差し伸べた。でも笑顔はすぐに無
表情へと変わる。

「ボクの名前はクリスチャン・ローゼンクロイツ。君の名前は
なあに？（ふあふあ）」

「私の名前はハルカ。今は猫だけど本当は女の子で、こんなことになったのも全部コレせい！」

びしつとばしつと、ハルカは前足をルーファスに指した。

「ええつ、ネコになったのはカーシャのせいでしょ？（……たしかに召喚しちゃったのは私だけ）」

「でも、ほとんどはルーファスのせいだもん！」

「うっ……（痛いところ突くなあ）」

クリティカルヒット！！ ルーファスは凶星を突かれて精神的ダメージを受けた。

空色のドレスの裾を揺らしながら、機械のような正確な九〇。回転をしたローゼンクロイツは肩越しから二人を見て、

「じゃあ行くよ（ふにふに）」

「どこに？」

ルーファスは至極もつともな質問をしてしまった。それに対してローゼンクロイツは無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、鼻で笑ってすぐに無表情に戻した。

「……ハルカとゆっくりお話したいから、ボクについて来て欲しいな（ふにふに）」

「えっ、でも、カーシャを捕まえに来たんじゃないの？」

「……えっ!? そうなの!?（ふにゃ!?）」

すごく驚いたような表情をして、やはりすぐに無表情に戻る。

そして、一言呟く。

「……ウソ（ふっ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。

「あの、でも仕事しないのは駄目なんじゃないんですか？（…
… 国務執行官とか言つてたけど、こんな人が国務なんてできる
のかな？）」

ハルカがこう聞くとローゼンクロイツはペンタグラムの瞳で
ハルカの瞳を見透かし、

「… 職場放棄（ふっ）。大丈夫、一時間もすれば別のひとが
来るから。でも、それまで学院が残ってたらいいけどね（ふに
ふに）」

無表情でとんでもないこと言うローゼンクロイツの瞳は尚も
ハルカの瞳を見つめ、何かを言いそうな雰囲気だった。だが、
彼は何も言わなかった。

ローゼンクロイツはスカートのふあふあレースをふあふあさ
せながら機械のような正確な歩調で歩いていつてしまった。

一瞬その場で立ち止まってしまっていたルーファスとハルカ
はすぐに歩き出しローゼンクロイツの背中を追った。

すぐにローゼンクロイツの横に追いついた二人だったが、
ローゼンクロイツの移動速度は異様に速かった。だが、彼
は普通に歩いている、それなのに追いつけない。ローゼンクロ
イツと二人の間には絶対的な何かがあるかのように思えた。

今まで一度も足を止めなかったローゼンクロイツが突然足を
止めた。それでようやく追いつくことのできたルーファスは呆
然と立ち尽くしてしまっているローゼンクロイツの横顔を見た。
「どうしたの？ こんなところで立ち止まって？」

辺りは家々の立ち並ぶ住宅街だった。人通りは無く、静かだ。

「……道に迷った（ふあふあ）」

衝撃発言だった。

後ろからやっと追いついて来たハルカは息を切らせながら口
「ゼンクロイツを見上げた。」

「道に迷ったって、あなたが前歩いてたんでしょ？」

「……冗談（ふっ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。
ちよつと小ばかにされたような感覚をハルカは覚えた。

「ローゼンクロイツさんって性格悪いですよちよつと！（ホントはちよつとどころじゃないけど）」

こんなふうがちよつと強い態度で出たハルカに、思わぬ精神的攻撃がローゼンクロイツから繰り出された！

「……ペチャパイ（ふっ！）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。
ちよつとローゼンクロイツは頭に来たのかもしれない。

「ペチャパイってなんで知ってるのよ！ ネコの私見てなんで
そう言い切れるの！（……どーせ、私は胸ないけど、こういう
言い方されると腹たつなあ〜！）」

必要以上に反論してしまったハルカに無表情のローゼンクロ
イツの一言が繰り出される！

「……推測（ふっ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。
「推測で言わないでください！（当たってるけど）」

「……ウソ（ふっ）。今はネコの身体かもしれない、見た目は

ネコかもしれない。でも、その中に入っているマナの形は変わらない、ボクにはそれが《見える》から、君がペチャパイだつてわかった。つまり、ペチャパイはネコに入ってもペチャパイなわけで、ペチャパイはペチャパイのまま、つまり君は今もペチャパイ

「ペチャパイ、ペチャパイうるさい！（まだまだ、発展途上なんです！）」

と、ここでハルカの頭にあることが過ぎった。

「（マナが見えるって……もしかして裸見られてるの!?) ねえ、ルーファス。ルーファスは私のマナを直接見ることでできるの？」

「私はできないけど？ それがどうかしたの？」

「ううん、別にいいの。あのローゼンクロイツさんちょっと耳貸してもらえますか？」

こう言われたローゼンクロイツはハルカを抱き上げて自分の耳元に近づけた。

「もしかして、私の裸とか見えてるんですか？（もし、そうだったら恥ずかしくて外出れないよ）」

「……それはどうかな？（ふっ）」

この態度にハルカのネコパンチが繰り出されたが、ローゼンクロイツはハルカの腕を掴み受け止めた。

「……冗談（ふっ）。大丈夫だよ、マナっていうのは真の形は不変なものだけど、偽ることができる。君のマナは今服を着ているから心配しなくてもいい。けど、君が裸って思えば裸にな

るから気をつけてね」

ローゼンクロイツはハルカを地面に降ろすと、

「さてと、行こうか？（ふにふに）」

と言つて手を上げた。

次の瞬間に起きたことにルーファスとハルカは何が起きたのかを把握するまで時間がかかった。滑り落ちていた。ローゼンクロイツが手を上げた瞬間、地面が左右に開け下に落ちたのだ。長い滑り台のような、いや、ジェットコースターのような感覚で下に下りて行く。右へ左へくねくね曲がりくねって、やがて止まった。

止まった拍子にお尻を打ったルーファスは、お尻に手を当てながら辺りを見回した。

太陽の光ほどではないが、ここはろうそくの光よりも断然明るく、辺りが見通せる。人工の建造物であることはすぐにわかった。石で作られた壁と床、そして前方に立つ神殿と思わしき建物。

思わずこうルーファスは呟きたくなった。

「どこ、どこ？」

第七話 電波ジャック

「……ここはね。ボクの秘密結社だよ（ふにふに）」

そうローゼンクロイツは呟いた。小さな呟きであるがルーファスを驚かせるのには十分だった。

「な、なに？ 秘密結社だつて!? だって、ローゼンクロイツは国務執行官でしょ？ 秘密結社？（どういうこと!?!）」

取り乱すルーファスなど構いもせず、ローゼンクロイツはハルカのことを抱き上げ神殿の中へ入って行ってしまった。

自分の置かれた状況が、一向に見えてこないルーファスが『はっ』とした時には周りには誰も居らず、自分が置いていかれたことに気づいて駆け足で神殿の中へ入って行った。

神殿の内部は神殿というより宮殿、大きな広間が一つだけ存在して、絢爛豪華な装飾のされた壁や天井には、幻想的な羽の生えた人間の絵が描かれている。そして、床には魔方阵や古代文字がびっしりと敷き詰められていた。

静かな神殿の奥へと足を運んだローゼンクロイツは、祭壇の前で足を止め、ハルカをその上に祭り上げた。

「君がこの秘密結社の神だ（ふあふあ）」

「えっ!?!（か、神つて私が!?!）」

ローゼンクロイツの『君は神だ』発言。この発言は愛の告白よりもある意味衝撃的な発言だ。

「……今からその説明してあげるよ（ふあふあ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。そして、ローゼンクロイツの説明が始まった。

「ここはボクの組織した薔薇十字団の神殿。本部は別にある。国務執行官は仮の姿、あれは国を乗っ取るためにやってるだけ（ふにふに）」

衝撃の告白第二弾、『国を乗っ取る』発言。ハルカ固まる。ルーファスはあごが外れた。

数秒の時間を要して、

「国を乗っ取るってどういうことですか!？（何この人テロリストなの?）」

「ちよつと、待った、何で国を乗っ取るの?（ローゼンクロイツは何を考えているんだ?）」

とハルカとルーファスは大声で言った。

「国を乗っ取るのは魂の解放、全てのモノを天へと導く教祖としてのボクの使命（ふにふに）」

「ローゼンクロイツ! 魂の解放って何? 君がやるうとしていることは何なんだ!？（……っていうか、昔からこんな奴だったけど）」

そうローゼンクロイツはルーファスが知っている限り、三歳ごろから電波で、しかも危ない思想を持った人物だった。よくこんな奴が国務なんてやってるもんだとルーファスと思う。

「……ここからは一切質問は受け付けない、最後まで一気に話すからよく耳を済ませるんだよ（ふにふに）」

二人はこの言葉に頷き口を開くことを止めた。

「ボクは魔導の研究をしているうちにある預言書を見つけた……ある意味偶然（ふっ）。その預言書には、今日の日付とある場所が書かれていて、その場所に全てのモノたちの魂を解放する救世主が現れ、ボクがその救世主に出逢うことが書かれていた。その救世主は人間の言葉をしゃべる黒猫。それを読んだボクは秘密結社薔薇十字団を創設して、教祖となりこの日が来るのを待ちわびた……（ふあふあ）。つまり、ハルカ、君が救世主つてことだよ（ふあ）」

閃光が神殿内に乱れ踊った。ローゼンクロイツの身体を包み込む淡い光から閃光が外へと放出される。

「……電波ジャック（ふっ）」

自信に満ち溢れた気高く崇高な表情を浮かべたローゼンクロイツ。

いったい何が起きているのか!?

アステア王国に住む人々は驚愕した。

突如どこからか放たれた稲妻のような光線が生き物のように縦横無尽に国中を飛び交い、人々は怯え、逃げ出し、パニック状態に陥り、国中は狂気に満ち溢れた。

大魔王ハルカの襲撃から、まだ一ヶ月も満たない。それが人々の恐怖をより一層駆り立てた。

国を、町を、人々の間を飛び交った閃光は上空に上がり、フオログラム映像を作り出した。それも一つではなく、国中の至る所にいくつも、いくつも同じ映像が映し出された。

映し出された映像は　猫だった。その映像を見た人々は唾然とした。

映像の猫は言った。

「こ、こんにちわ、加護ハルカって言います（こ、これでいいの？）」

猫ハルカはちよつと気恥ずかしそうに、数分前にローゼンクロイツに言われたように挨拶をした。

人々は余計に唾然とした。映像の猫が人間の言葉をしゃべり、しかもその声が可愛らしい女の子のものだったからだ。ここで低く恐ろしい声を発していたならば、人々は再び恐怖で混乱に陥ってかもしれない。

映像は画面の端からローゼンクロイツが入って来て、ハルカを抱きかかえる映像となった。

「……この映像は国に無断で流してるんだよ（ふにふに）。でも、誰もボクの崇高な行為を邪魔はできない、この国で一番の魔導士はこのボクだからね……自画自賛（ふっ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻り話を続ける。

「申し遅れたね、ボクの名前はクリスチャン・ローゼンクロイツ、国務執行官を副業にしている秘密結社薔薇十字団の教祖だったりする（ふにふに）。今日は大事な報告をするためにみんなの前に顔を出してみたよ（ふにふに）」

秘密結社薔薇十字団のことは秘密と名乗りながらも、国民の大半に知られる公然の秘密の組織だった。その活動内容は特に

重い病を患い苦しむ人々の前に現れ、無^{グライテイス}料で行ったり、一部の特権階級しか知らない秘術などを一般人に広めたりしていた。

慈善活動をやっている団体のようなところではあるが、国からは目を付けられ教祖は指名手配されていた。国がこの秘密結社を疎ましく思つた理由は、国の最高機密である秘術などが、この秘密結社によつて一般人にも広まつてしまつていたからだ。

しかし、教祖の存在はいるとは言われるが、そのしつぽすら掴めず国はお手上げ状態であつた。

男か女かも正体が知れなかつた秘密結社薔薇十字団の教祖が、今国民の前に姿を現したのだ。国家は揺れた。

カーシャ並びにファウストを拘束し、この映像を見ていたエルザ元帥は唇を噛み締めた。

「くつ、まさかローゼンクロイツが薔薇十字団の教祖だつたとは……（どおりで証拠が何一つ掴めなかつたわけだ。上で改ざんされていたのでは、証拠などもみ消されて当然だ）」

エルザ元帥とは対照的に、魔法で作られたチェーンでエルザ元帥に拘束されているカーシャとファウストはうれしそうな顔をしていた。

「ふふ、クリスちゃんもなかなかやるな（ローゼン〓薔薇、クロイツ〓十字、で薔薇十字団か……そのままだな……ふふ）」
 「ローゼンクロイツが教祖か、おもしろい。我が魔導学院卒業生の一番の鬼才だけのことはあるな」

この二人はこんなところでは馬が合うらしい。
 悔しそうな表情のエルザを見て、カーシャは実に楽しそうだ

った。

「私を捕まえて気分上々だったエルザも、今は失意の底か？

（……人生、山あり谷あり、ふふ）」

「なんだと？（この女が、私自らが極刑を下してやる）」

しかし、それは叶わぬ夢となった。

両腕を魔法のチェーンで拘束されていたカーシャの腕が溶けた。まるで手と腕だけが液体になってしまったように、それでいて手と腕の形を保っていた。そして、液体となった腕が手錠から抜かれた。

手錠が外されたのはエルザが気を抜いていたためではない、カーシャにとつて彼女は所詮生徒だった。魔導力はカーシャが数段上だっただけのこと。

「私はハルカに会いに行く（ふふ、おもしろいことになってきた）」

そう言つてカーシャは空に舞い上がり、この場から逃げた。

当然のことながらエルザは逃げたカーシャを追いかけるべく、レビテーションでファウスト共々空に舞い上がろうとしたが、上空三メートルもしないとここで地面から、ぐぐつと引つ張られた。下を見るとファウストがマナを溜めているのが見えた。

彼が抵抗してエルザが空に舞い上がることを邪魔していたのだ。

「行かせてやれ、こんなおもしろいことは滅多にない（クク、国中が大騒ぎだ）」

「くつ、何をする！（学院の教師どもは揃いも揃つて何を考えているのだ！）」

エルザはファウストを拘束していたチェーンを解呪しようとしたが、できなかった。

「今度は私が君を拘束する番だ（ククク）」

拘束していた筈の者に逆に拘束されてしまったのだ。

「邪魔をするな！ 公務執行妨害だぞ！！」

「邪魔をするなど？ 私を誰だと思っている？ 私はヨハン

・ファウストだ！」

異変に気づいたエルザの部下である治安執行官たちがファウストに飛び掛かったが、ファウストの発した黒いオーラによって吹き飛ばされ近づくことすらできなかった。

「ククク、この国は退屈しなくて実に住みよい国だ」

「同志たちよ、いつにボクたちが待ち望んでいた救世主が現れたよ（ふにふに）」

映像のローゼンクロイツはハルカを高く掲げて、映像を見ている全ての者に見せ付けた。

「この、ボクたちの住む世界とは異なった異世界から来た黒猫が、ボクたちの魂を解放して樂園へと導いてくれる（ふあふあ）」

映像が突如ザザーッと乱れ、そしてプツリと消えた。発信者側に問題が起きたのだ。

無表情のローゼンクロイツが後ろを振り向くとそこにいたのは！？

「こんばんわクリスちゃん。三ヶ月前の感謝祭以来だな（相変

「わらず変な格好をしているな」

そこにいたのはカーシャだった。

ローゼンクロイツもルーファスもハルカも、誰一人としてカーシャが近づいて来たのに気づかなかつたのだ。恐るべしカーシャの忍び足。

「なぜ魔女がここに（ふにふに）」

ローゼンクロイツはカーシャのことを魔女と呼んでいた。

「それは、この場所がどうしてわかつたかという意味か？」

「いくら魔女の女王でもボクの結界は破れない筈だよ（ふーっ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。ローゼンクロイツの声音はいつもと違っていた。いつものゆっくりとして透き通るような声ではなく、今の彼の声のトーンは少し低めだった。

「私の正体を知る数少ないおまえならわかると思うが？」

「学院時代の魔女とはマナの波動が違う。……もしかしてチカラを取り戻したの？ もしそうだったら……少し驚き（ふにふに）」

「そうだ、チカラを取り戻した今の私は、この国で一番の魔導士だ。一番はクリスちゃんではなくなった。格が下の魔導士の結界など無いも同じ（クリスちゃんとはいるいるあつたが、今なら絶対負けない）」

『いろいろあつた』ってなんですかカーシャさん。てゆうか、この人いろんな人といろいろあり過ぎ。

てな感じで二人が会話を進めているなか、ハルカはある言葉がずっと頭に引っかかって、そのことだけに頭を使っている状態だった。その言葉とは、『ボクたちの住む世界とは異なった異世界から』というローゼンクロイツの言葉。彼はハルカが異世界から召喚されたことをどこで知ったのだろうか？

「あの、お取り込み中のところ申し訳ないんですけど、ローゼンクロイツさんはなんで私が異世界から来たこと知ってるんですか？（この人なら勘とか言いそうだけど）」

本当にお取り込み中だった。

プライドの高いローゼンクロイツはカーシャに結界を破られたことが、シヨックだったらしい。

「結界が破られるなんて……そんな自分に苦笑（ふ〜）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。そんなローゼンクロイツにカーシャは、びしつとばしつと人差し指を顔に突きつけた。

「学院時代に負けた運動会の障害物競走、今なら勝てる！」

以前カーシャはローゼンクロイツに障害物競走で負けたことがあった。ただ負けただけならばカーシャも気にしなかっただろうが、二人はレースの前に罰ゲーム付きの賭けをしていて、カーシャはレースに負けた上に賭けにも負けて、しかもレース中にローゼンクロイツに酷い目に遭わされていた。それが今でも尾を引いているのだ。

「……負けず嫌い（ふっ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。

「なんだと!?（罰ゲームで受けた私の屈辱、今思い出しても笑えない……ふふ）」

そう考えながら心の中で笑っているカーシャ。この人のことはよくわからない。

「あのお、お取り込み中申し訳ないんですけど！（何で二人とも気づかないわけ？）」

ハルカは頑張っていた。

「ちょっと、ローゼンクロイツさんに話があるんですけど！（いい加減気づいてよ！）」

気づかないのには理由があった。実は二人ともわざとハルカを無視していた。つまりグルになってからかっているのだ。

「……………（クリスちゃんとはこういうところで気が合うな…

…ふふ）」

「……………（ふっ）」

確信犯だった。二人の息はぴったりだ。

「あのお〜！！（いい加減にしてよ！！）」

「……………飽きたね（ふにふに）」

「……………そうだな、ハルカをからかうのもこのくらいにするか（有意義な時間だった）」

「わざとやってたんですか？（この二人、最強タッグだ！）」
ハルカのシヨックだった。でも、ハルカはめげずにやっと質問した。

「ローゼンクロイツさんは、私が異世界から来たことなんて知ってるんですか？」

「……勘（ふあふあ）」

「（やっほしー…）」

「……ウソ（ふっ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。
「本当はエルザ元帥に白状された…… 自白（ふっ）。事件がもみ消されていることに気づいたボクは、その犯人がエルザ元帥であることを突き止めて吐かせたら、ルーファスとハルカの名前が出てきてね…… 因果関係（ふにふに）」
この話を聞いたルーファスは少し慌てていた。なんせ、いろんな罪が國務執行官にバレてしまっていたのだから。

「あ、あの、私たちがしたこと、ローゼンクロイツと私の中から当然見逃してくれるよね？」

「……交渉（ふにふに）」

「……交渉ってどんな？（交渉したくないベスト三の中にローゼンクロイツは入るんだけどな）」

ちなみにルーファスの交渉したくないベスト三は、カーシャ、ファウスト、ローゼンクロイツである。この三人の順序は誰が一番というわけではない、できれば誰ともルーファスは交渉をしたくない。

「……ハルカを神としてこの世界に君臨させるお手伝い（ふにふに）」

「もつと楽なのない？（神として君臨って……）」

ビビッとハルカは超名案が頭に浮かんだ。

「ルーファス！ ローゼンクロイツさんに言うとおりにし

て！！」

「なんでさ？（神として君臨なんて無理だよ）」

「私が元の世界に帰る条件は？」

ハルカはルーファスに大魔王ルシファーという超ビツクな悪魔の代わりに召喚されてしまった。そして、ルーファスが大魔王にさせようとしたこと、それは、“世界征服”だった。世界征服さえ成し遂げればハルカは元の世界に帰れる筈なのだ。

第八話　ねこしゃん大行進

妖々たる邪悪な笑みを浮かべるカーシャ。とつても悪いことを考えているのは明々白白、皆さんご存知、お見通しだ。

「私もハルカが元の世界に帰る手伝いをしよう（……世界征服……ふふ）」

手伝いをすると言いながらもカーシャの目的は世界征服にある。何を隠そうカーシャは古の時代に世界征服に失敗しているのだ。

ローゼンクロイツとカーシャは何時の間にか結託して、固い握手をしているではないか。しかも、ハルカまでもその輪に入っている。この場で付いていけないのはルーファスだけだった。

「あのさ、ハルカを神として君臨させるってどうやるの？（カーシャとローゼンクロイツが組んだら何でもアリって感じだけど……）」

「ボクの辞書に不可能の文字は無いよ（ふあふあ）。これから本部に行く、そこで作戦について話し合おう（ふにふに）」

今ハルカたちがいるのは薔薇十字団の臨時支部だった。どおりで人がいない筈だ。

突然、ペンタグラムの瞳が天を“視た”。

「……来るよ（ふーっ）」

全員がローゼンクロイツにつられるようにして上を見上げた。

轟音と共に天井が崩れ落ち、辺りに砂煙が充満した。

服の裾を口と鼻に当てながら砂煙が静まるのを待っていたカーシャが見たものは、魔導吸収法衣を着た国の特殊部隊だった。特殊部隊の数はざっと二〇名。

「ふふ、教祖サマを捕まえに精銳が来たようだな。どうするクリスちゃん？」

「……魔女が結界破ったから（ふっ）」
無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。つまり非はカーシャにあると断言したいのだ。

カーシャは何を言い返そうとしたが、今はそれどころではなかった。特殊部隊は手に持った杖状の魔力増幅器にマナを溜めている。

「ハルカを守れ！」

カーシャがそう叫んだ次の瞬間にはエネルギー弾の猛襲が特殊部隊から放たれていた。

三人の魔導士たちは瞬時に魔法壁を貼ることができたが、ハルカは？

ハルカは無事だった。ルーファスがその手にしっかりと抱きかかえている。しかし、ルーファスの右肩は衣服が焼け焦げ肌が炎症していた。

「ルーファスだいじょぶ？（私のために……）」
抱きかかえられたハルカは焼けた肌を目の前にして沈痛な表情をした。

「……結構痛い」

正直な感想だった。

ルーファスの肩の治療をしようとカーシャが走り寄ろうとしたその時だった。カーシャの後ろにいたローゼンクロイツが口を手を当てた。

「は、は、はつくしゅん！」

大きくなくしゃみと共に辺りが静まり返った。この場にいたハルカ以外の全員が口を半開きにして次に起こる事態に恐怖したのだ。ローゼンクロイツを知る者であれば誰もが知っている最悪の事態。

ローゼンクロイツの頭にねこ耳が生えていた。

「カーシャ逃げよう！！（ホントにヤバイ）」

ローゼンクロイツの変化を見たルーファスは大声で叫んだ。

「言われるまでも無い、ローゼンクロイツの猫返りは危険極まりない」

「え、何？ ローゼンクロイツさんに何が起こってるの!？」

ハルカには何が起きようとしているのか全く見当もつかない。ローゼンクロイツの『猫返り』とは、一種の発作のようなものである。いつ起こるともわからないその発作を起こすと、ローゼンクロイツの身体は猫人へと変化し、ねこ耳とっぽが生える。

猫人と化したローゼンクロイツはいろんな意味で最強である。
「……ふあふあ〜」

猫返りをしてしまったローゼンクロイツには人間の言葉が通じない。しかも、トランス状態で意味不明な破壊活動を行う。

「……ふっ」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。次の瞬間ローゼンクロイツの身体から大量なねこしゃん人形が飛び出した。しかも、ねこしゃんは止まることなく放出され続けている。

ねこしゃんを目の当たりにしたカーシヤは思わず叫んだ。ネコが好きだから叫んだのではない、恐怖から叫んだのだ。

「しまった、今回はねこしゃん大行進か！！（この前は確かしつぽふにふにだったな……ふふ、ラヴリイだ）」

『ねこしゃん大行進』とはカーシヤが名づけた猫返り時のローゼンクロイツの魔法で、ローゼンクロイツの身体から放出された大量のネコのお人形さんたちが二足歩行で走り回り、何かにぶつかると『にゃん』と可愛らしく鳴いて大爆発を起こすという無差別攻撃魔法である。ちなみに猫返り時のローゼンクロイツの魔法にはこの他にも『しつぽふにふに』という魔法などもある。

二足歩行のねこしゃん人形がランダムに走り回り爆発を起こしていく。爆発が爆発を呼ぶ最悪な状況だ。

特殊部隊員は着ている法衣で辛うじて身を守っているが、その法衣でも幾重もの爆発でボロボロになっていく。

ボロボロになっていくのは法衣だけではなく。壁が崩れていく。明らかにここはもう危ない、崩れるのも時間の問題だ。

大爆発を足元に感じながらルーファスたちは一目散に逃げて

いた。今は特殊部隊の空けた穴をレビテーションで登っている途中だ。

出口を猛スピードで出ようとしたルーファスたちの前に蜘蛛の巣のようなネットが広がった。

「罨か！！（ついてない）」

そうルーファスが叫んだ次の瞬間にはネットに突っ込み、単純なまでにあっさりと捕らえられてしまった。

このネットは魔導士に魔法を使えなくさせてただの人にしてしまう優れたもので、一般人は手に入れることが出来ない貴重なマジックアイテムだ。

逃げ道で待ち伏せなど基本中の基本。そんな手に引つかかるなんて、

「自分自身に幻滅だ（……ふふ、情けない）」
って感じだった。

為す術もなくなってしまった“ただの人”二人とネコ一匹はネットに絡まったまま連行されて行ってしまった。

となると思いきや、ハルカは上空から飛来してくる三つ人影を見た。その影は地上に降りるや否やここにいた特殊部隊員を肉弾戦でバツバツサと倒していくではないか！

影の一人がネットの方へ近づいてくる。その容貌は人間の時のハルカと同じ年くらいのお嬢様系で、他の二人もよく見ると同じ感じの女の子だ。しかもみんな空色のドレスを着ている。どう考えてもローゼンクロイツの仲間か何かとしか思えない。それに付け加えて、なぜか全員ねこ耳を付けている。

ネットの前で足を止めた少女はドレスを少し捲り上げ、足のところに隠してあったナイフを抜くとネットを切り、ルーファスたちを救出した。

「近距離戦闘班隊長アインといいます。みなさんを助けに来ました」

鈴が春の歌を謳うような声だった。次の瞬間カーシヤが思ったこと、それは、

「（こいつら女か？）」

見た目、声、どこを取っても可愛い女の子っぽいのが、ローゼンクロイツの例があるのでなんとも言えない。

特殊部隊員を倒し終えた二人の女の子もこちらが近づいてきて挨拶を始めた。

「近距離戦闘班のツヴァイといいます」

「同じく近距離戦闘班ドライであります！」

微妙に一人だけしゃべり方が違った。しかもその一人だけがピシツと背筋を伸ばして軍人風の敬礼の挨拶だった。だが、あえて誰もそこには突っ込まなかった。

聞くまでも無いと思つて誰も聞かなかったことにハルカが取り合えず代表で聞いてみた。

「あの、あなたたち何ですか？ ローゼンクロイツさんと関係ある人？（つていうか関係ありすぎな格好してるけど……）」

アインが一步前へ出て答えた。

「私たちは薔薇十字団のメンバーで、ここが襲撃された場合に備えて待機していました（まさかホントに襲撃されるなんて思

ってみなかったけど」

まさか襲撃されてしまったのはカーシャが結界を解いたせいだ。

「それでは本部にお連れします」

そう言つてアインがハルカを抱きかかえると、ツヴァイはルーファスとカーシャにある衣装を渡した。

「これを着て変装してください。追っ手にバレると大変ですから」

渡された衣装は修道士の物であつた。ケープを羽織りドミノと呼ばれる頭巾を被つたルーファスとカーシャはどこから見ても修道士、何の変哲も無い。

完璧に修道士になりすましたルーファスとカーシャは近距離戦闘班と共に街中を歩いていた。

アインは先程から人々が自分たちに微妙だが注目しているのに気づいた。

「（完璧な修道士の変装が見破られてるのかしら？）」

先程からしつこく言っているが、「修道院」の変装は完璧だ。

ただ、空色ドレスの三人娘は異様に目立っていた。

人々の視線を浴びながらハルカたちは花屋さんの前に来た。

色とりどりの花がいっぱい置いてあり、その花々に囲まれた花のように美しい女性店長がいた。

ハルカを抱きかかえたままアインは花屋の店長と話し始めた。
「薔薇を一万本いただけませんか？」

「白にしますか、赤にしますか？」

「知るかなんもん、バツキヤロー！」

突然人が変わったように怒り出したアインだったが、女店長は怒ることなく応じた。

「どうぞ、こちらへお入りください」

一部始終を近くで見っていたハルカは何なんだかわからなかった。

「（何今の？ アインさんにあんなこと言われて怒ってないのかな？ 実は内心でははらわた煮えくり返っていて、お店の奥に連れ込まれて、あゝんなことやこゝんなことされるんじゃない？）」

ハルカ善からぬことをいっばい想像したようだが、今の実は合い言葉だったりする。

女店長に続いてぞろぞろとハルカたちはお店の中に入って行った。

お店の中は外から見た時より広い。異様に広い、やけに広い、広すぎる。

部屋がたくさんあり、廊下もかなり入り組んでいる。

長い廊下をずいぶんと進み女店長の足がドアの前で止まった。

「このドアの先です」

頭を下げた女店長にアインは礼を言うとドアの中に入って行った。他の者もそれに続いた。

ドアの中は明らかに花屋の店内ではなかった。ここが薔薇十字団本部だ。

薔薇十字団の本部であることをアインに告げられ一行は本部内を観光案内風に案内された。

まず、最初に連れて来られたのは何かの製作所らしき場所。ここには作業着を着たくましい男たちが、なにやら大きなブロンズ像を磨き上げていた。

ブロンズ像は明らかに猫と形をしていて、その大きさは横に五メートルほど、高さは土台も合わせると一〇メートルはあるブロンズ像だった。

思わずハルカは猫つながりということで親近感を覚えた。

「アインさん、あのブロンズ像は何なんですか？」

「あれはハルカ様のブロンズ像で、五〇ほど製作して各国の主要都市に送りつける予定です」

「あれって私なの!?(てゆーか、送りつけるってどういうこと)」

アインは両手を合わせると理想を夢見て遠い目をした。

「ハルカ様が世界を統治された暁には、あのブロンズ像が世界各国に……（ああ、ねこねこファンタジー）」

アインは少し危ない世界に入っていた。

ツヴァイとドライは何故かここで声を合わせて掛け声をあげる。

「「ねこねこファンタジー……!」」

三人娘は少し危ない世界に入っていた。

ローゼンクロイツの猫返りといい、この近距離戦闘班のねこ耳三人娘たちといい、ハルカを神として崇めようとしているこ

とといい、もしや、薔薇十字団って猫を崇める新興宗教なのか!?

ハルカとルーファスは、ここを出る頃には催眠療法に引っかけたて高額商品を買わされていそうな気分になった。

次に案内されたのは、民間人から集まった戦闘隊員の訓練場だった。ここでハルカは凄まじい光景を目の当たりにすることとなった。

訓練場にいる人たちは何故かみな猫のきぐるみを着て、それが三〇〇人ほどいる。ふざけているとしか思えない光景だった。ハルカはこの訓練のことには触れないでおこうと思ったが、ルーファスは聞きたくて聞きたくてしようがなかった。

「（どうしようかな、聞きたいけど触れない方がいいような…）あの、この訓練って何ですか？ というより、なぜ猫なんですか？」

ルーファスはついに禁断の扉を開けてしまった感じた。

質問に答えてくれたのはドライだった。

「ここに集まってくれた者たちは家庭を持った一般人であります。ですから顔を隠すためにきぐるみを着ているのであります。つ！（敬礼！）」

以前ネコのきぐるみを着て国立博物館に侵入したことのあるルーファスはなるほどひとり納得した。

だが、この後誰もが予想だにしなかった展開が！

ツヴァイはネコのきぐるみ軍団の前に立つと、

「ねこねこファンタジー！」

と言つて、ぼあぼあとした感じで拳を高く上げた。するとネコのきぐるみ軍団も同じように拳を高く上げて叫んだ。

「ねこねこファンタジー！」

こちらの声は低く唸るような声でちよつと男臭かった。むしろ恐い。

嘩然としてしまっているハルカとルーファスを後目にカーシヤはツヴァイを押しつけてネコのきぐるみ軍団の前に堂々と立つた。

「ねこねこファンタジー！（……意味のわからん言葉だ。でも、おもしろい……ふふ）」

カーシヤが拳を上げて抑揚の無い声で合い言葉を叫ぶと、

「ねこねこファンタジー！」

また低く唸るような声が返つて来た。やはり恐い、不気味だ、変態だ。

カーシヤはカーシヤスマイルを浮かべた。

「（……ふふ、おもしろい）ハルカもやってみたらどうだ？

神なのだから、ちよつどいいのではないか？」

「（なんで私が？ こんな恥ずかしいことできるわけないじゃない）」

ハルカを抱きかかえるアインは何かを訴えるような熱い眼差してハルカを見ている。そして、残りの二人のねこ耳娘もハルカの前にささつと立った。

アイン、ツヴァイ、ドライの順番でハルカに熱いエールを送った。

「ハルカ様ぜひお願いいたします！（ねこねこファンタジ〜をぜひ！）」

「ハルカさまあ〜！（プリティ〜ボンバーでよろしくお願いします！）」

「自分からもお願いであります！（ハルカ様のねこねこファンタジ〜が見たいであります！）」

ハルカに有無を言わせぬままにアインはハルカを抱きかかえたままネコのきぐるみ軍団の前に立った。

「ハルカ様、どうぞ！」

「（どっぴょって言われてもなあ）」

ここにいる皆がハルカに注目している。しかも、ネコのきぐるみ軍団は顔こそ見えないが、ハルカへの想いはアイドルを追っかける危ない人たちと同じオーラを発しているように思えた。

「（……このネコさんたち怖いよ、言わないとなにされるかわかんないから）……ねこねこファンタジ〜」

「ねこねこファンタジ〜！！」

ハルカはかなり控えめに言ったのだが、返って来た声はうる波のようだった。やっぱ怖い。

ぶるぶるとハルカは激しい悪寒に襲われ、毛が全て立ってしまつた。

「アインさん、案内はもういいですから、どこかでゆっくり休みたいんですけど？」

「申し訳ありません、気づきませんでした。ですが、あと一箇所だけご案内させていただきたい場所がありますので……」

最後に案内したい居場所。個室のドアの前には『教祖』というプレートが掲げられていた。

部屋の中に入った一同を出迎えたのは、あの人だった。

第九話 ハルカ君臨計

もちろん部屋で待っていたのはローゼンクロイツだった。彼はハルカたちが建物内を見学している間に急いでここに来て待っていたのだ。つまり、ハルカたちの建物見学はローゼンクロイツの時間稼ぎ。

「遅かったねみんな（ふにふに）」

自分で時間稼ぎさせといて『遅かった』はないと思う。

ハルカたちをローゼンクロイツの部屋に案内したアインたち三人は、足並み揃えて部屋を出て行った。彼女たちは無事任務を果たし終えたのだ。任務に成功したことを感動してドライが大粒の涙を流しながら部屋を出て行ったのをカーシャは見逃さなかった。

「（ドライとかいうやつ……おもしろい……ふふ）」

ドライはカーシャのお気に入りリストにその名前を連ねることになった。実際はそんなのなかったけど、カーシャの中で今できた。つまり、気まぐれ。

空中に突然ホログラム映像が現れた。その映像はホワイトボードのようなもので、ローゼンクロイツが指を動かすと文字が浮かび上がってきた。

「ボクの目的はまずこれ、そして、これ……で」

ローゼンクロイツが宙に描いた文字は次の通りである。

アステア王国を乗っ取る。

アステア王国を使って世界を乗っ取る。

ハルカ神になる。

世界が愛と平和に包まれる。

ねこねこファンタジィ！

最後の が意味不明だが、それはさて置き、やはりローゼンクロイツは本気でハルカを神に仕立てるつもりなのだ。

「ボクの目的はこんな感じ（ふあふあ）」

生徒が教師に質問するときのようにルーファスは『は〜いと手を上げた。』

「質問がありま〜す」

「なんだねルーファスくん？（ふにゃ）」

こちらも負けじと教師の顔つきになってルーファスを指名した。

「本気で世界征服するつもりなの（……聞くまでもなく本気だと思っけどさ）」

「……わかってないね（ふっ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。

「征服じゃなくて統治だよ（ふあふあ）」

今度はハルカが『は〜い』と前足を上げた。

「は〜い、質問で〜す」

「なんだねハルカくん？（ふにゃ）」

「どうやって世界征服……じゃなくなって世界統治するんですか

あゝ？（明らかに無謀だと思っただけだな）」

「……知らない（ふっ）」

言い出したローゼンクロイツが『知らない』とはどういうことだ。と言いたくなるが、ローゼンクロイツの性格からして次に言葉はこれだ。

「……ウソ（ふっ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。そして、もう一言。

「……ウソ（ふっ）」

『どつちだよ』と誰もが思い、ルーファスが代表してツッコミを入れる。

「どつちだよ！」

普段無表情なローゼンクロイツの顔が深刻そうな顔つきになった。……が、たぶん特に深刻でもないと思われる。

「……何も考えてなかった（ふあふあ）」

これって、もしかやとハルカは思った。

「……（無計画!?)」

正解である。ローゼンクロイツはハルカを拉致（？）するところまでしか考えてなかった。

「そこで今からみんなに世界統治の方法について考えてもらいたいと思うんだよね（ふあふあ）」

いい加減なローゼンクロイツの発言を聞いて、カーシャの瞳が怪しく光った。悪巧み全快、脳みそフル回転で駆け巡る。

「私にいい考えがある（ぴかっと、きらっと、最たるひらめき

……ふふ、天才」

不敵な笑みを浮かべるカーシャを見て不安を覚えるハルカ。だが、いちよう聞いてみる。

「どんなひらめきですか？（トントンでもないことだとは思っけど）」

「昔、私が世界征服をしようとしたときに用意した、あるものがある（ドカーンと一発）」

「……（やっぱり、やな予感）」

世界征服って言うてる時点でかなりアブナイ。が次の言葉はもつとアブナかった。

「世界を破滅に追い込む、世界最大級の魔導砲、その名も『T

HE ENDクンゼロ号機』」

「はあっ？」

ハルカとルーファスが声をそろえて変な顔をした。かなり間の抜けたへっぴこな表情だ。

魔導砲とは古の大魔導士たちが創り上げたという魔導兵器で、アステア王国が太古の技術を復元し造った魔導砲の威力は、最大出力で小さな島を破壊させるほどのもので、その脅威の破壊力から実戦では長い間使われることがなかったのだが、大魔王ハルカとの戦いで使用された。

アステアの所有するレプリカとも言える魔導砲でさえ小島を吹っ飛ばすのだから、世界最大級の“オリジナル”の威力はいかに？

「クリスちゃん、全世界に私の声明を伝えたい、ハルカのとき

と同じように映像付で頼む」

「……了解（ふあふあ）」

世界中の主要都市に住む人々は驚愕した。ちなみにアステア王国に住む人々は、本日二度目の驚愕だ。

突如、どこからか放たれた稲妻のような光線が生き物のように縦横無尽に世界中を飛び交い、誰もが敵の襲来かと思った。

閃光はやがて上空でホログラム映像を作り出した。映像に映し出された人物はもちろんカーシャ。

「こんばんわ、カーシャだ（ふふ、カメラ写りは良好だろうか？）。全世界の下賤な人間どもたちに告ぐ、おまえたちに未来はない、あるのは死のみだ。今、この星は世界最大級の魔導砲の照準にセットされた。私が合図をすれば、この星は木っ端微塵に消し飛ぶ！（カツコよく決まったな！）」

ぶっ飛んでるカーシャの横にいたルーファスがへっこな顔をする。

「はあっ！ それってやりすぎじゃないの？」

空かさずカーシャのボディブローがルーファスの腹に炸裂。

THE ENDルーファス。ルーファスは床にうずくまって動かなくなつた。

何事もなかったようにカーシャは話を続ける。

「だが、私とて冷酷な女ではない」

「（ウツつき、カーシャさんは十分冷たい人だと思つ）」

ハルカの発言は当たり前。カーシャは絶対私利私欲のためならなんでもするタイプの女だ。

「おまえらにチャンスをくれてやろう。全人類が私の下僕になると約束したら、魔導砲は撃たないでやる」

本気でカーシャは世界征服をするつもりだ。きつとカーシャが世界の支配者になったら、『うさちゃん』のきぐるみを着ることが義務付けられるに違いない。

モニターで外の映像を確認しているローゼンクロイツ。カーシャの声明を聞いている人々はみんな笑っている。星が木っ端微塵に吹っ飛ぶなど、冗談だと思っっているのだ。

人々の反応を見ていたローゼンクロイツは、カーシャの顔の横でそつと耳打ちした。

「みんな信じてないみたいだよ（ふあふあ）。ここはひとつ、軽くかましてやるべきだと思う（ふっ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。これに合わせてカーシャも口元を歪める。

「人間どもよく聞け！ 大魔法国家で名高いアステア王国の上空を掠めるように魔導砲を撃ってみせる」

「カーシャさん本気ですか!？（やっぱりアブナイよお、この人）」

「……（ドカンと一発散らせてみましょう……なんてな）」

カーシャはハルカに対して不敵な笑みを投げかけただけで何も言わなかった。だが、心の中では ドカンと一発ってマジですかカーシャ!？

マジだった。

悪魔の笑みを浮かべたカーシャのイヤリングが怪しく輝く。

「発射！（どか〜ん……ふふ）」

次の瞬間、宇宙空間に設置してあった超巨大魔導砲が発射された。

巨大な光の柱がアステアの上空を掠め飛び、巨大な風を巻き起こし、上空の空気を掻っ攫い真空状態にした。

真空状態になったことにより、そこに空気が一気に流れ込み、地盤が浮き上がり、建物が上空に吸い込まれ、人々も、看板も、洗濯物で干してあったステテコパンツも飛んでいく。大惨事だった。

モニターを見ていたハルカは口に出してはいけないことを心の中で呟いた。

「（カーシャさんやりすぎ……この人魔女）」

「さすがは魔女だね（ふっ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。大惨事を目の当たりにして、無感情な顔をしているローゼンクロイツは、十分悪だ。

この中で顔を真っ青にしている人間的な普通人はハルカだけだ。ちなみにルーファスは未だ床にうずくまり、アステア王国を襲った大惨事を知らない。

「さて、相手の出方を窺うとするか（これこそ私の懂れていたものだ……ふふ）」

これにてカーシャの演説は終わった。

沈黙が流れる。ハルカは気づいた。

「今のってカーシャさんが世界征服するみたいじゃないです

か？ あの、私が征服しないとダメなんじゃないんですか？
（完全に脅しだよな……）」

びびつとひらめき、ローゼンクロイツは手を叩いた。

「じゃあ、こうしよう（ふあふあ）。魔女はハルカの補佐で、実際に動くのが魔女で、裏で糸を引いているのがハルカっていう設定にしよう（ふにふに）」

これって完全な悪役だ。ハルカの大魔王への道は着実に向こうから勝手にやって着ている。ピバ大魔王ハルカ。

アステア王国を襲った大惨事は世界各国に瞬く間に広がった。世界滅亡が迫っていると誰もが確信した。ちなみにアステア王国はつい先日にも大魔王によって滅亡の危機にさらされた。今年のアステアにとって厄年だ。

アステア王国ヴァルハラ宮殿　今ここでは国の要人たちが集められ緊急会議が行われている真つ最中だった。

「君たちをここに集めたのは他でもない、またこの国は、いや、世界はあのカーシャという人物によって滅亡の危機にさらされている」

ずいぶんと重い口調で現国王クラウスは言った。

あの時、フォログラム映像で顔出していたのはカーシャだけであつたために、カーシャが世界征服を企んだことになつている。……企んでいたのは事実だが。

カーシャの前にフォログラム映像で演説をした黒猫（ハル

カ）とローゼンクロイツが、カーシャと何か関係があるのではないかという話を持ち上がったが、とにかく今はカーシャの居所を探ることが先決とされた。

会議で即刻カーシャ討伐隊が編成され、国中が騒然とした雰囲気に包まれた。

クラウスの表情は重い。

「被害状況はどうなっている？（大魔王ハルカの時よりも被害は大きいかな？）」

国王の問いに席を立つた男が深刻な顔をして答えた。

「被害状況は東地区から西地区にかけて及んでいるようですが、詳しい被害状況については現在調査中です」

実際の被害状況は大魔王ハルカの襲来よりは少ない。今回の被害は大型台風が直撃したときの被害状況に酷似している。

少しの間クラウスは考え込み、エルザ元帥に視線を向けた。

「エルザ元帥、カーシャの素性調査はどうなっている？」

「魔導学院で教員をしていた以前の経歴は一切不明です」

魔導学院時代のカーシャのことはクラウスもよく知っている。なぜならば、彼もエルザと同じように魔導学院でカーシャの授業を受けていた生徒だったからだ。

エルザ元帥は話を続けた。

「ルーファスという人物がカーシャと親しいようで、彼ならば何か知っているかもしれませんが（いや、絶対ルーファスならば、あの女狐の過去を知っている）」

「では、そのルーファスという男に話を聞いて参れ（ルーファ

ス……か」

クラウスはルーファスと同年で、魔導学院時代は仲のよかつた友であつた。

会議が終わり人々が部屋の外に出て行く中、エルザはクラウスによつて呼び止められた。

「エルザ元帥、この場に残つてくれ、大事な話がある」

「……（私に話？）」

部屋に二人つきりになつたところでクラウスはゆっくりは話し始めた。

「今は国王と元帥の関係を抜きで、君と話がしたいエルザ“先輩”」

「……わかつた（先輩か、懐かしい響きだ）」

魔導学院時代、クラウスとエルザは先輩と先輩の関係であつた。二人の口調もそのためか少し砕けた感じた。

「僕は今回の事件　僕自らカーシャの元に出向きたいと思つている（ルーファスやカーシャが事件に絡んでいるなら、僕が行かなくてはいけない）」

「それはできないことだ。国王が危険に自ら飛び込むなど、誰も許してはくれない」

「だから、君と一緒に来て欲しい。この城を隠密で抜け出すにはエルザの力が必要なんだ」

「昔からクラウスは一度こうと決めたら意見を曲げないからな。仕方ない、私の首をかけてクラウスの供をしよう（これで、クラウスにもしものことがあつたら、私の命だけでは償えん

な」

「すまないエルザ」

決意を胸に秘めてクラウドは窓の外を見た。

「（もし、ルーファスがカーシャ手助けをしているのならば、僕は自らの手でルーファスを捕まえる）」

この日、カーシャ + おまけ VS アステア王国を先陣とした世界の全面戦争の火蓋が切られた。

第一〇話 決別しちゃいました

床に這いつくばっていたルーファスが、やっと立ち上がったときには、魔導砲はすでに放たれていた。

「本当に撃つことないだろカーシャ！」

こんなにもルーファスが強く出るのも珍しい。ルーファスは激怒しているのだ。それもかなり。

ルーファスはびしつとばしつと堂々とカーシャを指差した。

「カーシャが世界征服をするなら、私はカーシャの敵になるよ

（……ハツキリ言ってしまった。後が怖いかも）」

「ふふ、私の敵だと？ この世界征服はハルカの世界征服だ。

つまりおまえはハルカの敵になるということだな？」

「……統治（ふつ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。そして、話を続ける。

「征服じゃなくて統治（ふあふあ）。ハルカを全知全能の唯一絶対の神として君臨させて、絶対君主による完全なる統治がボクの目的だよ（ふあふあ）」

この場の状況というか雰囲気可笑しくなりはじめている。

『はい、は〜い』と言った感じでハルカは手をあげて発言した。

「あの、カーシャさんは……やり過ぎだと思っんですけど（ああ、言っちゃった）」

「ほう、ハルカも私に口答えする気か？（喧嘩上等！）」

冷酷な表情をしてカーシャはハルカとルーファスを睨んだ。まさに蛇に睨まれて蛙状態である。

思わずハルカとルーファスは一步と言わず、一〇歩ほど後ずさりをしてしまった。

ルーファスはハルカを抱きかかえて共同戦線を張った。

「ハルカをダシに使って、自分が世界征服をしたいだけなんだから！（……ヤバイ、また口が滑ってしまった）」

「そうですよ。今回はかりはカーシャさんに付いていけません（……ルーファスにつられて私も言っちゃったよあ）」

一方的に押されぎみの二人を助けるようにローゼンクロイツが割った入った。

「魔女の方法はいいと思ったんだけどな（ふあふあ）。ハルカが魔女と決別するなら、ボクはハルカ側に付くよ（ふにふに）」

ここで完全にカーシャVSハルカたちの対立の構図が完全にできあがってしまった。ひとりになったカーシャはどうする!?

「私はやるぞ（走り出したら止まらない……ふふ、ビバ世界征服）」

だそうです。カーシャはひとりでも世界征服をするつもりらしいです。

決別したカーシャは部屋を出て行こうとした。それをルーファスが止める。

「どこ行く気？」

「おまえたちとは絶交だ。私はシルバーキャッスルに帰る（あそこに帰るのは何年ぶりか？）」

「そういう残すと、カーシヤは姿を消してしまった。それを追うものは誰一人としていない。ローゼンクロイツを除く二人は、絶対にカーシヤを止めることは不可能だと思っっているからだ。」

「ローゼンクロイツが軽い咳払いをした。」

「じゃあ、そういうことで魔女カーシヤを倒しに行こう（ふあふあ）」

「はあ？」

いつも通り息がぴったりな二人。ハルカとルーファスは声をそろえて裏返った声を出して、間の抜けた表情をした。

「世界征服を企む魔女を正義の味方ハルカが倒しに行くんだよ（ふにふに）。そうして世界に恩を売って、ハルカを世界に君臨させるんだよ、わかった？（ふあふあ）」

この男、カーシヤよりも悪いやつかもしれない。

半日三度目のホログラム映像が世界に発信された。

その内容とは、カーシヤは世界の敵であり、ハルカ率いる薔薇十字団はカーシヤを討伐してみえるというもの。つまり、薔薇十字団はカーシヤと一切関係ないと世界に伝えたのだ。……いわゆる、トカゲのしつぽ切り。

「じゃあ、ハルカとルーファスはカーシヤを身命にお縄にして来てね（ふあふあ）」

「はあ？」

本日何回目だっただろうか？　またまたハルカ&ルーファスは声をそろえて驚いた。

「ちよつと待ったローゼンクロイツ、君はもしかしていかなない気？（カーシャを敵に回すなんてできるわけないじゃん）」

「そうですよ、私はただの猫ですし（にゃ〜んつてね）」

二人の発言はなかつたことにされて、無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。

次の瞬間、ハルカ&ルーファスは路上の真ん中に突っ立っていた。

「……飛ばされた!?（ローゼンクロイツに外に飛ばされたのか!）」

そのとおり、ルーファスが思ったとおり、二人は路上に強制的に飛ばされていた。

「ルーファスがいたぞ!」

自分呼び声が聞こえたので、ルーファスがふと後ろを振り向くと、そこには鎧を着たゴツイ兄さんたちが大勢こちらに向かって走ってくる。

「何あれ!?（私何かしたっけ?）」

次の瞬間はルーファスはハルカを抱きかかえて走っていた。初心者というかなんていうか、悪いことをしていないのに逃げしまった。

もちろん、逃げたら普通は追いかける。ルーファスの後ろからは恐い顔の兄さんたちが追いかけてくる。そして、追いかけられたら普通は逃げる。

「何なのあの人たち、ねえルーファス？（なんか厄介なことに巻き込まれた感じ）」

ハルカの不幸は続く。その不幸に巻き込まれる率はルーファスといい勝負。つまり、二人が一緒にいれば破滅的な人生を送ること間違いなしなのだ。

「なんでだろうね？ 私にもわからないよ（心当たりならいっぱいあるけど）」

「じゃあ、逃げないほうがいいんじゃないの？」

「でも、乱暴とかされたら怖いしさあ」

「……へっばこでも魔導士なんだから、少しは強いんじゃないの？（私が魔王に身体を乗っ取られてた時のルーファスはカツコよかつたのになあ）」

「私は平和主義だか わあっ!？」

突然、ルーファスの首根っこは何者かに捕まれ、路地裏に連れ込まれた。ま、まさか、拉致監禁暴行か!?!?

フードをかぶったローブ姿の二人組みがそこにはいた。

「話は後だ。今は追っつてから逃げよう」

フードの中から聞こえる若い男の声はそう言った。

「テレポート！」

声を発する魔法。すなわちこのフードの男はライラの使い手ということになる。ちなみに先ほどローゼンが使った魔法はマイラと呼ばれる特殊な部類に入る魔法だ。瞬間移動系の魔法は高度な魔法のため、使い手は極僅かである。

ここにいた四人は瞬時のうちに別の場所に移動し、ここに駆

けつつけた兵士たちは丸い目をして顔を見合わせた。

アステア王国の首都外の平原に瞬間移動して来た四人。

フードをかぶっていた二人はハルカ&ルーファスにその顔を見せた。

一人目はエルザ元帥。そして、もう一人はクラウス国王。

「やあ、ルーファス。久しぶりだね（相変わらずだな、こいつは）」

「ああっ!? クラウスがなんでここに?（城の外に出るなんて、しかもエルザと一緒に?）」

素っ頓狂な声をあげてルーファスは目を丸くした。だが、ハルカはクラウスのことを知らない。

「誰なのこの人?（顔立ちはルーファスよりも端整で、ちょっ高貴な雰囲気のごとなくある人けど……?）」

エルザがどどんと胸を張って前に一歩出る。

「ここに仰せられるお方は、クラウス国王様であらせられる」

「マジで!?（この人が王様なんだ。結構若いみたいだし、なんでルーファスなんかと知り合いなんだろう?）」ルーファスと国王様はどんな関係なんですか?」

「僕とルーファスは学院時代の友達でね。ああ、それからこれ

はお忍びの旅だから、王様っていうのはやめてくれるかな?

クラウスって呼んでくれ」

「（王様とルーファスが友達!? このへっっぽこ魔導士と?）」

ハルカがどう思おうと、ルーファスとクラウスが友達なのは

変えられない事実で、そうなんだからしようがないとしか言えない。

「僕とエルザはカーシャを捕まえに行こうと思っっているんだ。そのためにルーファスの力を借りたい」

「こんなへつぽこ魔導士に!?(無理無理、カーシャさんに敵うわけないじゃん)」

「へつぽことは失礼な。私だって道案内くらいはできる!」

胸を張って堂々と言い放ったルーファス。でも、全然胸を晴れることではないのは、誰もが思うこと。魔導士としてはやはりへつぽこなのだ。

「では、さっそく道案内を頼む(今は胸を張って言うことなのか?)」

エルザに本当に道案内を頼まれてしまったルーファス。しかし、彼は道案内に胸を張っていた。

「任せて、道案内なら。カーシャのところに案内すればいいんでしょ? でも、かなり遠いよ」

テレポートならば瞬時に行くことができるかもしれないが、テレポートとは基本的に行ったことのある場所でないといけないと行くことができない。基本的というのは、その場所の映像などの情報があれば、行けるかもしれないからだ。

ここでひとつわかったこと、つまりルーファスはテレポートが使えない。使えるものの方が稀なのだ。

ここにいるメンバーでテレポートが使えるのはクラウドだけだった。

「そこは僕の行ったことのない場所なのかい？」

「うーん、えーと、行ったことはあるけど、途中まで……（ああ、嫌な思い出を思い出しちゃったよ）」

腕を組んだ状態でルーファスの表情が強張っている。それを不思議な顔をしてハルカがルーファスの顔を覗き込む。

「どうしたの、顔が真っ青だよ？（いつもこのことのような気もするけど。いつもこんな表情ばかりするよね）」

「……私がカーシャと始めて出会った場所にカーシャはいる。その場所は……魔導学院の校外実習で行った雪山」

この言葉を聞いたクラウスの少し顔を強張らせた。
「あの地獄の校外実習か……（思い出しただけで身震いする）」

地獄とはいったいどんな実習だったのか？　もしか雪山ですっぽんぽんとか？

「でも、確かルーファスは帰り道で遭難して？（そうか、その時、ルーファスはカーシャと出会ったのか）」

そう、その時にルーファスはカーシャと出会った。しかし、遭難して帰ってきたルーファスはそのことを誰にも話していない。聞かれても何も覚えてないとウソをついていた。その理由はもちろん、カーシャによる説得（脅迫）があったからだ。

カーシャに脅迫されて今まで誰にも言わなかったカーシャとの出会い。そのことを思い出したルーファスは突然、慌て出した。

「あ、あの、うん、雪山でなんかカーシャと出会ってないよ

（危ない、危ない、口を滑らせるところだった）」

十分口は滑っていると思うが、ルーファスにとってはこれだ。精一杯の言い訳なのだ。

空気を切り裂き、何かが煌いた。

「言え、ルーファス！（あのカーシャのこととなれば黙っては
いられぬ）」

ルーファスの首にはエルザの抜いた剣が突きつけられていた。
「え」と、カーシャの正体がなんであるかなんて口が滑っても
言えるわけじゃないじゃん。でも、居場所くらいなら、言えるかな
あゝ（……こ、殺される）」

またルーファスは口を滑らせた。『正体』ってことは今のカ
ーシャの姿は仮の姿だと言っているようなものだった。

首に突きつけられた剣がぐぐくと動いた。

「……言え」

ドスの利いた低い声だった。

「言ったら私が殺される（言わなくても、今殺されそうだけ
ど）」

あまりの怯えようのルーファスの首から剣が離された。エル
ザは少々呆れた顔をしている。

「ふう、仕方ない。場所案内だけでいいだろう（だが、カーシ
ヤの首は私が……）」

もしか、エルザはカーシャを殺す気満々とか？

「では、僕のレポートでグラージュ山脈まで行こう。その後
の道案内はルーファス頼むぞ」

今のクラウス言葉に頼りなさ気に頷いてみせるルーファス。彼は本気でカーシャが恐い。それはハルカも同じだった。

「（ああ、カーシャさんと戦うことになるのかなあ。ヤダなカーシャさんって冷血なんだもん）」

クラウスは目をつぶってグラーシユ山脈のイメージを頭に思い浮かべた。これに失敗するとんでもない所に行ってしまう。実は、時には空間の狭間に閉じ込められて出れなくなることもある危険な魔法なのだ。

グラーシユ山脈。そこはクラウス王国の北に位置する極寒の山岳地帯。クラウス王国全体はやや温暖で過ごしやすい地域なのだが、この山脈地帯だけがなぜか気温が異常に低い。その気温は平均で零下二〇度で、最低気温はだいたい零下五〇度に達するという。

グラーシユ山脈には特殊な生物以外は全くいない。そのため過去に一度だけ魔導学院の実習場所として選ばれたが、あまりにも過酷だったためにそれ以降の実習では使われない場所だ。

イメージが固まった。昔のことだったのでだいぶイメージを固めるのに時間がかかったが、準備は整った。

「テレポート！」

次の瞬間、平原から四人の姿が消えた。

第一話 氷の城へようこそ

寒い、寒い、じつに寒すぎる山脈。

だが、魔法で透明な服のようなものを着ているのでだいじょうぶだった。

「はあ、なんかぼかぼかしますねこれ（こたつの中に入ってるみたい）」

夢心地にハルカ。こたつを愛するハルカはこれでまた猫に一步近づいた。

ハルカが眠りそうになつてすぐに、その城は見えてきた。氷でできたような城 昔のカーシャのご自宅だ。

城の壁は石でできているが、その周りは全て氷に包まれ、城から突き出る塔はまるでつららを逆さまにしたような形をしている。

城門は開けられていた。もしや、これは『かかつて来れるもんなら来てみる』というカーシャの意思表示なのかもしれない。城の床にも氷が張っていてスパイク靴を履いていないと滑つてしまう。ちなみに今は魔法でどうにかしているので普通に歩ける。

「（なんだか、スケートとかできそうなところだなあ）」
そう思いながらハルカはルーファスに抱きかかえられながら、辺りを見回す。

廊下には窓から差し込む輝く光と、炎が灯され、とても明る

い。この炎は普通の炎の色とは違い青色をしていて、触るとしても冷たい。

長い廊下を進み玉座の間まで来た。そこで一行を出迎えたのは、

「誰のあの金髪の人？（カーシャさんがいると思ったのに）」

金髪の白い薄手のドレスを着た優美な女性。それを見たハルカは不思議な顔をしたが、ルーファスは身も凍る思いで、一歩後ろに足を引いた。

「また金髪に戻したんだねカーシャ（カーシャが私のこと恐い目して見てるよお）」

金髪の女性はカーシャだった。ハルカの知っている この場にいるルーファスの除く全員が知っているカーシャの髪の毛の色は黒だ。

「ふふ、ようこそ我が城、シルバーキャッスルへ（ここに来たからには、身も凍るような、あゝんな目やこゝんな目に遭わせてやる）」

金髪のカーシャ それは彼女が氷の魔女王と呼ばれていた時代の髪の色。

「カーシャ先生、お久しぶりです（金髪？）」
クラウスが一步前に出た。

「我々アステア王国はあなたの討伐に乗り出しました。ですが、僕としては穏便にことを済ませたいのです。どうか、僕に捕まっ
つて頂けませんか？」

「ヤダ（びよ〜ん……ふふ）」

即答だった。カーシャは人の言うことを聞くのが嫌いな女だ。「なんだとカーシャ！ 国王が穩便に済ませようと言っているのだぞ！（相変わらず嫌な女だ）」

エルザは剣を抜いていた。もう、戦う気満々なのだ。だが、ルーファスは絶対カーシャと戦いたくない。カーシャと友達だからとかではなく、どんな目に遭わされてしまおうかが恐いからだ。

「まあまあ、ここは話し合いでもしようよ（どうにか丸く治めないと）」

「ヤダ（びよ〜ん）」

また即答だった。もう一度確認のために言うが、カーシャは人の言うことを聞くのが大嫌いな女だ。

「カーシャさん、世界征服なんてよくないですよ、ね？（この人に世界征服なんてされたら……恐い）」

「ヤダ（びよ〜ん）」

またまた即答だった。改めて言うが、カーシャは人の言うことを聞くのがちよ〜大嫌いな女だ。

「くそお〜、この女狐が！ こつちが下手に出れやればいい気になるとは、許せん！」

怒り頂点で大爆発。エルザは本気で殺るべく、カーシャの切りかかって行った。

「たがが人間の分際でうるさい女だ、ピンクのうさしやさん人形に変えてやる（うしやさん……LOVE!）」

剣がカーシャの頭上に下ろされそうになったその瞬間、カー

「シャは鋭い目つきでエルザを 視た。

振り下ろされた剣。しかし、それはぬいぐるみの剣だった。その剣を振っているのは小さなピンクウサギだった。

「えいつ、ていつ、カーシャ覚悟しゆる！（……なにか、様子が変だ）」

舌つ足らずの可愛らしい声でしゃべっていたエルザは気がついていた。

「まさか、この私がカーシャの魔法で！！（あり得ない、私はエリートだぞ！）」

エルザ的シヨック！ 今までの人生をエリート街道まっしぐらで元帥まで上り詰めたエルザには信じがたい屈辱だった。

自信喪失で燃え尽きて灰になってしまったエルザはその場で固まってしまった。それを見たカーシャは満足そうに不敵な笑みを浮かべる。

「次は誰だ？（ふふ、世界中の人間をうさしゃんに変えてやる）」

カーシャの冷たい声が静かな城の中に響き渡った。

そのころ全世界では、魔女カーシャVSハルカの戦いが巨大ホログラムスクリーンによって映し出されていた。もちろんローゼンクロイツの仕業だ。

カーシャVSハルカの映像を流して、見事ハルカがカーシャをやっつける映像を全世界に広めようとしているのだ。

ローゼンクロイツの思わく通り、世界中の人々は戦いを見守

り、ハルカを応援した。ちなみにクラウドが城を抜け出したことは全世界にバレた。

もうひとつちなみに、クラウドを含めてルーファスとエルザはハルカの下僕ということになっている。そういうことにしてこの戦いは“実況中継”されていた。

この実況をしているのはローゼンクロイツの雇った実況のブ口と、特別解説員としてこの場にいる牢屋を抜け出したヨハン・ファウストだった。

「なかなか、面白い戦いだ。クク……私は誰が勝とうが構わな
いがな」

「おおっと、クラウド国王がカーシャに向かつて走り出しまし
た！」

実況の言葉の通りクラウドはカーシャに向かつて走っていた。
言うことを聞かないカーシャに対して、彼は実力行使に出たの
だ。

「カーシャ先生、少し悪戯が過ぎますよ（ウサギってギャグだ
ろう）」

クラウドの手から放たれる輝く鎖。これで彼はカーシャの身
体を拘束しようとした。だが、カーシャには通用しない。

妖しく輝く瞳で見つめられたクラウドはピンクのうさしゃん
になつてしまった。そして、すぐさまカーシャは牢獄を作り出
し、クラウドとエルザをその中に封じ込めた。

「ふふ、ルーファス、私と戦うか？（喧嘩上等……ふふ）」

「遠慮しとくよ（私がカーシャに刃向かったらうさぎどころじ

やないよ、きつと）」

「何言ってるのルーファス!? もう、頼りになるのルーファスしかないんだよ（本当に頼りになるかは微妙だけど）」

だが、ルーファスは何も言わなかった。その反応を見てハルカは頬を膨らませて怒りをあらわにした。

「ルーファスのばか！（役立たず、腰抜け、へっぽこ！ ルーファなんて嫌い）」

「だったら、ハルカがこの私と戦うか？（かかって来いや……なんてな）」

冷たいカーシャの声でハルカの胸が突かれた。

「まさか、私がカーシャさんと戦えるわけじゃないじゃないですか。だって私、猫だし」

「この戦いは世界の覇権をかけたハルカと私の戦いなのだぞ」
「いつから、そんなことになったんですか!？」

「私に勝って世界を手に入れたら、家に帰れるかもしれないぞ（本当のところはどうだか知らんがな）」

「……（世界に帰る）。そうよ、私もこの世界に帰りたいよ。ねえルーファス、私のためにがんばってよ」

少し潤んだ目でハルカに見つめられたルーファスはため息をついた。

「はあ、たしかに私がどうかしないといけないことだよね（ハルカをこっちの世界に呼んじやったのは私のせいだからね）」

「よし、それでこそルーファスだよな。じゃあ、カーシャに向

かってレッツゴー！」

レッツゴーと言われても少し困る。ルーファスはカーシャに刃向かいたくないが、ハルカをもとの世界に帰さなければならぬ。板ばさみにされて窒息しそうだ。

その時だった。この場に新たな新キャラが登場したのは！

白髪白髭の杖を突いた見るからにヨボボヨの爺さんがこの場に乱入して来た。

「やつとこさ見つけたぞ、魔王王カーシャよ（こやつを探すのに、はて、何年くらいの月日を費やしたかのあ？）」

「誰だおまえは？（この爺さんは誰だ？）」

全く記憶に御座いません状態のカーシャ。この老人の正体とは？

「わしのことを忘れたのか、この魔女が。わしは……わしは……誰じゃったかの？（ロバート、ポール、エリザベスじゃったかの？）」

この老人はだいぶボケていた。

「ああ、思い出したぞ、わしの名前はハインリヒ・ネットスハイムじゃった（少しボケたかのあ？）」

だいぶボケている。

名前を聞いてもカーシャはこの人物について思い出せなかった。もしかして、老人は自分の名前を勘違いして、別の名前を言ったのか。いや、違うこれが彼の本名で、人々に知れ渡っている名前は別にある。

驚いたルーファスは裏返った声をあげた。

「もしやあなたが、かの有名なアグリッパ様ですか？（……そんなわけないか、このボケ老人がね）」

「おお、そうじゃ、その名前じゃ。その方が世間様に知れ渡っておる」

「ああ、思い出した（だいぶ歳をとっていたので見た目ではわからなかった）」

「ぼそりと呟いたカーシヤはやつと思ひ出した。この男は“過去”にカーシヤを討伐するために編成された魔導士の一団のひとりだった。」

だが、今ごろカーシヤの城を見つけるなど、たまたまカーシヤがここに帰っていなかったらどうする気だったのか？ もしろ今まで探し続けていた彼の根性はスゴイと褒めてあげたい。なんせ、一〇〇〇年以上もの月日を費やしているのだから。

「よく、人間が永い時を生き長らえたものだ。で、今更アグリッパが私に何のようがあるというのだ……まさか私を倒すなんて言うわけがないな。（こんなご老体のヨボヨボ爺さんがな）」

「わしの仲間は長い時の流れの間にみんな死んでしまったわい。残っているのはわしだけだ。仲間のためににもお主の首を貰わねばならん。じゃが、なぜわしをお主の首を狙っておるんじやったかの？（こそ泥だったか、わしの逃げた女房だったか？）」

ボケてまで追い手を追い続けるとは大した執念だ。

このアグリッパがカーシヤ討伐の旅に出たのは、もちろん過

去に魔女王としてカーシャが人々に恐れられていたからだ。

キラリ〜ンとカーシャの目が妖しく輝いた。またまたとんでもないことをいいそうな空気がこの場を包み込む。

「では、こうしよう。ハルカ&ルーファスチームとアグリツパと私で三チームに分かれて戦い、勝った者が世界を自分のものしていい権利を持つことにしよう。魔導砲の制御装置はこのイヤリングだ。これを勝者にはくれてやる（勝つのは私だがな、どんな手を使っても私は勝つ……ふふ、卑怯者）」

蒼い宝石の付けられたイヤリングが妖しく輝く。

アグリツパの杖を高く上げて笑い出した。

「ふおおおお、そうじゃった。わしは世界の覇権を賭けて戦っているんじゃない（いや、違ったかもしれない）」

別に世界の覇権を賭けてカーシャを探していたわけではない。彼の発言はだいぶ外れたことばかりだ。

なんだかわからないうちに世界の覇権をめぐる戦いが勃発。しかもアグリツパまでもがその戦いに強制参加。

マナと呼ばれる魔法エネルギーが風を巻き起こし、この場に戦慄を呼ぶ。

杖を構える老人はただのポケ老人ではなかった。魔法を使うの能力は歳とは関係ない。老人の魔力は凄まじいものだった。相手の発するマナの力に負けじとカーシャも出力をあげる。

この場についていけないのはルーファスとハルカだった。二人は隅っこで小さくなっている。できれば戦いに巻き込まれたくないのだ。

「あのさあ、ルーファス、ちょっと耳貸してくれないかな？」
「何ハルカ？」

小さなハルカの身体をルーファスは持ち上げて、耳元に近づけた。

「カーシャさんのイヤリングを奪うことできないかな？ そうすれば全部丸く治まると思うんだけど？」

「そうだね、どうにか隙を見てイヤリングを奪おう（でも、どうやって？）」

ポケットに入った財布ならまだしも、耳についたイヤリングを盗むのは大変困難だ。むしろ、普通は無理。

アグリッパは呪文を唱えるべく杖を高く掲げた。この杖はマナの増幅装置の役目を果たしている。

「セ……セイ……呪文が思いだせん（はて、何の呪文を唱えようと思ったんじゃないかのお？）」

「ホワイトプレス！」

カーシャは老人を殺るつもりだ。老人愛護の精神なんて微塵もない。てゆーか人殺しなんて悪いことを本気でするつもりだ。

白い煙のようなプレスが老人に襲い掛かる。

「そうじゃった、ファイアープレス！」

小柄な老人の杖から巨大な炎が吐き出された。

白と紅がごおーっという音を立てて混ざり合い、相殺した。

そのエネルギーが凄まじく、巻き起こった爆風によってルーファス&ハルカは大きく吹き飛ばされてしまった。

完全にルーファス&ハルカは置いていかれている。彼らの出

245 大魔王ハルカ（旧）

る幕はない。

第一二話　こんなのアリ!?

アグリツパは呟いた。秘術を発動させる気なのだ。

氷の床にひびが入り、地響きとともに地面の底から何かが突き出た。頭だ、巨大な頭が突き出たのだ。

地面の底から生まれ出た石の巨人。それはゴーレムと言われるものだった。

ハルカがルーファスに尋ねる。

「あれって何なのルーファス？」

「ゴーレムって呼ばれている石や土で造った巨人のだよ（すごいなあ、あれが本物なんだ）」

二人が見ていると、ゴーレムはゆっくりと重い足を動かした。足が地面に下ろされるたびに地面が割れる。

のっし、のっしと歩いてくるゴーレムを冷たい目で見るカーシャ。ゴーレムが相手ではカーシャは少し分が悪い。

「……どうしたものか（石に効果のある魔法は？）」

考え事しているカーシャの身体を巨大な手が掴んで、そのままに持ち上げた。それにカーシャは全く動じない。まだ、考えを巡らせているのだ。

「ふおおおお、手も足も出ないようじゃな」

「いや、手も足も出ているぞ（な〜んてな）」

握られているのは胴体なので、カーシャの手と足は自由に動かした。だが、もちろんアグリツパが言っているのはそんなこ

とではない。

ハルカはチャンスだと思った。

「ルーファス、今がチャンスだよ！（ほら、早く行かないや）」

「よつし、行くぞお〜！（ヤケクソだあつ〜）」

捕まったカーシヤを見てルーファスはここぞとばかりに走った。とにかく走った。そして、ゴーレムの身体をよじ登ってカーシヤのもとに行った。

「そのままじつとしててよ」

「なにをするルーファス!?（まさか、私が動けないことをいいことに、唇を奪う気か!）」

奪うは奪うでも奪う違い。ルーファスはカーシヤのイヤリングを奪おうとした。が、取れない。

「あのさあ〜、これってどうやって取るの?」

「ああ、このイヤリングなら、こうやって」

カーシヤは自ら両耳のイヤリングを外して見せた。それをチャンスとルーファスはカーシヤの手からイヤリングを掻っ攫って逃げた。

今のルーファスの行動は作戦ではない、本当に取り方がわからなくて聞いたなら、律儀にカーシヤが取って見せてくれたのだ。カーシヤ不覚。

「待てルーファス！」

カーシヤの手から氷の刃が放たれ、ルーファスの掠めて飛んでいく。

「待ったらヒドイ目に会うからやに決まってるでしょ！」

まんまとルーファスはとんずらして柱の陰に隠れた。

「ふう、どうにか逃げ切れた（死ぬところだった）」

「すっごいよルーファス！ やればできるじゃん」

柱の影でルーファスを出迎えたハルカは賞賛の言葉を投げかけた。

「カーシャさんから盗むなんて、これでこっちの勝ちも同然だね！」

辺りの気温が突然下がった。

「ふふ……それはどうか？」

蒼ざめるハルカ&ルーファス。二人の視線の先にはカーシャが立っていた。それも白銀の髪をした蒼い瞳の覚醒しちゃってるカーシャが立っている。

「な、なんでカーシャが!? ゴーレムは? アグリツパ様は?

（まさか……!）」

まさかのまさか、まさかの頭痛がルーファスに襲い掛かる。

あまりの衝撃にルーファスは頭が痛くなってしまった。

氷の床に散乱する石の塊。そして、ずいぶんとヨボヨボなピンクのウサギ。カーシャ恐るべしである。

イヤリングを盗まれたことに激怒したカーシャは、マナの波動だけでゴーレムを粉碎して、すぐさまアグリツパをピンクのうさしゃん人形に変えたのだった。

もうカーシャに適う者はいないだろう。今のカーシャはなんでもアリ状態だ。

「ふふ、ふふ、ふふふ……今なら二人ともお尻一〇〇回叩きで許してやろう。さあ、イヤリングを返せ」

「はい、どぞ返します（お尻一〇〇回叩きで済むなら）」

「ダメだよルーファス！ 世界の危機なんだよ、世界がカーシヤさんの物になってもいいの！」

「いいよ、私は今だつてカーシヤに使われてるし（よく考えれば、今とあんまり変わらないんだよねえ）、あはは）」

「ばかあ、ばかばかかばルーファス！（もう、ルーファスなんて大ツキライ）」

最後だけ『かば』になっている。

「そうだよね。私が悪かったよハルカ。こんな物」

イヤリングを持ったルーファスの手が大きく上げられた。彼はイヤリングを破壊するつもりだった。それを見たカーシヤが叫ぶ。

「やめろ！（割れ物注意なんだぞ、そのイヤリングは！）」

手が振り下ろされたとほぼ同時に、蒼い宝玉の付いたイヤリングは、地面に叩きつけられて四方に弾けて砕け散った。

この展開にカーシヤの顔が蒼ざめた。普段から白い顔をして顔色の悪いこのカーシヤが本気で顔を蒼ざめさせたのだ。

「アホかキサマは！ 制御装置を壊したら魔導砲が発射されるかもしれないだろうが！」

「えっ!？」

この二人、ホントに最近息が合ってきた。コンビとしては申し分ない。

ハルカの手が上げられた。

「は〜い、それって本当ですか？ でも、カーシャさんだって魔導砲を撃つもりだったんでしょ？」

「撃つわけないだろうが、脅しだ。本当に撃つたら自分も死ぬだろ！（アホかこいつらは！）」

しばしの沈黙。

「ムジュー…」

この二人は双子なのだろうか？ 声がそろいすぎだ。

「あつ（入ったみたいだ）」

「なにっ？」

声をそろえる特訓でもしているのか、この二人は。

「魔導砲のスイッチが入っちゃったみたいだな…：テヘツ（今日という今日は笑えないな…：ふふ）」

そう考えながらも心で笑っているカーシャ。それは苦笑だった。

絶体絶命大ピンチ。それも世界規模でピンチ。世界破滅へのカウントダウンが開始された。

「世界を吹っ飛ばすくらいエネルギーを放つには少し時間が要る。魔導砲が放たれるのはだいたい一時間後だな（ジ・エンドだな…：ふふ）」

「そんなバカなことあるわけないじゅあ〜ん！」

そう言っている本人がスイッチを入れた張本人だ。

スクリーンに映し出された映像を食い入るように見ていた世界中の人々は、泣いたり、叫んだり、踊ったり、とにかくパニ

ツク状態になった。

まさか、三時間後に世界が吹っ飛ぶなんて信じられない。毎日普通に過ごし、明日が当然のように訪れていた全ての人々や生物たちの運命が一転した。

次の朝が来ない。生物はいつ死ぬかわからない。しかし、一時間後の死を受け入れるなど現実味がない。

なが〜い沈黙が訪れた。成す術は本当にないのか？

突然、カーシャが手を叩いた。

「あつ、そうだ。この城にも魔導砲があった」

「本当ですかカーシャさん、私たち助かるんですか？」

「わからんな（たぶん無理だ……ふふ）」

無理ってどういうことですかカーシャさん！

カーシャは歩き出し、弱っていたヨボヨボのピンクのうさしやんを人間に戻し、牢屋に入れていたピンクのうさしやんも人間に戻し、言った。

「世界を救うためにおまえたちも協力しろ（私はまだ死にたくないからな）」

世界を救うのは二の次で、本当は自分が可愛いカーシャであった。

「キサマ、よくも私とクラウドをウサギに変えたうえに牢獄に閉じ込めてくれたな！」

「昔からうるさい小娘だが、今はそれよりも、魔導砲のスイッチが“ルーファス”の不注意で入ってしまった。あと三時間でこの星に到達するだろう。そこで我が城にある魔導砲でこの星

に飛んでくる魔導砲を相殺する。だが、この城の魔導砲もエネルギー不足で宇宙空間にある魔導砲を相殺できるか微妙だ（むしろ、不可能に近いな）」

ここにいる魔導士たちのエネルギーを注ぐ込み、魔導砲を撃つ。だが、カーシャの考えでは、ここにいる魔導士だけではエネルギー不足であった。そのことにはクラウスも気が付いた。「僕たちだけのマナでは無理だろう。いくらカーシャ先生でもアグリツパ様でも、世界を吹き飛ばすほどのマナを魔導砲に注ぎ込むことは不可能」

痛いところを突かれた。かなりど真ん中の凶星だった。

この展開は世界中の人々に実況中継されていて多くの人々が観ている。その中にはこの人物もいる。

《僕の出番のようだね（ふにふに）》

カーシャのすぐ横にローゼンクロイツのホログラム映像が映し出された。

《今、ここにいる君たちの映像は世界中の人々が見ているんだよ（ふあふあ）。つまり、その人たちに呼びかけて、魔導砲にマナを送ってもらうことにしよう（ふにふに）。魔導砲に人々のマナを送る転送に関しては僕が引き受けるよ（ふあふあ）。ところで、その魔導砲はどこにあるんだい？（ふにふに）》

「この城全体が魔導砲なのだ（……ふふ、これでも世界を破壊できるだけのエネルギーを放つことができる代物だ）」

ただ、地上にある魔導砲で地上を攻撃してこの星を吹っ飛ばすことができないので使用していなかっただけのこと。だが、

それ以外の問題として、エネルギーが注ぎ込まれておらず、使用が不可の状態になっている。

魔導砲を撃つには魔導砲にエネルギーを注ぎ込まなくてはならない。宇宙空間にある魔導砲は今宇宙にあるマナを溜めている最中なのだ。

自分の玉座に向かったカーシャは、その玉座の肘掛けの裏にあつたスイッチを押した。すると城全体が淡く光り出し、どこからか歯車の回る音や物が動く音が聞こえてきた。

「さあ、この城にマナを注ぎ込むのだ」

カーシャの言葉にここにいる魔導士たち、そして世界中の人々がこの城にマナを注ぎ込んだ。それに反応して城の輝きが一層強くなる。だが、まだまだ足りない。

世界中の人々が、世界中の全てのものたちが一丸とならなくてはいけない。

世界各地で祈りを捧げる人々。魔導士でないもの身体にもマナの力は宿っている。全てのものにマナは宿っているのだ。

この星、ガイアにもマナは宿っている。この星はひとつの生命体と言えるのだ。

地上に生まれた生命はガイアから分離した小さなマナを宿し、時を経て果て、そしてガイアに還っていくのだ。その循環により、この世界は行き続け、成長していく。

地上が淡い光を放ち、命の鼓動が地面の奥底から聴こえてくる。この星、この星に全てものたちがこの城にマナを注ぎ込む。長い間、世界の祈りは続いた。そして、辺りが暗闇に包まれ

空に星が輝き出したころ、星とは別の輝きが東の空に現れた。

宇宙から魔導砲が放たれた。それは地上から肉眼で確認できるほどの大きさであった。あの魔導砲が地上にぶつかつたら、この星が木っ端微塵に砕ける。本当に魔導砲の光を見て、人々は改めて認識した。

日の光よりも明るい輝きが宇宙から飛来してくる。だが、地上の魔導砲のマナはまだ足りない。

マナを注ぎ込む人々の疲労は極限に達していた。ハルカたちもそうだ。

「うう、体力っていうか、なんかスゴイ身体がだるいんだけど？」

「マナは命の源だからね。でも、今はやらなきゃいけないんだ」

真剣な顔をしてこう言ったルーファスの横顔はいつもより、ちよっぴりカツコよくハルカの瞳には映った。

飛来してくる光はすぐそこまで迫っていた。

エルザが大声で叫ぶ。

「まだ、マナは足りないのか!？」

「もう、少しだ（だが、全出力で撃つても……ふふ）」

カーシャの額から汗が流れる。カーシャの額からだ。ちなみにアグリッパ老人の様態はかなり悪い。

宇宙から飛来する魔導砲が大気圏に突入する寸前、カーシャが大声を出した。

「発射だ!」

城全体が激しく揺れ、唸るような音を出した。

「おおおおおっという凄いい音を立てながら、城から光の柱が天を貫くように伸びた。」

魔導砲と魔導砲がぶつかり合い、目を開けられないほどの光が地上に降り注ぎ、人々は空の上で何が起きているのか、感じることでしか確認できなかった。

光と光のぶつかり合いは世界から闇を消して、全てを白い世界で包み、呑み込んだ。そして、世界は

ハルカは目覚めた。

「……あれ、ここって？」

見覚えのある部屋。TVや机、そして、お気に入りのカーテンのある窓。ここはハルカの世界の自分の部屋だった。

「もしかして……帰って……もしかして、全部夢だったのかな？」

目覚めたら自分の部屋。そう考えたらもしかして、今までの出来事は全部夢だったのかもしれないと思った。

剣と魔法の世界 そんな世界があるはずがない。

「なんか、少し疲れてるみたい……もう少し寝よ」

そう言っただけハルカは深い眠りに落ちた。

静かな寝息を立てるハルカ。

ハルカの夢のような冒険は終わった。でも、本当に夢だったのか？

もし、あの出来事が現実だったならば、そのことはハルカの

“身体”が身に沁みて覚えていることだろう。

F i n
……
？